

日本ルワンダ学生会議  
第7回本会議  
活動報告書

2011年12月19日－2012年1月7日



## はじめに

『日本ルワンダ学生会議 第7回本会議』の報告書をお手にとって頂き、ありがとうございます。

この報告書を通して、この度の本会議の活動を皆様にご報告できることを非常に嬉しく思います。

日本では3回目の開催を迎えたこの度の第7回本会議ではルワンダ側メンバーを5人招致し、東京、長崎、大阪の3都市で活動を行いました。両国のメンバーが激しい議論を交わした昨年の第5回本会議の反省を生かし、各企画の充実度を高める努力を行いました。

20日間にわたる本会議で日本人メンバーとルワンダ人メンバーがともに協力しお互いの国を学び、そして将来を考えることに一生懸命に取り組みました。議論のみならず寝食を共にすることでさらに絆は深まり、一人ひとりが持つ「相互理解」の理念を軸にかけがえない時間を過ごしたと言えるでしょう。

報告書を通して、日本とルワンダ、そして世界について視野を広げていただく機会となれば幸いです。

最後になりましたが、企画の実現にご協力いただきました皆様に、この場を借りて御礼申し上げます。

2012年3月  
日本ルワンダ学生会議  
メンバー一同

# 日本ルワンダ学生会議 第7回本会議

## 日本招致報告書

<目次>

はじめに.....3

### 【序章】

---

日本側代表挨拶.....7

ルワンダ側代表挨拶.....8

関係者挨拶.....9

日本ルワンダ学生会議団体紹介.....10

ルワンダ共和国基礎情報.....13

### 【第一章】 第7回本会議 事業概要

---

日本ルワンダ学生会議 第7回本会議 概要・目的.....20

日本ルワンダ学生会議 第7回本会議 スケジュール.....21

### 【第二章】 日本招致活動報告

---

#### 東京

国内交流企画（小学校訪問）.....24

ルワンダカフェ.....27

カルチュラルイベント.....31

#### 長崎

被爆体験講話.....36

原爆資料館.....38

さるく（アンゼラスの鐘の丘を訪ねて）.....41

さるく（長崎は今日も異国だった）.....43

ブライアン・バークガフニ教授による講義.....46

長崎・ルワンダ交流会.....51

#### 大阪

釜ヶ崎散策.....56

炊き出し.....59

夜回り.....60

紙芝居劇むすび.....63

総合ディスカッション.....65

## 【第三章】学生会議、グループワーク報告

---

### 長崎

浦上天主堂.....	70
さるく.....	71
長崎の復興と平和教育.....	72
観光業の功罪.....	75

### 大阪

ホームレス問題.....	79
東日本大震災.....	80

### 東京

The Death Penalty.....	83
フツとツチは民族か.....	86
女性の権利の向上と男女平等.....	89
日本が発展した理由.....	91
ルワンダの文化.....	94
新潟水俣病.....	96
日本の電力業について.....	97
日本とルワンダの比較.....	99
国の発展における大学生の役割.....	100

### グループワーク・プロジェクトワーク

グループワーク・プロジェクトワーク概要.....	105
平和教育.....	106
心の貧困.....	110
Development.....	112

## 【第四章】参加者感想

---

相曾 智弘 中央大学経済学部 2年.....	118
乾 敏恵 同志社大学大学院 1年.....	119
今泉 奏 大阪大学外国語学部 2年.....	119
岩井 天音 国際基督教大学 3年.....	121
大山 剛弘 早稲田大学理工学部 4年.....	123
河合 俊行 早稲田大学政治経済学部 3年.....	124
久保 唯香 早稲田大学文化構想学部 2年.....	126

小坂 弘奈 フェリス女学院大学 1年.....	127
品川 正之介 早稲田大学教育学部 2年.....	128
嶋田康平 早稲田大学法学部 2年.....	130
滝田 知子 慶応義塾大学法学部 2年.....	130
中山 康平 早稲田大学国際教養学部 3年.....	131
永井 陽右 早稲田大学教育学部 1年.....	133
秦 七愛 多摩美術大学美術学部 3年.....	134
日高 佐倭子 大阪大学人間科学部 1年.....	135
星野 真希 学習院女子大学国際文化交流学部 1年.....	135
満越 裕馬 東京大学教養学部 4年.....	137
山崎 暢子 関西学院大学法学部 3年.....	138
Alfred NTAGANDA National University of Rwanda.....	141
Eugene Mazimpaka National University of Rwanda.....	141
KanezaNadine National University of Rwanda.....	142
Ineza Gerardine National University of Rwanda.....	142
Theogene Majyambere National University of Rwanda.....	144

## 【第五章】付録

---

### コラム

The 棒.....	35
クリスマスと日本ルワンダ学生会議。.....	55
「楽しすぎて…」.....	69
ドンベの歯ものがたり.....	80
お正月.....	84
大使宅でのランチ.....	106
AKIBA☆PANIC.....	119
メディア掲載.....	146
後援.....	150
助成団体様.....	150
ご協力いただいた方々.....	150
写真館.....	152
おわりに.....	154

## 日本側代表挨拶

日本ルワンダ学生会議代表の国際基督教大学教養学部 3 年、岩井天音と申します。この度「日本ルワンダ学生会議 第 7 回本会議」で事業責任者を務めました。長い間準備をしていた企画が無事に終了したことを、大変嬉しく思います。

当団体にとってルワンダ人学生日本招致事業は 3 回目となり、3 年間で延べ 15 名の学生を日本に招聘してきました。「継続性」は、日本と遠く離れたルワンダの学生を繋ぐ活動をより効果的なものにするために、大変重要だと考えています。3 年間連続で日本招致事業を遂行できたことは、今後の両国の関係にも少なからず影響を与えられたのではないかと感じております。

しかし、3 回目を迎えるにあたり、多くの課題があったことも事実です。特に、個々の企画の充実度については前回の日本招致事業の際に、ルワンダ人メンバーからも日本人メンバーからも指摘されていた問題点でありました。ルワンダ人が日本に渡航できる貴重な機会に、ただの社会科見学で終わらない、双方にとって深く学べる企画が当事業に求められていたのです。結果的に個々のメンバーの努力により、この目的は達成されたのではないかと感じています。第 7 回本会議で訪れた長崎と大阪では、「その土地だからこそ出来る企画」を実施することが出来ました。ぜひ詳細を報告書の本編でご覧下さい。

会議期間中にルワンダ人メンバー・日本人メンバーが多くの笑顔を見せてくれたことは、事業責任者として何よりも喜びでした。第 7 回本会議を一言で表すならば、陳腐な表現ではありますが「楽しかった」。新たな訪問先、新たな出会い、新たな学び——第 7 回本会議で経験した一瞬一瞬を大切に過ごすことが出来たおかげで、そう感じられるのではないかと考えています。また、今回の招致事業では、コンサート・小学校訪問・長崎での交流会など一般市民の方が参加する機会も多くありました。活動の中で出会った方々が、ルワンダ人との出会いを通して何かを感じて頂けたのであれば、この上嬉しいことはございません。

2011 年 2 月に準備を始めた下見から本会議が終了するまでの一年間たくさんの方に協力やアドバイスを頂きました。中には厳しいご意見もあり、私達の活動を見直すきっかけになりました。当事業の遂行にあたりご協力をいただいたすべての方に感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。今度も日本ルワンダ学生会議は相互理解の理念の下、様々な活動に取り組んでいきます。

日本ルワンダ学生会議 第 6 代代表  
岩井天音

## ルワンダ側代表挨拶

第7回本会議の準備を始めた当初、正直この企画の実現は難しいと私は考えていました。ルワンダで学校の年間のスケジュールが変更され冬休みが例年通りの日程から変わってしまったため、来日できないのではないかと心配していたのです。しかし、無事に日本への渡航が叶い十分に準備された企画に参加することができました。

この本会議の成功を振り返って一言で表現するなら、私は「団結は力なり」と言わせていただきたいです。長崎、大阪、横浜、東京、その他にも多くの場所を訪れてメンバーが互いに尊重し合いながら共に活動しました。

過去の第五回や第六回と比べて、今回の会議は私にとって「特別」でした。例えば、釜ヶ崎で夜回りをしてホームレスの人々と話したとき、若者や学生であっても力を合わせれば世界を変えることができると感じたからです。

また、長崎で「さるく」をした経験はルワンダ人である私たちにとって大きな意味を持ちました。長崎の人々が原爆で破壊された街をあれほど美しくてロマンチックな街に変えてきたのを見て、ルワンダも同じように素敵な国にすることができるのではないかと自分たちに問いかけました。また、12月24日に山脇教授の講演を聞いて原爆の前後の街の歴史について学べたことも興味深かったです。そして被爆者の方のお話を聞いて、今を生きる若者に歴史を語りついでいくことの大切さについて考えました。

以上に述べたことは第七回本会議で行われた活動のほんの一部にすぎません。

ここに全ての感想を書く事はできないので、是非本報告書で私たちが各地で学んだものについて読んでいただきたいです。

日本ルワンダ学生会議 第3期代表

Alfred Ntaganda

訳：海原早紀



## 関係者挨拶

日本ルワンダ学生会議（JRYC）第7回本会議報告書を手にとっていただき、ありがとうございます。

JRYCは2005年に早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）の主催プロジェクトとして発足した「ルワンダ・プロジェクト」をその前身としています。担当教員である私が学生チームとともに活動計画を立て、2006年3月、8月、2007年2月に、ルワンダで学生交流、イベント実施、紛争関連の視察などを行ってきました。2007年4月からはWAVOC公認プロジェクトとして、それまでプロジェクトに参加してきた学生が中心となって、学生主体の活動を展開するようになりました。「ルワンダ・プロジェクト」時代から、ルワンダという国の歴史や文化に関心を持つ様々な大学の学生たちがたくさん関わってきましたが、あまりに急激に拡大したために、当初は「要」となる活動理念がはっきりとしないまま（まったくなかったわけでもないのですが）、ともあれ形にしてきました。そして学生主体に活動を引き継いだ後、2008年に「日本ルワンダ学生会議」と名を改め、彼らが到達した理念は「相互理解」。これは団体の案内にもある通り、それまでの参加者が現地のジェノサイド追悼施設に掲げられた横断幕の言葉にインスパイアされたものです。それはぽっと出てきた抽象的な理念に基づいて活動するのではなく、それまでの様々な実践と長い議論を経て昇華されたものということです。先日、昨年（2011年）に駐日大使として着任されたムリガンデ大使にお会いしましたが、その時にも大使は、「日本ではアフリカについてマイナスイメージが強い」とおっしゃられ、学生を含む様々なレベルの人的交流の大切さについて語っておられました。またムリガンデ大使は早稲田大学の鎌田総長を表敬訪問してくださいました。日本とアフリカというと、政府間ODA、民間企業の投資、NGOの支援活動といった関係が主でしたが、大学や学生もまた、両者を結ぶ役割を果たせるだろうと思います。

そして最後に、このJRYCの活動は、開発や平和への実践や研究を担う人物を育成する大きな動機付けとなっていることを強調したいと思います。「ルワンダ・プロジェクト」時代から、当時の参加者からJICAや青年海外協力隊、国連ボランティアとして開発途上国や紛争経験国で活動する人物を輩出しています。また学部卒業後に海外の大学院で開発や平和について研究する学生も多くいます。企業人として国際的に活躍する人もいます。彼ら/彼女らの多くが、ルワンダでの体験が大きな動機づけになっていることを語ってくれます。

最近では「グローバル人材」を育成する必要性が叫ばれる一方、若者は「内向き傾向」になっていると良く聞きます。しかし現場での体験を通じて目と心を大きく開いた学生は、この地球の上を軽やかに飛び交うようになるのです。

小峯茂嗣

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）客員准教授

# 日本ルワンダ学生会議団体紹介

## <略歴>

2005年10月	早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)が主催するスタディーツアーの形でルワンダ・プロジェクトがスタート
2008年9月	ルワンダにて第1回本会議を開催
2009年3月	団体名をルワンダ・プロジェクトから日本ルワンダ学生会議に改称
同年9月	ルワンダにて第2回本会議を開催
同年12月	日本にて第3回本会議を開催
2010年1月	日本ルワンダ学生会議関西支部発足
同年8月	ルワンダにて第4回本会議を開催
同年12月	日本にて第5回本会議を開催
2011年8月	ルワンダにて第6回本会議を開催
同年12月	日本にて第7回本会議を開催

## <主な活動内容>

- ・ルワンダへの渡航
- ・日本への招致
- ・週1回の定期ミーティングの開催
- ・勉強会
- ・講演会の開催
- ・報告会の開催
- ・各種イベントへの参加

## <構成人数> (2012年3月現在)

日本側メンバー 22名 (関東18名、関西4名)

ルワンダ側メンバー30名

## <活動理念>

虐殺が行われた教会の壁にかけられている一枚の布には次のような言葉が書かれています。

「あなたが私を知っていたら、あなたがあなた自身を知っていたら、こんなことは起きなかつただろう」

ルワンダにおいて、情報の主体的入手と、偏見を捨てた相互理解は非常に大きな意味を持ちます。我々にとって、それは人類の悲劇から目をそむけたという自責の念に対し、相

手を理解し自分を伝えるという地道な活動からアプローチしようとするものです。そしてそれは紛争・貧困などの社会問題にのみ目を向けていくことを意味するものではないでしょう。国際協力において、問題ありきで先進国として支援することばかりを考えていては、依存関係をつくり返って発展を阻害してしまうことすらあり得ます。途上国が真に自律し主体的に自らの豊かさを築いていくには、ともに社会問題を考え取り組む「仲間」が必要なのです。我々は実際に生活している人々と交流し、彼らの現状・価値観・人生を知り、相互理解・尊重に基づき信頼関係を築く中で、ルワンダの‘Never again’に対し当事者意識を養うばかりでなく、「自由・平等・尊厳・持続可能性・寛容」の視座から真に豊かで平和な社会を考察し行動していく主体となるはずです。

近年世界で頻発する紛争における共通課題として宗教・民族対立があります。ルワンダにおいても植民地分離政策と虐殺におけるプロパガンダは人々の間に「憎しみ」と「偏見」を作ってしまった。ルワンダの惨劇に対峙しようとする私たちは、『偏見』を取り除き寛容な『人間同士』の関係づくりがひいては平和な社会を構築する」という信念から、学生会議という形で「相互理解」を理念に交流しています。会議では日本・ルワンダ両国の歴史や社会問題を広く議論し双方をより深く理解することで、両国のみならず人類の共通課題に向き合っていきます。

#### <団体理念の継承>

当団体は以下のような方法で学生会議としての継続性、発展を確保する。ユネスコ憲章には以下のような文言がある。

「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。ここに終りを告げた恐るべき大戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理を否認し、これらの原理の代わりに、無知と偏見を通じて人間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能にされた戦争であった。文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つすべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果さなければならない神聖な義務である。」

ルワンダにおいては、民族対立による偏見や不寛容の心が虐殺という悲惨な結果に表れてしまった。我々の活動は「日本」や「ルワンダ」に対する偏見を取り除き、寛容な人間関係を築くことが恒久的な平和を築く、という視点から学生会議という形で相互理解を理念に交流している。実際にルワンダや日本で両国の学生が互いの文化や生活を知り、両国や世界各地で起こる諸問題に対する認識を共有することで遠く離れた国の人々との信頼関係を築くことができると考えている。この理念は常に継承されるものであり、新たにメンバーを加える際にはこれに同意していただくものとする。

<公認>

- ・ 駐日本ルワンダ共和国大使館
- ・ アフリカ平和再建委員会（ARC） 小峯茂嗣
- ・ 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）

<連絡先>

メールアドレス：[japan.rwanda@gmail.com](mailto:japan.rwanda@gmail.com)

ホームページ：<http://jp-rw.jimdo.com/>

# ルワンダ共和国基礎情報

(外務省ホームページより引用 2012年3月現在)

正式名称：ルワンダ共和国 (Republic of Rwanda)

## 一般事情

<「千の丘の国」と呼ばれる自然豊かな内陸国>

### 1.面積

2.63 万平方キロメートル

### 2.人口

1,030 万人 (2010 年、UNFPA)

### 3.首都

キガリ

### 4.言語

キニアルワンダ語、英語、仏語

### 5.宗教

カトリック 57%、プロテスタント 26%、アドヴェンティスト 11%、イスラム教 4.6%等

### 6.略史

年月	略史
17 世紀	ルワンダ王国建国
1889 年	ドイツ保護領 (第一次大戦後はベルギーの信託統治領)
1961 年	王政に関する国民投票 (共和制樹立を承認) 議会在カイバンダを大統領に選出
1962 年	ベルギーより独立
1973 年	クーデター (ハビヤリマナ少将が大統領就任)
1990 年 10 月	ルワンダ愛国戦線 (RPF) による北部侵攻
1993 年 8 月	アルーシャ和平合意
1994 年 4 月	ハビヤリマナ大統領暗殺事件発生をきっかけに 「ルワンダ大虐殺」発生 (~1994 年 6 月)
1994 年 7 月	ルワンダ愛国戦線 (RPF) が全土を完全制圧、新政権樹立 (ビジムング大統領、カガメ副大統領就任)
2000 年 3 月	ビジムング大統領辞任
2000 年 4 月	カガメ副大統領が大統領に就任
2003 年 8 月	複数候補者による初の大統領選挙でカガメ大統領当選
2003 年 9-10 月	上院・下院議員選挙 (与党 RPF の勝利)
2008 年 9 月	下院議員選挙 (与党 RPF の勝利)

## 政治体制・内政

### 1.政体

共和制

### 2.元首

ポール・カガメ大統領

### 3.議会

上院（26議席）、下院（80議席）

### 4.政府

(1) 首相 ピエール・ダミアン・ハバムレミ (Rt. Hon. Pierre Damien HABUMUREMYI)

(2) 外相 ルイズ・ムシキワボ (Hon. Louise MUSHIKIWABO)

### 5.内政

1962年の独立以前より、フツ族（全人口の85%）とツチ族（同14%）の抗争が繰り返されていたが、独立後多数派のフツ族が政権を掌握し、少数派のツチ族を迫害する事件が度々発生していた。1990年に独立前後からウガンダに避難していたツチ族が主体のルワンダ愛国戦線がルワンダに武力侵攻し、フツ族政権との間で内戦が勃発した。1993年8月にアルーシャ和平合意が成立し、右合意を受け、国連は停戦監視を任務とする「国連ルワンダ支援団（UNAMIR）」を派遣したが、1994年4月のハビヤリマナ大統領暗殺を契機に、フツ族過激派によるツチ族及びフツ族穏健派の大虐殺が始まり、同年6月までの3ヶ月間に犠牲者は80～100万人に達した。

1994年7月、ルワンダ愛国戦線がフツ族過激派を武力で打倒すると、ビジムング大統領（フツ族）、カガメ副大統領による新政権が成立。同政権は大虐殺の爪痕を乗り越えようと、出身部族を示す身分証明書の廃止（1994年）、遺産相続制度改革（女性の遺産相続を許可）（1999年）、国民和解委員会及び国民事件委員会の設置（1999年）等、国民融和・和解のための努力を行っている。

1999年3月には、1994年の虐殺以降初めての選挙となる地区レベル選挙（市町村レベルより下位）を実施、2001年3月には市町村レベル選挙を実施、2003年8月には大統領選挙が実施されカガメ大統領が当選。政治の民主化が進展している。同年9、10月の上院・下院議員選挙及び2008年9月の下院議員選挙では与党RPFが勝利した。

カガメ大統領は汚職対策に力を入れており、他のアフリカ諸国に比して、汚職の少なさ、治安の良さは特筆される。

## 外交・国防

### 1.外交基本方針

従来非同盟中立主義が基本路線。冷戦時代は東西両陣営と友好関係を維持、現在は、経済開発のため先進諸国との協力を重点を置く。東アフリカ共同体（EAC）及び東南部アフ

リカ共同市場（COMESA）メンバー。コモンウェルス加盟（2009年11月）。

## 2.軍事力

- (1) 予算 7,600 万ドル（2009年）
- (2) 兵役 志願制
- (3) 兵力 3万3,000人（2009年）

## 経済

### 1.主要産業

農業（コーヒー、茶等）

### 2.GDP

56.3 億ドル（2010年）

### 3.一人当たり GNI

520 ドル（2010年）

### 4.経済成長率

7.5%（2010年）

### 5.物価上昇率

2.1%（2010年）

### 6.総貿易額

- (1) 輸出 193 百万ドル（2009年）
- (2) 輸入 961 百万ドル（2009年）

### 7.主要貿易品目

- (1) 輸出 コーヒー、茶、錫
- (2) 輸入 資本財、半加工品、エネルギー財、消費財

### 8.主要貿易相手国

- (1) 輸出 ケニア、コンゴ民主共和国、タイ、中国（2009年）
- (2) 輸入 ケニア、ウガンダ、中国、アラブ首長国連邦

### 9.通貨

ルワンダ・フラン

### 10.為替レート

1 ドル=598 ルワンダ・フラン

### 11.経済概況

(1) 農林漁業が GDP の 40%以上、労働人口の 90%を占め、多くの農民が小規模農地を所有。主要作物はコーヒー及び茶（輸出収入の 60%）であり、高品質化により国際競争力を強化する政策をとっている。一方で、内陸国のために輸送費が高いという問題も抱える。

(2) 1980年代は、構造調整計画を実施し経済の再建に努めたが、内戦勃発以降はマイナス成長、特に1994年の大虐殺で更に壊滅的打撃を受けた。その後、農業生産の堅実な回復（1998年には内戦前の水準を回復）、ドナー国からの援助、健全な経済政策により1999年

までに GDP は内戦前の水準に回復した。

(3) ルワンダ政府は、1996 年に「公共投資計画」を、2000 年に 20 年後の経済達成目標を定める「VISION2020」を、2002 年には「貧困削減戦略文書完全版 (F-PRSP)」を、また、2007 年には、第 2 次世代 PRSP となる経済開発貧困削減戦略 (EDPRS) を策定し、これら戦略等を基軸とした経済政策を実施している。2000 年 12 月には、拡大 HIPC イニシアティブの決定時点に達し、2005 年 4 月に完了時点に到達している。

(4) カガメ大統領は、汚職対策にも力を入れており、グッドガバナンスの模範国として世銀等からの評価も高い。

## 経済協力

<二国間援助の本格再開>

### 1.日本の援助実績

- |                                 |           |
|---------------------------------|-----------|
| (1) 有償資金協力 (2009 年度まで、EN ベース)   | 46.49 億円  |
| (2) 無償資金協力 (2009 年度まで、EN ベース)   | 342.45 億円 |
| (3) 技術協力実績 (2009 年度まで、JICA ベース) | 58.44 億円  |

### 2.主要援助国 (2008 年)

- (1) 米 (2) 英 (3) ベルギー (4) オランダ (5) スペイン

## 二国間関係

<極めて親日的>

### 1.政治関係

(1) 日本は、ルワンダが独立した 1962 年 7 月に国家承認。2009 年末まで在ケニア日本大使館がルワンダを兼轄していたが、2010 年 1 月に在ルワンダ日本大使館開館。ルワンダは 1979 年 5 月に在京大使館を開設。2000 年 9 月に閉鎖したが、2005 年 1 月に再開。

(2) 1994 年 4~6 月のルワンダ大虐殺により国外に避難したルワンダ難民を救援するため、日本は、同年 9~12 月の間、国際平和協力法に基づき、ザイール共和国 (当時、現コンゴ民主共和国) のゴマ 等に約 400 名の難民救援隊・空輸隊等を派遣した。

### 2.経済関係 (対日貿易)

#### (1) 貿易額

輸出 4,700 万円 (2010 年)

輸入 5.8 億円 (2010 年)

#### (2) 主要品目

輸出 コーヒー、バッグ類

輸入 自動車、二輪、機械

### 3.文化関係

国営テレビ局に対し番組ソフトを供与。

### 4.在留邦人数

82 人 (2010 年 10 月現在)



## 5.在日当該国人数

---

21人（2010年）

※日本ルワンダ学生会議はアフリカ研究者の方の意見等を踏まえ、本報告書では「ツチ」「フツ」と表現します。



## 【第一章】

# 日本ルワンダ学生会議 第7回本会議 事業全体概要

---

第7回本会議	概要・目的.....	20
第7回本会議	スケジュール.....	21

## 第7回本会議 概要・目的

### 【開催時期・期間】

2011年12月19日（月）～2012年1月7日（土）、計20日間

### 【開催場所】

東京・長崎・大阪

### 【事業概要】

日本ルワンダ学生会議ルワンダ側メンバー5名を日本に招致。長崎では、原爆投下の事実だけではないキリスト教と関係深い街の歴史を知ることにより、改めて原爆投下という悲惨な歴史の意味を問う。大阪では、釜ヶ崎を中心にフィールドワークを行い、ルワンダ人学生のイメージする貧困とは違うであろう「日本の貧困」の在り方について考える。そして最後に、東京でグループワークを実施。長崎・大阪での活動を通して得た学びを更に充実したものにするための作業である。加えて、東京ではメンバーが広く意見を交換しあう「学生会議」や、ルワンダやその文化を日本の一般市民に幅広く紹介することを目的として「カルチュラルイベント」「公立小学校訪問」を行う。

### 【事業目的】

1. 日本、ルワンダ双方の学生が自国の社会や文化の様相を紹介することで、両国についての深い理解を得る。また、これは両国の学生が自国について再認識し、理解を深めることでもある。
2. 日本とルワンダの学生が20日間の共同生活をする中で、友情を育み、信頼・協力関係を構築する。豊かな人間関係を築くことによって、相互理解の第一歩とする。
3. お互いの国の社会問題に対して理解を深め共に考えることで、主体的に行動できる人材を育むきっかけを作る。
4. 当団体内部間での交流だけではなく、ルワンダ人学生によるコンサート、小学校訪問などを行うことにより、日本の幅広い層を対象とした文化交流を実現する。
5. 事業終了後の報告書・ドキュメンタリー映像の作成、報告会の開催を通して日本における市民レベルでのルワンダへの理解を促す。また、ルワンダ側メンバーも事後活動を行い、ルワンダにおける日本への理解を促す。

## 第7回本会議全体スケジュール

実施日	活動	地域・場所
12月19日	ルワンダ側メンバー5人来日	東京・成田空港
12月20日	オリエンテーション 早稲田大学キャンパスツアー	東京・早稲田大学
12月21日	小学校訪問 山田満教授の研究会見学 ICCルワンダカフェ イベント	東京・山崎小学校 早稲田大学
12月22日	カルチュラルイベントリハーサル カルチュラルイベント開催	東京・早稲田大学
12月23日	移動(東京→長崎)	
12月24日	被爆者の方のお話 原爆資料館見学 長崎プレゼンテーション さるく(アンゼラスの丘の鐘をたずねて)	長崎・原爆資料館
12月25日	さるく(長崎は今日も異国だった) クリスマスミサ参加	長崎
12月26日	パークガフニ教授による講義 長崎大学の学生と交流会 移動(長崎→京都)	長崎・長崎大学
12月27日	移動(京都→大阪) 休息日	大阪
12月28日	釜ヶ崎街歩き 学生会議 炊き出し準備・参加 夜回り参加	大阪・釜ヶ崎 西成プラザ
12月29日	学生会議 即興楽団 UDje(交流企画) 炊き出し参加 夜回り参加	大阪・西成プラザ 釜ヶ崎
12月30日	紙芝居劇むすび(交流企画) 学生会議 観光 移動(大阪→東京)	大阪・西成プラザ
12月31日	観光、休息日	東京

1月1日	日本のお正月体験	東京・メンバー宅にてホームステイ
1月2日	ルワンダ駐日大使と会食	東京
1月3日	Future of JRYC	東京・ARC
1月4日	学生会議	東京・国立オリンピック記念青少年総合センター
1月5日	学生会議 グループワーク	同上
1月6日	グループワーク	同上
1月7日	グループワーク ルワンダ側メンバー日本出国	同上 成田空港

## 【第二章】

# 日本ルワンダ学生会議 第7回本会議 日本招致活動報告

---

### 東京

1. 国内交流企画（小学校訪問） .....24
2. ルワンダカフェ.....27
3. カルチュラルイベント.....31

### 長崎

4. 被爆体験講話.....36
5. 原爆資料館.....38
6. さるく（アンゼラスの鐘の丘を訪ねて） .....41
7. さるく（長崎は今日も異国だった） .....43
8. ブライアン・バークガフニ教授による講義.....46
9. 長崎・ルワンダ交流会.....51

### 大阪

10. 釜ヶ崎散策.....56
11. 炊き出し.....59
12. 夜回り.....60
13. 紙芝居劇むすび.....63
14. 総合ディスカッション.....65

# 東京

## 【スケジュール】

実施日	活動	地域・場所
12/19	ルワンダ側メンバー5人来日	成田空港
12/20	オリエンテーション 早稲田大学キャンパスツアー	早稲田大学
12/21	小学校訪問 山田満教授の研究会見学 ルワンダカフェ イベント	山崎小学校 早稲田大学
12/22	カルチュラルイベントリハーサル カルチュラルイベント開催	早稲田大学

# 国内交流企画

## 一 開発教育実践

担当：久保 唯香



### 1. はじめに

この企画は、鎌倉市立山崎小学校の6年生と日本ルワンダ学生会議(JRYC)に所属する大学生が共にアフリカ、ルワンダの文化や歴史を学び、多様性について考えるための企画である。JRYCの交流が持つ可能性をもっと多くの世代に広げ、平和な社会づくりに貢献したいと考えた。

平和を考えるためのワークショップを通して、鎌倉市の小学生の心の中に「アフリカ」「ルワンダ」という新たな可能性を構築することを目指す。

### 2. 日程

2011年7月7日(木)第1回授業『アフリカについて知ろう!』

2011年11月18日(金)第2回授業『ルワンダを知ろう!—ルワンダ千の丘から—』

2011年12月21日(水)第3回授業

※日本ルワンダ学生会議からの参加者は各回6名。いずれも鎌倉市立山崎小学校6年生を対象とした。

### 3. 概要

第1回『アフリカについて知ろう!』

世界7カ国の写真を用いてマッチングゲームを



行った。写真はアメリカ、中国、日本という比較的親しみやすい国に加え、ガーナ、ケニア、モロッコ、そしてルワンダのものを使用した。約40人のクラスを5グループに分け、それぞれのグループには異なるテーマを与えた。テーマは「家」「自然」「住居」「街並み」「人」。最後には世界地図に写真を張り付けて学んだことを全体に共有した。

小学生たちは、日本、中国、アメリカの写真は容易に判別できたが、アフリカ地域の写真は難しかった。アフリカ地域をひとくくりに考えていたことを自覚した。また、アフリカの文化や風景は確かに多様とはいえ、特にサハラ以南の文化は共通点が多く、判別が難しかった。中国・日本間の距離と変わらなくても、ケニア・ルワンダ・ガーナの人や家には日本と中国のような決定的な違いがみられなかった。そのような文化の違いの違いも考えさせられた。小学生は食文化に強い興味を示していた。人に判別は大学生にも難しく、小学生からは黒人に対する固定的な見方も聞かれた。

## 第2回『ルワンダを知ろう!—ルワンダ千の丘から』

授業を2部構成とした。第1部では、マンガを利用してルワンダの歴史、特にジェノサイドを学んだ。ルワンダの植民国・ベルギーは人々をツチ、フツ、トゥワの3つに分類した。1994年、ツチとフツの間に大虐殺が勃発。それから17年経った今、現地の子どもたちの抱える心の闇とは。吹き出しの中にセリフを入れるワークを行った。

第2部では趣向を変え、すごろくゲームを行った。日本人とルワンダ人大学生の生活にまつわるクイズを出し、正解したらコマを進めるゲームである。それぞれ効果的にルワンダを伝えることができた。多様な解釈の仕方ができてきて、興味深かった。

## 第3回

2部構成とした。半分はルワンダ人によるダンスコンサート、もう半分は小グループでのトークセ

ッション。地べたに座って話すことで、顔と身体の距離が近くなり、すぐに溶け込むことができた。小学生も表情が硬かったが、徐々に打ち解けることができた。ルワンダ人も時間とともに調子があがった。笑顔が印象的だった。



### 1. 活動実績

感想（小学生より）

「今日1時間目にルワンダの学習がありました。ルワンダの人たちが来てくれました。最初の話し合いでルワンダの人たちのふだんの生活の事が少しわかったような感じがしました。その次にルワンダの人たちがルワンダのおどりをおどってくれました。みんなすごいはでな衣装でびっくりしました。最後やさしく手をつないでくれました。僕のお母さんもこれくらいやさしいといいなあとおもいました。今日のはとってもたのしかったです。また、いつかあいたいです。」

「今日は3回目のルワンダの活動がありました。ルワンダからのりゅう学生がきて、みんな

なで質問したり、自己紹介したりしました。そしてその後、ルワンダの人たちから、ルワンダのダンスを見せてくれました。衣装がおもしろくて、男の人が頭にかぶっていたものが長くてすごかったです。ルワンダの人達が足につけていたすずみみたいなのは「シャンシャン」となって、いい音で迫力がありました。今回でルワンダの活動は終わりだけど、3回の活動を通して、今まで知らなかったルワンダのこととか、ルワンダのあいさつがわかるようになってよかったです。またいつかルワンダの人に会えるといいです。」



### 参加者

その小学校は日本の（典型的な）住宅地に比べるとのどかな場所にあった。（中略）中にはルワンダに来てくれるという約束をしてくれた小学生やゴリラを見たいと言ってくれた小学生もいた。私は喜んで案内するつもりだ。それだけではなく、私たちは小学生から贈り物もらった。でも私自身はもっと特別な贈り物もらったのである。伝統ダンスの演舞中、私はひとつとなったクラスの中でドラムをたたくことができたからだ。（ルワンダ側メンバーMajyambere、久保訳）

# ルワンダカフェ

担当者：大山 剛弘

共催：早稲田大学 国際コミュニティセンター  
(ICC), Femme Cafe

## 1. 訪問日時・場所

日時：12月21日(水) 17:00-18:30

場所：早稲田大学 大隈ガーデンハウス 1F

## 2. 企画の目的・経緯

第一目的は、団体外の学生も交えたより広い学生間の繋がりがつくりの場となることとした。今回開催した早稲田大学には多くの留学生も在籍し、日本以外でも普段ルワンダの学生と接する機会の少ない国の学生との関係創造も目指した。

第二に、現在のルワンダ情勢や文化について学ぶことを目的とした。各種メディアで近年の経済成長や復興が取り上げられることも大分多くなってきたが、ルワンダに対しての94年の虐殺のイメージを未だに根強い。本企画では、ルワンダの現状を扱った映像や主要輸出物であるコーヒー、またルワンダ人学生の語りから、参加者と現在ルワンダの置かれる状況を議論・理解することも意図した。

本企画の発端は、ICCの学生スタッフリーダー斎藤さんに筆者がある海外研修プログラムで面識を持ったことに遡る。企画の2ヶ月程前から話し合いをもち「ルワンダ学生のフィーチャー」、「国内外を問わない多様な学生間の交流」という双方のノウハウを活かせる企画とすることとした。また以前から交流のあった、Femme Café(東京外国語大学の有志団体でルワンダコーヒーの普及に努める)にもご協力を頂き「ルワンダカフェ」の名に恥じない、コーヒー界で世界最高の権威であるカップオブエクセレンス受賞もしたルワンダの美味しいコーヒーを囲んで、リラックスした会となることを目指した。

## 3. 企画概要

プログラム：

17:00 開会のことば

(ICC 斎藤)

17:05 日本ルワンダ学生会議 団体紹介

(同団体代表 岩井)

17:10 ドキュメンタリー

“Rwanda 2010-light and shadow”上映

17:30 「ルワンダの大学生の日常について」

(ルワンダ学生 Ntaganda Alfred)

17:35 Femme Café 団体紹介

(同団体 廣本)

17:40 座談会

18:30 閉会のことば

(ICC 斎藤)

参加者：日本ルワンダ学生会議メンバー

(ルワンダ人 5人、日本人 8人)、ICC

スタッフの方々、Femme Caféの方々、

大学生参加者(41名)

言語：英語

## 4. 当日活動概要

### ①. 団体紹介

当団体・日本ルワンダ学生会議と Femme Café から団体紹介を行った。当団体については重複を避ける為にここでは説明を控える。Femme Café の紹介では、コーヒーというルワンダの特産品を通じて、日本におけるルワンダの、延いてはアフリカの理解を深めようという団体である旨が話されていた。詳しくは後記のウェブサイトをご覧頂ければと思うが、ルワンダ現地での調達から日本での広報まで精力的に行う姿勢からは「日本とアフリカの架け橋」になりたいという情熱が伝わってきた。

### ②. ドキュメンタリー上映、Alfred の語り

この映像は、元々2010年にルワンダ渡航を行った際の映像を「現在のルワンダ社会の光と影」と

いうテーマで編集したもので、今回は英語字幕を加えるなど再編集したものを上映した。

上映の理由は「虐殺」だけでない、刻々と姿を変え前進し続けるルワンダの姿を参加者に印象づけたかったからだ。進む都市化、コーヒー産業、第3の民族トゥワ(Twa)、虐殺当事者間での和解といったケースを取り上げたが、事後アンケートでも「新鮮だった」「衝撃的だった」「Very informative」など参加者に伝わるものが大きかった様だ。

この映像を見た上で、ルワンダ学生代表の Alfred に実際の学生生活について簡単に話してもらった。1万人以上の学生と共に寮に暮らし、昼は学食で食べ、サークルではダンス活動にも打ち込むなどと、映像とはまた違って学生として身近さを感じられるものであった。

#### □. 座談会

5名のルワンダ学生がそれぞれのテーブルに分かれ、参加者が彼らを囲むという形態で行った。また冒頭から Femme Café にコーヒーの提供も行って頂いた。声を交わしただけでもアメリカ、ウガンダ、シンガポール、など多くの国の学生が参加していた。座談会自体の感想は後に譲るが、「コーヒーをもっと飲みたかった」という声もアンケートに寄せられていた。



座談会の風景

## 5. 感想

【ICC 学生スタッフリーダー：斎藤愛里】

ICC は早稲田大学の一機関であり、主に留学生と日本人学生の国際交流を促進する目的のイベントをしている。ルワンダカフェを企画したきっかけは、私自身が日本ルワンダ学生会議に以前から興味があったからである。そして、はるばるルワンダから学生が来るんだったら、より多くの日本の学生に話をする機会を与えたいという単純な想いからイベントが生まれた。

イベント当日は日本人だけではなく、アフリカやアメリカからの留学生も参加した。参加者事後アンケートを見ると「ルワンダの生の声が聴けて良かった」や「普段ほとんど関わりを持ってないルワンダの方とお話できて新鮮だった」などと満足した声が多かった。私は初め、もっと多くの日本の学生にもルワンダと少しでも関わる機会を！と考えていたが、翌日の「こんにちは！ルワンダ」のトークセッションに行くと、ルワンダ人学生からも日本人学生と話せて良かったという嬉しい言葉があった。彼らが言っていたのは、「(昨日のルワンダカフェで大学生と話して、)大学生でも、『ルワンダと言えば虐殺』という認識があるのに驚いた」というようなことだった。

確かに、日本ルワンダ学生会議に所属しているメンバーは、事前学習などをして、(無論いい意味で)ルワンダにかける想いが大きいかもしれない。しかし、ICC のルワンダカフェに来る人は必ずしもそうではない。「コーヒー無料で飲めるならちょっと行ってみっか」の人だって居るかもしれないし、「ルワンダ？どこ？・・・遠いところから来るなー！話してみたいな！」みたいなやや軽いノリの人かもしれない。でも、それでいいのだ。ここに来て、実際に話してたくさん知ってもらおう。異文化なり、国際協力なり、平和についてなり、触れてみる初めの一步になればいいと考えている。

いい意味で、「普通」の日本の学生にルワンダのことを知ってもらい、そして考えてもらえる、い

いきっかけ作りになりうるイベントだと思う。またその逆も然りだ。ルワンダ人にとっても、「普通」の日本の学生が考えているルワンダ像を知り、そして彼らに事実を訴えかけることができるいい機会だ。

日本ルワンダ学生会議は対等な関係を目指してとてもいい活動をしていると思うが、自分たちの知識や見聞を深めるとともに、より多くの人間にルワンダや平和について知ってもらい、考えてもらいたくて小学校訪問などをしているとメンバーから聞いた。ICC のルワンダカフェのようなイベントは、その目指しているものに限りなく近いことができるのではないだろうか。参加者アンケートでもまたこのようなイベントをしてほしいとの声が多数あったので、ぜひ来年度もしたい。

【担当者：大山剛弘】

手短かに記すが、本企画は ICC・Femme Café との関係が無ければ、発想もされなかった。人と人との繋がりから、また繋がり連鎖が生まれていくのが手に取るように分るとても良いイベントであったと思う。この場を借りて ICC・斎藤さん、Femme Café 廣本さんはじめ協力いただいた全ての方々に改めて感謝の意を示したいと思いません。

【ルワンダメンバー:Ntaganda Alfred】

(訳：大山剛弘)

このイベントについて、ルワンダの良い面・悪い面の両方について語るドキュメンタリーを見られたことは重要であり、また個人的にもとても嬉しく感じたことを述べておきます。ともすると悪い面が取り上げられがちなので、多くの人々に「ルワンダ＝ジェノサイド」という意識が生まれてしまっており、私はそれに度々心を痛めてきたからです。

またルワンダの教育について説明する機会もあり、そこで他の学生たちはルワンダとルワンダの

教育について知る手がかりを得ていた様に思います。具体的にはルワンダの教育過程、

- ・ 2年間の幼児教育
- ・ 6年間の初等教育
- ・ 3年間ずつの中等教育（日本で中学校・高校に相当）
- ・ 4、5年間、理系や医学系では6年間の大学教育

といったことについて説明をしました。

(原文)

My comment here was that it was very important to watch the other movie talking to Rwanda me my self I was very happy to see your movie talking both good and bad histories of my country other than talking only bad history like other people do when showing history of Rwanda they only talk about genocide this has made peoples mind that Rwanda's meaning is genocide. And this has chocked me more times. By then I got chance of explaining Rwanda education system .where by other students got a small hint about Rwanda and Rwanda education systems. I talked about our education arrangement in Rwanda education system.

1.nursery (2yrs)

2. primary (6years)

3.secondary school

-junior high school s1,s2,s3 (3yrs)

s =stands for senior

-high schools s4,s5,s6(3yrs)

4.university level(generally 4 yrs and 5yrs to 6yrs in sciences courses and medicine)



コーヒーを嗜むメンバー

ルワンダでの大学生活を語る Alfred

【補足】 ICC 実施のアンケートより

◆参加者感想抜粋

”Great to learn something about Rwanda, today’s way of life and not only about the history of genocide.”

“心地よく話せる環境だった”

“何も事前知識なしで参加したのですが、最初のビデオがすごくまとめられていてよかったです。”

“コーヒーがおいしくてもっと飲みたかった。”

“Really interesting documentary and to exchange opinions.”

◆ イベントの満足度

(参加者 41 人中 21 人が回答)

Q.本日のイベントはいかがでしたか？

大変満足	7
満足	12
ふつう	2
不満	0
大変不満	0

# カルチュラルイベント

こんにちは、ルワンダ！-ジェノサイド後の社会を生きるルワンダ人学生の声-

担当者：相曾 智弘

## 1. 日時・場所

日時：2011年12月22日（木）

開場：17：00 開演 17：30 閉演 20：30

場所：早稲田大学大隈講堂小講堂

## 2. 企画の目的・経緯

ルワンダ・アフリカを対象とした、広く一般を対象としたイベントを開催することでより多くの人々がアフリカ・国際問題・社会問題を知り、来場者が何らかの行動を起こすきっかけを提供することを目的とする。ルワンダ・アフリカに関して身近な部分から理解することを目指す。交流会・ルワンダ人学生とのトークセッション・アフリカ音楽のパフォーマンスを行い、当イベントがその場限りの楽しいイベントに終始せず、来場者をも主体とする参加型のイベントとする。

## 3. 企画概要

イベント名：「こんにちは、ルワンダ！-ジェノサイド後の社会を生きるルワンダ人学生の声-」

公演内容：団体紹介、トークセッション、ダンス及び演奏

出演者：神田亜紀氏

SUGEE 氏

多摩美術大学ジャンベ部の皆さん

ルワンダ国立大学生

神谷伸彦氏

Femme Café

日本ルワンダ学生会議日本人メンバー

ブース出展団体：Femme Café

日本ルワンダ学生会議

参加費：無料

## 4. 当日活動報告

### ・開催にあたって

日本ルワンダ学生会議主催のコンサートイベントもルワンダ国立大学での開催を含め7回目となった。開催に関わっていただいた各関係者、各団体に感謝を申し上げたい。

さて、今回のコンサートでは、前回、前々回にテーマとして取り上げられた「平和」や「平和構築」から趣向を少し変えて身近な部分から来場者がルワンダ・アフリカを感じ、理解していくことに焦点を当てた。



### 第一部 交流会

第一部の交流会では小講堂内踊り場にて来場者とルワンダ人学生との交流機会を設けた。「ルワンダ」「コーヒー」を中心にアフリカの「今」を伝える Femme Café と日本ルワンダ学生会議がブース出展を行った。



## 第二部 ルワンダ人学生とのトークセッション



### ・日本ルワンダ学生会議と Femme Café の団体紹介

まず、日本ルワンダ学生会議代表、岩井天音により当団体の活動内容、ルワンダの基礎情報、歴史を紹介した。次に第一部の交流会でブース出展を行った Femme Café が団体紹介を行った。

### ・トークセッション

来日したルワンダ人学生 5 人、司会の神田亜紀氏、日本ルワンダ学生会議から中山康平を交えてトークセッションを行った。ジェノサイド後のルワンダ社会や和解をテーマに話を進め、加えて彼らの日常生活や将来の夢などについても語ってもらった。通訳として同じく日本ルワンダ学生会議から海原早紀、久保唯香、滝田知子、小坂弘奈が参加した。



## 第三部 パフォーマンス

### ・Majyambere による歌の披露

ルワンダ人メンバーの一人である Majyambere の歌の披露で第三部が始まった。彼は歌を歌うことが得意で、その歌声は会場を魅了した。SUGEE 氏が演奏を務めた。



### ・SUGEE 氏によるジャンベ演奏

SUGEE 氏は 2010 年にルワンダでのピースコンサートに正式に招致を受けるなど、日本人メンバー、ルワンダ人メンバーとも交流がある。今回も非常に心に響く楽曲を演奏してくださった。



### ・多摩美術大学ジャンベ部の皆さん

2009 年のコンサートから数えて今回で 3 回目の参加である。鮮やかな衣装を身に纏い、ジャンベのリズムに合わせて躍動的で活気あふれるダンス披露された。ジャンベが刻むリズムはアフリカ音楽の魅力を来場者に十分に伝えてくださった。





#### ・神谷伸彦氏によるエチオピアダンスの披露

学生時代に「NPO 法人日本エチオピア学生会議」を創設し代表理事を務めた、神谷氏がエチオピア渡航時に習得したエチオピアダンスを披露した。素早い動きとその見たことのないダンスの動きに大いに盛り上がった。ナレーターにはトークセッションにも参加した中山康平が務めた。後半では来場者も立って一緒に踊ることで一体感も感じられた。



#### ・INDANGAMCO によるルワンダ伝統舞踊の披露

ルワンダ人メンバーは INDANGAMUCO という大学のダンスグループに所属しており、ルワンダの伝統舞踊を披露してくれた。日本ではルワンダの伝統ダンスを生で目にする機会はほとんどないだろう。トークセッション後であったので、彼

らの歌やダンスに対する強い思いが感じられた。力強く、時には優しい華麗な動きにとっても魅了された。



#### ・コラボレーション

第三部でパフォーマンスを繰り広げた全出演者がステージ上でジャンベのリズムに合わせてコラボレーションを行った。ルワンダの伝統舞踊から西アフリカの伝統音楽のコラボレーションはまさにアフリカ音楽の融合を表していた。会場の雰囲気はとても楽しいものとなった。



### 5. 感想

#### 企画者

今回の企画はルワンダ・アフリカを身近に感じていただけるようなイベントに主眼を置いた。来場者の方々が少しでも関心を抱いていただけたなら企画に関わった者として嬉しく思う。企画にあ

たって自身の力不足を感じたことは大きな反省点である。

2009年に「日本とアフリカを文化でつなげる」をコンセプトとして始まったコンサートイベント。各年でテーマは違うものの、今後も多くの方にルワンダ・アフリカの良さを感じてもらえたらと思う。

最後に出演者、ブース出展団体、会場関係者、日本ルワンダ学生会議メンバー等、今回の企画にかかわってくださった方々に感謝の意を表したい。皆様の協力があって企画を無事成し遂げられたと強く感じる。今年も様々な方の支援、協力を得ることができた。時には迷惑をかけた節が少なからずあった。反省すべきところは反省し、次回以降のイベントをより良いものにしていきたい。

(相曽)

## 参加者

ルワンダを身近に感じてもらいたい。肌の色や、言葉の違いはあるものの、そんなことの向こうにある、彼ら自身を知ってほしい。そんな願いの中で、たくさんの方々の協力によりイベントを開催することが出来ました。あの日、あの場所では「ルワンダ」という国が、来場者の方々。イベント出演者、ブース出展者の方々。JRYCのメンバーを結びつけていました。その縁のきっかけを作れたことを嬉しく思います。

イベントは時間が押しすぎて、せっかく皆が練習したコラボ部分も短縮しなくてはいけませんでしたが、そこでナディーンが「踊るなら日本のダンス、削るならルワンダのほうよ」と言ったことが印象的でした。私は裏方で、本番を楽しむ、見る余裕はありませんでした。けれど、そこでルワンダの本当の声を聞いた気がします。そうした、ルワンダの気持ちはステージに現れていたと思います。

このイベントにいらしてくださった方々、かかわってくださった方々と、ルワンダとの距離が少

しでも縮まったのであれば、この催しは成功だったといえるでしょう。

ご支援下さった方々、協力してくれた方々、日本ルワンダ学生会議のメンバー、皆さん本当にありがとうございました。(秦)

まず、イベント名にとっても感銘を受けた。我々が何者かをしっかり示しているイベント名だ。下の写真を見てもらえば分かるが、ルワンダ人と日本人のコラボレーションはとても素晴らしかった。

イベント全体のねらいは、来場者にアフリカに対する関心を深めてもらい、何らかの行動につなげることだった。トークセッションでは、ルワンダの現実を受け止めてもらうのが一番の目的だった。きっと、アフリカやルワンダについて伝えることができただろう。パフォーマンスでは、とにかく来場に笑顔になってもらいたかった。来場者は皆、ルワンダの伝統ダンスを楽しんでくれたと思う。特に、日本人メンバーのお父さんが楽しそうにしている姿を見て、とてもうれしかった。ダンスを通じて友情の輪を広げることができたのが、何よりうれしかった。

忘れられないイベントを作ってくれた日本人たちに、心から感謝している。お互い協力し、学びあうことができた素晴らしい時間だった。

(ルワンダ側メンバーEugene、嶋田訳)



## コラム THE 棒

ルワンダンは今年もあの棒を持ってきて、そして持ってこなかったー。

ルワンダンは毎年ダンスで使うなんだか特殊そうな長めの棒をルワンダからはるばる持ってくる。去年はアドルフというメンバーが持ってきた。しかし、以前の本会議に参加したメンバーはこの棒を見たとき、非常にいやな予感がしたであろう。

というのもこの棒、いつもどこかに置き忘れられ、ないがしろにされるのである。去年は名古屋、広島に置き忘れられ、(意図的か不注意かは知りませんが笑)ダンスに使うのに棒ないじゃん!! やばいどうする!! 広島にあるとかイベントに間に合わないじゃん!! のような感じで非常に日本人メンバーハラハラしたものであった。(第5回本会議報告書コラム: アドルフの棒はなんだったのか参照)



今年も棒関連で問題が起きないか注意していたのだが、事件は起きた。東京での企画を終えて宿に帰る電車内、ルワンダ人と日本人メンバーみんなで談笑して和やかに帰っていた時であった。突然アルフレッドが神妙な面持ちで私を呼び出した。明日はダンスイベント・・・なんだか非常にいやな予感がする・・・。アルフは耳元でこう囁く。「聞いてくれ・・・棒が見つからないんだ・・・たぶん棒・・・コロの家(メンバー宅)に忘れてきちゃったんだよね・・・。」時刻は夜11時を過ぎているころだった。コロさんは就活生なので多忙、寝ているかもしれない。棒は明日の朝から

必要・・・。私は電車を飛び出してコロさんと連絡を何とかとって棒確保へ全力をささげる羽目になった。そしてこのせいで最寄り駅からの最終バスを逃し一時間歩いて帰宅という素敵なオマケもついてきた。

翌日あの棒を用いて壮大に踊る彼らを見てホッとしていたが、更なる置忘れ事件が起きないかまだまだ心配であった。しかし、その後事件は起きなかった。というのもあの棒、運ぶのが邪魔らしくてダンスイベントの後捨てたらしい。おいおいあれ大事なもので去年いったじゃないか!! 笑

(品川)

# 長崎

【スケジュール】

実施日	活動	地域・場所
12/23	移動(東京→長崎)	
12/24	被爆者の方のお話 原爆資料館見学 長崎プレゼンテーション さるく(アンゼラスの丘の鐘をたずねて)	原爆資料館 長崎市内
12/25	さるく(長崎は今日も異国だった) クリスマスミサ参加	長崎市内
12/26	パークガフニ教授による講義 長崎大学の学生と交流会 移動(長崎→京都)	長崎大学

# 被爆体験講話

担当者：満越 裕馬

## 1. 訪問日時・場所

日時：2011年12月24日(土)

場所：長崎県長崎市長崎原爆資料館

## 2. 企画の目的・経緯

山脇佳朗さんの被爆体験の話を伺うことを通じて被爆前夜、被爆直後の長崎の様子など長崎原爆について学ぶ。一方で、被爆継承における課題についても考える。

## 3. 企画概要・当日活動報告

長崎原爆資料館を見学する際に、長崎原爆被爆者である山脇佳朗さんから被爆経験、被爆継承についての話を伺った。

山脇さんは長崎で被爆継承のために自身の体験を語られている。当初は長崎平和推進協会から被爆体験を語る依頼を断っていた。つらい思い出を語ることによって思い出したくなかったからである。しかし語り部が減っている現状を受けて引き受けた。現在では修学旅行生などの国内の講演だけでなく、海外に向けて被爆経験を伝える機会も増えたそうである。イギリスで行われた講演ではイギリス人高校生に向けて講演された。今回の講演も英語で行われた

山脇さんは被爆当時11歳だった。家族は母と、三菱電機技師の父親、兄弟姉妹を含めて9人家族だった。山脇さんは原爆が投下されたとき、爆心地から約2km離れた自宅にいた。

帰ってこない父親を迎えに行くために工場に向かう途中で、山脇さんは熱線や爆風によって致命傷を受けた人々の惨状を目の

当たりにした。山脇さんの父親の工場は壊滅し、父親は亡くなっていた。

山脇さんはこのような被爆経験を次の世代に語り継ぐことを精力的に行っている。次の世代、特に戦争を知らない世代は被爆経験を過去のものだと考えてはいけない。人々を不幸にする戦争が二度と起こらないようにしなければならない。

日本人として日本の原爆被害の知識と理解はあるつもりであった。しかし私は日本の戦争被害をあくまで過去の事実として、自分とは関係のない過去の歴史の一断片として、捉えていたと今回の講演を通じて痛感した。山脇さんから伺った長崎の被爆当時の状況は、想像していた以上に悲惨であった。原爆当時の様子を追体験し、いかに戦争が人々を不幸にするか考えるきっかけとなった。

## 5. 感想

### 企画担当者

戦争を知らない世代である私達は、山脇さんのように戦争の被害を受けた世代の方々の話を伺い、それを自分の意志を持って汲み取り、世界や将来の世代に発信していかなければならない。また世界中で現在進行形で行われている戦争や内戦などについて、日本人としての経験、意志を基に考えていくことが重要であると痛感した。(満越)

### 参加者

山脇さんのお話の中で、ご自身のお父様が亡くなられ、燃やした時のことをお話してくれたが、自分の親が亡くなった時のことをリアルな描写も交え思い出しながらお話してくれたことに胸が痛くなったし、そ

のような話を聞かせていただいたことに対して責任感、というべきか敬意の念を抱いた。最近の人々は平和に対してあまりちゃんと考えていないのではないか、これからの若者や人々は平和のために何をしていけばいいのか、という質問に対し山脇さんは、特別なことはしなくてもいい、自分の好きなことや得意なことをしているときに、平和な心を持っていればそれだけで良いとおっしゃっていたのが印象的だった。個人的に思うことだが、たしかに今の日本で平和を声高に唱えて活動することは好まれないし、理想主義やまじめちゃんのようなレッテルを貼られる気がする。自分も、平和平和と唱えて活動することには違和感や恥ずかしさを感じるのもたしかである。一人ひとりがほんの少しでも平和な心を持って生きていくこと、これが大事なのだと思う。(品川)

世界史で登場する 1945 年第二次世界大戦の原爆投下の出来事以外の歴史についても学ぶことができた。長崎は原爆投下以前から外国人が多く住み、貿易で栄えた地であったことを学んだ。(Alfred、海原訳)



# 長崎原爆資料館

担当者：星野 真希

## 1. 訪問日時・場所

日時：12月24日(土) 11:30~13:00

場所：長崎原爆資料館

## 2. 企画の目的・経緯

長崎原爆資料館の資料を実際に見ることによって、原爆の惨状や悲惨さをより理解してもらい、平和についてより深く学んでほしいため。また、原爆を投下される過程に至った経緯などを知ってもらうことで、日本の戦争の歴史についても、学んでほしいため。

## 3. 訪問先概要

長崎原爆資料館の常設展には主に4つのブースに分かれている。「1945年8月9日」という原爆投下前の長崎の街や風景、市民生活を展示しているブースと、「原爆による被害」という原爆投下直後の長崎の街の惨状を展示しているブース、「核兵器のない世界」という戦争と核兵器の問題や平和について考えるコーナー、「ビデオルーム」という原爆記録映画等の上映をおこなっているブースだ。これらのストーリー性のあるブースを見ることによって、原爆が落とされた経緯を詳しく知ることができるとともに、原爆の惨状や、被爆者の訴え、また世界が核廃絶のためにどのような取り組みがおこなわれたのかを知ることができる。

## 4. 当日活動概要

被爆者の山脇さんのお話を聞いた

後、私達は原爆資料館内を見学した。原爆資料館はとてもきれいな近代的な建物で、やわらかい日の光がふりそそぎ、まるで建物だけを見てしまうと、とても原爆資料館とは思えなかった。

まず、「1945年8月9日」のブースへ。原爆投下前の長崎の街の写真が展示されているのだが、原爆が落とされる前の長崎は、異国情緒あふれるとても美しい街であった。その美しい街並みが原爆によって破壊されてしまうなんて……。心が痛んだ。



次に、「原爆による被害」のブースへ。被爆した給水タンクや橋塔、そして浦上天主堂の側壁が展示してあって、無言で原爆の破壊力を伝えていた。また原爆の熱線によって焼け焦げた天使の像やロザリオ……。建物でさえも、このような破壊力なのだから、いったい被爆された方はどうだったのであろうと思うと、原爆の恐ろしさに身震いを感じざるを得なかった。ルワンダ人学生もそうとう衝撃的だったらしく、普段は明るい彼らも顔をしかめていた。そして、長崎原爆投下までの経緯と被爆した長崎の街の説明

へと続く。被爆した長崎の街は、地形模型を展示してあって、天井のモニターによって爆風や熱線の広がりを視覚的に理解することができた。私達の想像以上に熱線や爆風、放射能が長崎の街に広がっていて、原爆の威力と驚くのと同時に、改めて原爆の恐ろしさを感じた。また、長崎原爆投下までの経緯は、年表と写真を使って説明されていて、長崎原爆資料館には4か国語で説明が表記されているのだが、アルフレッドとドンベが熱心に年表を見て、日本人学生に次々と質問していたのが印象的であった。そして、原爆による被害の展示へと続いた。原爆の熱線によって溶けたガラス、人々が原爆で熱線や爆風によって負傷した写真……。熱線の爆心地の温度は3000度から4000度にも達し、大規模な火災を引き起こしたり、人々に熱傷を負わせたそうだ。また爆風によって、爆心地の近くだと建物も原形をとどめないほどの無残な姿になったそうだ。特に印象的であったのが、放射線による被害だ。原爆の放射線は、爆発時に、いろいろな細胞を破壊させ、人々を死に至らせるだけではなく、その影響が時がたってからもまだ残っている（例えばガンや白血病が発症しやすくなるなど）、場合によっては子供から孫まで原爆による影響が及び続けるというところがとても恐ろしく感じられた。ルワンダ人学生も、「どうしてこんなふうになってしまったのか？」「原爆が落とされた後、人々はどのような影響をこうむってしまうのか？」

などいろいろと質問し、また展示物をくいるような顔つきで、時にはショックな表情をうかべながら、見ていた。



最後に「核のない世界」のブースへ。冷戦時に比べればだいぶよくなったとはいえ、まだ世界には何万という核弾頭が残されていることを知った時は衝撃的であった。また、世界にまだこんなにも核兵器がある状態で、世界唯一の被爆国である日本にできる平和での役割とはなんなのだろうと考えざるを得なかった。

また、「ビデオルーム」は時間の関係上残念ながら見学することができなかった。

## 5. 感想

### 企画担当者

ルワンダ人学生は、日本を技術がある国、戦争から奇跡の復興をとげた国、日本＝技術だと思いがちである。しかし、今回の原爆資料館見学によって、原爆によって、たくさんの人の命が一瞬にして奪われたという悲しい事実、また唯一の被爆国として、原爆の悲惨さを世界に伝えることができる国と

いう技術以外の日本の姿を彼らは感じることができたのではないかと思う。(星野)

### 参加者

自身としても訪れるのは初めてのことであった。今日では原爆、第2次世界大戦のことを知らない世代が増えつつあると指摘される部分があるが自分はまさにその中の一人であったのかもしれない。恥ずかしながら小学生の頃に戦争の体験を聞いた記憶にとどまっていた。だから今回の長崎原爆資料館の見学は日本の歴史を知る上でも、戦争や平和に関して再考するよい機会であった。原爆投下前の長崎の街や風景、市民の生活。それが一瞬にして破壊されたことを語る11時2分を指したままの時計はまさに当時の風景を想像させるものであった。核なき世界へ、被爆国としての自覚をこれからの未来を生きる私たちがより熱心に考えていかないといけないものだと感じた。(相曽)

2011年の12月24日の朝に、私達は長崎原爆資料館に行った。品川さんが資料館の概略を伝え、原爆被害者の犠牲者の話を聴きに部屋に行き、原爆被害者の方が1945年の時に目撃したことを私達に語ってくれた。私はその話を聴いて、とてもショックを受けた。彼の話を聴いた後、資料館に訪れた。私はそこで原爆によって体が傷ついた写真や、原爆が長崎市内に広がっていく時の様子を表した模型など原爆被害の悲惨さを実際にこの目で見て感じた。第二次世界大戦の時、長崎では他の日本の地域とはたくさん違う

出来事を経験したことをたくさんの原爆資料館の部屋を見て学んだ。

もちろん中学生の時に、私は学校の授業で長崎の歴史について学んだ。しかし、その時は原爆がこれほどまでにたくさんの人や環境に被害を与えることを想像できなかった。

私は原爆の出来事についてとても遺憾に思っているし、原爆の被害にあわれた方に対してとても気の毒な気持ちですが、あえてこのコメントを書きます。

私は政府がこのような建物を建てたことはとても良い方法だと思います。なぜかという展示方法がとても近代的で、原爆に興味をもつことができたからです。(ルワンダ側メンバーGerardine、星野訳)



## さるく

### -アンゼラスの鐘の丘を訪ねて-

担当者：星野 真希

#### 1. 訪問日時・場所

日時 12月24日(土) 14:40~16:30

場所 長崎市内

#### 2. 企画目的・経緯

長崎の原爆遺跡を実際に見ることによって、ルワンダ人メンバーに原爆の悲惨さを感じてもらうのと同時に、浦上天主堂など原爆から再興した長崎の姿も目の当たりにしてほしかったため。今回は、JRYC 関西メンバー今泉奏の父でもあり、「さるく」のガイドでもある今泉宏さんと学生ボランティアの大川さやかさんの案内で、主に有名な原爆の遺構地を何カ所か訪れた。

#### 3. 訪問先概要

- ・ 原爆落下中心地公園と平和公園

原爆中心地公園には、原爆投下中心碑と旧浦上天主堂の被爆遺跡が再築されている。1945年8月9日に長崎に原爆が投下された。原爆投下中心碑の上空 500m で原子爆弾が落下したとされている。原子爆弾投下によって、7万3千人の尊い命がなくなり、塔の前に置かれた原爆殉難者名奉安箱には、原爆により爆死された方や、被爆者でその後亡くられた方々の名前が奉安されている。また、原爆により倒壊した浦上天主堂の遺構の一部が平和公園に移設されている。



ルワンダ人学生は、旧浦上天主堂の遺構の美しいロマネスクの装飾に興味をもったのと同時に、爆風により石柱がずれているのを見て、原爆の威力を感じたのか、顔をしかめていたのが印象的だった。

平和公園は、平和記念像と水を求めてさまよった少女の手記が刻まれた平和の泉、世界各国から寄贈された平和の像、動員学徒や一般市民原爆殉難者の冥福を祈るために建てられた長崎の鐘、職員や官舎居住者など135名が原爆により亡くなったとされる浦上刑務支所遺構がある。

特に印象に残ったのは平和の泉。平和の泉の石碑に書かれている文字は、「のどが乾いてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水が欲しくてとうとう油の浮いたまま飲みました」。泉から湧き出るたくさんのきれいな水と、水が飲みたくても飲めなかった少女。そのコントラストが、原爆が爆破してひどい状況下におかれた長崎市民の人々の悲惨さを強く無言に伝えている気がした。

また、浦上刑務支所遺構の説明も印象に残った。宏さんの説明によると、実は浦上刑務所にいた人達は、日本人はもちろん

であるが、中国人や朝鮮人や戦争の捕虜の方々など外国人も多く刑務所において、また彼らも原爆によって亡くなったそうだ。原爆の被害者は、長崎市民など日本人だけではなく、強制労働などによって日本に連れてこられた中国人や朝鮮人など外国人の方々も原爆の被害にあわれているということも決して忘れてはならないのだと強く感じた。

・ 山里小学校（旧山里国民学校）

山里小学校は、爆心地から北へ約 600m のところにあり、1945 年、原子爆弾が投下されたことによって、児童 1581 名のうち 1300 人、教職員 32 名のうち 28 人が亡くなられた。今でも山里小学校は、平和の大切さを校歌や、原爆投下時の写真などを展示することで伝えている。特に印象的だったのは、原爆の熱によって変形したガラスを、係の人のご厚意によって、直接触らせてもらえたことだ。「海外の方にも原爆の悲惨さや平和の大切さを伝えてほしい」と係の方がおっしゃっていた言葉も心に響いた。また、ルワンダ人学生が、山里小学校の校歌「あの子」を何度も聴き、また意味を何度も私達に質問していたことも印象的であった。



・ 浦上天主堂

浦上天主堂は、爆心地から約 500m 離れたところに位置している。浦上天主堂は、1925 年に誕生し、東洋一を誇ったカトリック教会だった。1945 年の原爆投下により、ほぼすべてが破壊されたが、1959 年に再建された。浦上天主堂の廃墟の一部を平和公園内に移設し、原爆遺構として保存されている。

## 5. 感想

### 企画担当者

浦上天主堂は、一度破壊しつくされたとは思えないほど、中のステンドグラスはとても美しく、厳かな雰囲気、私達はしばし圧倒されてしまった。ルワンダ人学生が教会でお祈りしている姿をみると、改めて彼らがキリスト教徒であることを感じた。またルワンダ人学生は、教会の中にある装飾物や遺物や歴史に興味を示し、私達日本人学生にたくさん質問をしていたことも印象的であった。

しかし、教会の中の様子とは裏腹に、外にでると、原爆によって崩れ落ちたアンジェラスの鐘があつたり、被爆したマリア像があつたりして、原爆の悲惨さや威力を静かに伝え続けていた。

再建された浦上天主堂と、原爆によって崩れ落ちたアンジェラスの鐘と被爆したマリア像は、まるで復興した長崎の街と、原爆の遺構を長崎の街に残し、原爆の脅威を伝え続ける長崎の街を表しているようにも思えた。（星野）

### 参加者

長崎には原爆が落とされた。ルワンダでのジェノサイド。時間の経過とともに、復

興した、街。談笑する人々。今の姿から、彼らが持つ過去を連想するのは難しい。話や、資料を読んでも私は体験したわけではない。その苦しみや、憎しみがどこへ向かうのか。どう消化されていくのか知ることは難しい。

「怒りの広島、祈りの長崎」

その言葉の通りなのかもしれない、と天高くそびえたつ浦上天主堂や、いくつもの教会を見ていて感じた。クリスマスに参加したミサ。特定の宗教に属していない私にとって、神さまを信じている人たちの姿はとても素直で、きれいなもののように映った。熱戦のあとが残る柱。聖像。棟から落ちた鐘。原爆投下の跡と共に暮らす人々。熱線の跡が残る柱を前にし、ルワンダ人は顔をしかめた。そして、その前でポーズをし、写真を撮る。彼らの本当に思うところは良くわからなかったが、クリスチャンの彼らのほうが長崎の人々の気持ちを理解できたのではないだろうか。(秦)

## 長崎さるく

### —長崎は今日も異国だった—

担当者：今泉 奏



#### 1. 訪問日時・場所

日時：12月25日(日) 10:30~13:30

場所：長崎市 南山手界隈

#### 2. 企画の目的・経緯

近年全国的に注目されている「まちあるき」ツーリズムを体験し、両国の観光の在り方を再考する。また、いくつもの文化が折り重なる長崎のまちを体感し、多文化都市の魅力、とりわけ宗教が混在する長崎のまちの宗教観を味わい、ルワンダの宗教観と比較し相互理解することを目的とする。

両国において観光業は、経済的發展において欠かせないツールである。「まちあるき」観光が全国で流行する日本。新たに国立公園を中心とする観光業を推進し、観光立国を目指すルワンダ。両国の持つ観光形態は異なる。今回は日本の観光にスポットを当て、とりわけ「まちあるき」という新たなコミュニティー・ツーリズムの可能性を探求する。

### 3. 企画概要

「長崎さるく」を通して、長崎の文化、歴史、そしてひとに触れる。今回は「長崎は今日も異国だった」というテーマで街歩きを行い、長崎に根付く独特の「ちゃんぼん文化」を感じる。その中で、ルワンダにおいては、ジェノサイド後の和解政策で重要な役割を果たしているキリスト教会を訪れ、日本人、ルワンダ人の互いの宗教観について触れる。また、ルワンダと長崎で共通する丘陵地帯の土地利用についても考える。そして最後には、異なる国、宗教、文化を持つ人々が古来どのように長崎で暮らしてきたのか、現在どのように暮らしているのかを考察することを目標にする。

### 4. 当日活動概要

10:30	大浦天主堂下集合 さるくスタート
コース	旧香港上海銀行→大浦国際墓地→グラバースカイロード→グラバー邸前→南山手レストハウス→祈りの三角ゾーン→大浦天主堂
11:30	さるく前半終了
	移動（長崎駅前）
12:00	聖フィリッポ教会にてミサ
13:00	日本 26 聖人殉教地
13:30	長崎さるく終了
午後	昼食、クリスマス・パーティー

大浦天主堂下：集合場所までの路面電車での移動中、長崎三菱造船所に停泊する巨大客船にルワンダ人学生一同見入った。造船のまち、長崎についてレクチャー。集合場所で JRYC 日本人メンバー、長崎県立大の学生に合流し、長崎さるくスタート。

旧香港上海銀行：明治時代に建設された石

造の銀行。建設当初の長崎の国際的重要性が垣間見えた。

大浦国際墓地：長崎の没した外国人の跡を訪ねる。墓石から禁教時代やキリスト教解禁後の歴史がうかがえる。

グラバースカイロード：坂のまちならではの「斜行エレベーター」。お年寄りや観光客のために建設された。ルワンダでもいつの日か建設される日が来るのだろうか。歩き疲れたメンバーはエレベーターに乗り、元気なメンバーは歩いて絶壁のような坂を登った。

グラバー邸前：「鶴の港」と呼ばれる長崎の港を一望する。見渡す景色には、洋館、教会、寺、神社、そして現代の建物が見え、長崎の「ちゃんぼん文化」が見て取れる。

山から港までびっしりと家が犇めきあっている様子は、長崎の人々が昔から坂と共に暮らしているということをうかがわせる。豊かな丘陵地帯からなるルワンダも、このような景色を望むことができる日がくるのだろうか。

南山手レストハウス：トイレ休憩を兼ねて、レストハウスに立ち寄る。長崎の古写真や炭鉱の歴史を紹介するパネル見学。江戸時代に建てられたというレストハウスそのものも、非常に美しい洋館である。

祈りの三角ゾーン：大浦天主堂（教会）、妙行寺（寺）、大浦諏訪神社（神社）という長崎独特の場所だ。敬虔なクリスチャンであるルワンダ人学生にとっては、少々不思議な場所だっただろう。

大浦天主堂：日本最古のゴシック建築様式の教会。蒼天に白く浮かび上がる教会は、その姿だけでなく、歴史も特筆すべきである。200年以上もの間潜伏し受け継がれた

信仰が発見された、信徒発見の地である。200年という途方もない年月にルワンダ人学生一同驚いていたのが印象的であった。聖フィリッポ教会（西坂教会）：クリスマスの長崎で、ルワンダ人学生にとって最大のイベントであったかもしれない。英語でのミサが行われ、ルワンダ人学生も聖書を読んだり、献金を集めたりと大活躍であった。長崎 26 聖人殉教地：豊臣時代、京都や大阪で捕えられたキリシタンを、当時クリスチャンのまちであった長崎で見せしめとして処刑。殉教者には子供も含まれていた。キリシタン迫害というルワンダでは考えられないような歴史的な事件に、非常に興味を持って話を聞いていた。



## 5. 感想

### 企画担当者

「まちを観る」という抽象的な感覚をいかに伝えるかが、最大の難点となった。高層ビルが林立する大都市でない、地方都市な

らではの発展の仕方を伝えなかった。正直、初めは「まちあるき」が正確に彼らに伝わるのか、自分自身疑問があった。しかしながら、彼らが「まちあるき」を終え”Nagasaki Romantic City”と話してくれたとき、この企画の成功を確信した。今回の企画成功の要因は二つある。ひとつは、彼らの信条に寄り添って「宗教」をテーマにまちあるきをしたこと。そしてもうひとつは、長崎の土地（坂のまち）に大変興味を抱いてくれたことだ。ただ「まちあるき」という仕組みをやみくもに伝えるだけでなく、ルワンダ人学生と精神面での寄り添いを意識して企画したことが、功を奏したのであろう。クリスマスの長崎は多少寒さがきびしかったものの、みな十分に堪能できたのではないだろうか。

### 参加者

「さるく」はただただ「歩く」だけではなく、歴史的な場所を歩くことだ。私は「さるく」が行われた日に、体調が悪かったことがとても残念でならなかった。しかしながら、坂道を斜行エレベーターで斜面を登ったことが、強く印象に残っており、長崎の魅力を観光客に伝えるには良い方法だと感じた。他にも訪れた場所で、非常にショックを受けたのが、26 聖人が殉教したとされる場所である。また、海を埋め立てて作った土地に人々が住んでいることは、これもまた驚きであり、技術的に優れていると思った。日本の発展の仕方は、市民と彼らの知識を通してなしえたものだと感じた。

（ルワンダ側メンバー Eugene、今泉訳）

このさるくコースは、長崎が育んできた

街の文化や雰囲気をよく伝えるものであったと思う。教会・神社・お寺が交差する三叉路や、中国の影響を受けた長崎独特のお墓の様式は長崎独特のものと言えよう。ルワンダメンバーが私達日本人と同じように感じたかは定かではないが、特に三叉路には驚いていたようだった。

見所が盛りだくさんのこのコースではあるが、私が一番印象に残ったのは、グラバー園ゲート近くの高台からの長崎の街の長めであった。私はこの風景を見た時、長崎出身のメンバーが言っていた「長崎は、原爆だけじゃない。昔から異文化が入り交じって、異文化を受け入れてきた街。その歴史を学んだ上で原爆投下という事実と向き合うことに意味がある。」という言葉の一端を理解したように思った。街を一望できる高台からは、港、中華様式の建物、カトリック系の学校、長崎を囲む山々など、長崎の街をずっと見守ってきたものが一度に見えた。その風景と対峙して私は「ああ、この歴史がある街に原爆が落ちたんだな」と重く感じた。(岩井)

## ブライアン・バークガ

### フニ教授による講義

担当者：品川 正之介

#### 1. 訪問日時・場所

日時：12月26日（月）10:00～12:00

場所：長崎大学 12番講義室

#### 2. 企画の目的・経緯

今回の長崎訪問企画では実際に長崎さるくを体験して長崎の教会群をめぐり、浦上天主堂にも訪れる予定であったので、長崎の文化、キリスト教の歴史、原爆の歴史などをルワンダ人学生に紹介したいし、自分たちも学びたいと考えていた。そこで、現在長崎総合科学大学で教鞭を執っており、長崎に精通していらっしゃるブライアン・バークガフニ教授に長崎の歴史と文化を、キリスト教の歴史なども踏まえながら講義していただいた。



ブライアン・バークガフニ教授

#### 3. 講義概要

まず一時間ほどバークガフニ教授よりご講義を頂き、その後質疑応答を行った。以下講義の一部を抜粋する。

### ■国際都市長崎の始まり

長崎の近代史は、長崎にポルトガル船が来航し貿易を始めた 1570 年あたりから始まると言える。キリシタン大名で知られる大村純忠はポルトガル人を平和的に歓迎した。当時長崎は人口の少ない小さな町であったが、貿易が始まってからは外国人だけでなく西日本各地から人が集まるようになった。外国と日本という文化の違いはもちろん、それだけでなく日本人同士の中でも文化・生活習慣の違いがあり、このような背景から、1つのシステム、1つのやり方は長崎にはあまり適せず、多様性を認め、共存する様な長崎の風土が生まれた。異国風のものも多く取り入れられた長崎くんちからもその多様性を認める雰囲気を感じられる。長崎の発祥の卓袱料理は異国の料理が融合している点も面白いが、一番の特徴は円卓にあり、これは日本のお膳が順番に配置され座る場所は身分によって決まるようなものと違い、貿易の町長崎の平等さを表したものである。

### ■異国の文化と技術

ポルトガル人たちは貿易と同時にキリスト教の布教を行った。たったの 10 年足らずで長崎はカトリックの町に変わり、教会が多く立てられた。また司教の中には医者の人もいて、西洋医学が日本に伝えられた。日本が外国文化から大きな影響をうけることとなる。カステラ、印刷技術、石畳、そのほかにもたくさんものが伝えられた。日本語になったポルトガル語もたくさん存在する。オランダ文化に比べポルトガル文化のほうが日本に大きな影響を及ぼしたのは、ポルトガル人は自由に町中行動できたもの、

オランダ人は出島に閉じ込められていたからであった。

### ■キリスト教弾圧

リトルローマとニックネームがつく程の町であった長崎ではあるが、キリスト教が布教するにつれ、そして徳川幕府が日本を統一・統治するにつれ、幕府の統治に不都合になったキリスト教の弾圧が始まっていく。徳川は政治的統一を図ってキリスト教の弾圧を進めていった。このようなキリスト教弾圧の背景によって、ポルトガル人は日本を追放されることとなったのだが、その後はオランダ、そして特に中国が日本での貿易を進めていくようになった。長崎はカトリックの町から、短時間で中国風の町に様変わりした。これは世界的に見ても珍しいことである。キリスト教徒にとって弾圧で非常に受難の時代であったが、弾圧下でも隠れて信仰を守ったキリスト教徒たちが存在し、1865 年には大浦天主堂にて信仰を告白した。この出来事は使徒発見といい世界に衝撃を与えた。

### ■長崎の皮肉

長崎は大陸に近く、ずっと外国との玄関口、貿易の街として栄えてきたが、この大陸と近いという地理的条件は、戦争時において戦略的に重要な場所であることを意味する。昭和初期、長崎は貿易の町から造船の町へと様変わりし、軍需都市に変わってしまった。そして 1945 年、原爆投下のターゲットとなり、破壊されてしまった。今まで貿易の町、国際交流の町、異文化を認め共存してきた町であった長崎は破壊され、皮肉にも日本最大のカトリックの町に原爆は投下

されたのであった。

#### ■長崎と平和

長崎では平和について、原爆のリアクションとして、原爆関連の文脈で語られることが多い。しかしそれだけではなくて、長崎は昔から多文化を受け入れた寛容な町、波乱万丈な時代の中でも、様々な異国の折衷文化を織り成してきたという点に目を向け、平和というものを再考していく必要もあるのではないだろうか。

#### 4. 質疑応答

Q.

何故長崎の人々には今までの信仰を捨てキリスト教を受け入れる人が多かったのですか。

A.

ポルトガルとの貿易など、キリスト教を受け入れることによって得られる利点が多いからです。また日本特有の理由かもしれませんが、大名などの有力者がキリスト教を受け入れると、人々はそれに合わせて自分たちの信仰を変えるということが言えます。長崎では大村純忠がそうですね。だから当時の人たちは本当にキリスト教を深く信仰して受け入れたというより、政治的、商業的な理由で受け入れたかもしれません。しかし一方で激しいキリスト教弾圧にあっても信仰を守ってきたという事実を考えれば、政治的、商業的以上にキリスト教を信仰してきた人もいたということが言えますね。

Q.

何故長崎に興味を持つようになったのですか。

A.

初めて長崎を訪れた時、街を歩いてみると、西洋風の橋があったり、昔の中国の文化を見たり、日本風のものもたくさんありました。ある西洋風の空き家の中を見ると、暖炉があって、子供のころおじいさんと過ごしたときのことを思い出したりしました。一時間歩くだけで様々な国の雰囲気が感じられ、なんて面白い街なんだ、どうしたらこんな街が出来上がるのだろうと感じました。

Q.

もともとはキリスト教徒であったのに、その後仏教の修行をしてみて、神や宗教についてどのような考えをお持ちですか。

A.

私はカトリックの家で育ちカトリックの学校に通いました。しかし大学生の頃、キリスト教や西洋的な考え方に疑問を持つようになり、代わりに仏教に興味を持つようになりました。その後カナダを離れインドを巡り、最終的に日本にたどり着いて、寺に入り禅の修業をしました。あなたの宗教は何ですかと問われたときにはいつも、私の中には、キリスト教の心、仏教の心両方を持ち合わせていますと答えています。

Q.

長崎は時流に合わせてキリスト教の街、中国文化の街、多文化共生の街と姿を変えてきましたが、何故人々はそう簡単に街の雰囲気をコロコロ変えたり異文化を受け入れることができるのでしょうか。

A.

長崎の人々は異文化を受け入れる寛容さがあったのだと思います。ですが一方では、



はっきりと自分のポリシーやアイデンティティを守ることをせず、その時その時で便利なもの、利益に合うものを取り入れていたのだと思います。

Q.

どうやって長崎の人々は異国の人々とコミュニケーションをとっていたのでしょうか。

A.

両国の人々が勉強したのはもちろんなのですが、特筆すべき点は、ポルトガル人は長崎の街を自由に動けたので、日常生活の中での交流が多くありました。なので日々の交流の中で徐々にコミュニケーションが取れるようになっていきました。しかし一方オランダ人は出島で生活することが定められていたので、人々との直接の交流がありませんでした。ですからオランダ通詞のような通訳が非常に大きな役割を持っていました。言語の問題は大きな問題に捉われがちですが、そんなことはないんですね。何年か直接交流すれば次第にコミュニケーションが取れるようになると思います。

Q.

長崎は唯一開かれた港としていろんな国の文化が交じり合う国際都市、特別な街でしたが、最近では日本も全体としてグローバル化が進んできていると思います。今でもなお長崎は特別な街といえるのでしょうか。

A.

現在の長崎の街は普通の地方都市に変わってしまい、国際交流の役割をほとんど失ってしまったと思います。しかし、かつての国際交流のDNAはまだ持ち続けているし、外国に対する寛容さも持ち続けていると思

います。また地理的には昔と変わっていないし、中国と非常に近い重要な港であることは将来重要なポイントになるかもしれません。

Q.

クリスチャンを守る政策はなにかありますか。

A.

長崎クリスチャンの数が4%からわかるように少数派ですが、また日本全体ではもっと低いのですが、日本は政教分離の立場をとっているし、信仰の自由も保障されているので特にクリスチャンを保障する必要はありません。

Q.

キリスト教と仏教の間での共通点はありますか。

A.

もちろんたくさん共通点があります。ひとつの共通点は真理を追究することですかね。小さいころは自転車くださいと神様に祈ったこともありましたが、キリスト教にも仏教にも通じるものは座禅でも祈りでも、自分自身を見つめ、自分が何者なのかを問うという点ではないでしょうか。

Q.

なぜ政府は最終的にキリスト教を認めることとなったのでしょうか。

A.

それには政治的な理由がありました。明治維新後に岩倉視節団が西洋に勉強しに行ったときに、キリスト教弾圧について大いに批判されました。当時西洋の人々は踏み絵

など、キリスト教弾圧の情報を得ていたんですね。岩倉視節団は帰国後この件について政府と大いに議論して、キリスト教の弾圧はとめられましたが、信教の自由は保障されませんでした。最終的に憲法で保障されることとなりますが。長崎は情報という点において大きな役割を果たしました。踏み絵が行われたのは長崎だけで、また四番崩れというキリスト教徒迫害の事件もありました。これらは外国にも報道されました。外国の圧力によって政府の方針は変えられました。

## 5. 感想

### 企画担当者

長崎企画では、実際にお話を聞いたり資料館をみたりさるくをしたりという現在を知る企画、交流会で長崎の将来について議論する企画とがあり、そしてこの講義は長崎の過去の歴史を深く知ろうということで企画されたものだった。今回の講義を聞いてまず、長崎という町はなんて面白い町なのだと感じた。今まではやはり原爆という点から長崎のイメージを持つことが多かったが（これはルワンダ人もそうであって広島、長崎＝原爆のイメージが強かったと思う）、異文化が平和的に共存していったという長崎の独特な歴史は非常に面白かったし、そしてそんな町が原爆で破壊されてしまうということはとても切なく皮肉なことだと感じた。最後にバークガフニ教授がおっしゃられた、文化の多様性を認め、受け入れてきた長崎の歴史という点に目を向け平和を考えるべきという言葉はまさにそのとおりだと思うし、私たちの活動理念の相互理解にも合致するものなのではないかと思う。

（品川）

### 企画参加者

2011年3月に実施した下見にてバークガフニ教授にお会いした際に、教授独特の視点に引きこまれた。今回ルワンダ人と共に再び教授のお話を伺えるということで、大変楽しみにしていた。1時間半の講義を伺って、中高時代の日本史で学んだ史実が生き生きとした街の歴史に再構築されていく感覚を覚えた。

バークガフニ教授の「平和学習」についての定義が印象に残った。確かに従来の教育では「原爆投下の歴史を学ぶ＝平和学習」という面が強調されがちであったが、何も過去の負の歴史のみを学ばなければならないという決まりはない。長崎が異文化を受け入れてきたような、寛容な精神を歴史から学ぶことも平和学習に繋がるのではないかと教授は指摘してくれた。この視点は、日本でもルワンダでも将来役に立つと感じた。（岩井）

西洋人が初め日本に商業をするために来た事、そしてキリスト教を布教しようとしたこと、そのほかにも踏み絵、神道や仏教について知ることができた。また西洋と東洋が長崎で出会うことによって、長崎の人々が他国の人に対し寛容になったことなど、講義で色々と学べた。また、バークガフニ教授が日本語を流暢に話す姿がとても印象的で、日本語は私には難しいがもっと話せるようになりたいという気持ちになった。

（ルワンダ側メンバーMajyambere）



# 長崎・ルワンダ交流会

## —平和未来都市、長崎を望んで—

担当者：今泉 奏



### 1. 訪問日時・場所

日時：12月26日(月) 13:00～15:30

場所：長崎大学 文教町キャンパス

### 2. 企画の目的・経緯

長崎とルワンダ。長崎は半世紀以上前に原爆を受けて、まちは焼け野原と化した。ルワンダは十数年あまり前にジェノサイドが勃発し、国全土が荒廃した。二つの土地はそれぞれ全く異なる形ではあるが、過去におぞましい記憶が眠る地である。本企画では、平和都市として長崎とルワンダがどのような役割を果たすべきか、次世代を担う長崎の高校生や留学生を交えて、議論することを目的とする。また、長崎企画の最終日として、「観光」と「都市」という観点から長崎企画の総括をすることも狙いである。

### 3. 企画概要

次世代を担う学生たち(高校生、大学生)の参加を募り、交流会を行う。交流会では、満越、星野による「観光の功罪」と今泉に

よる「被爆地の復興」についてのプレゼンの後、それぞれグループディスカッションを行う。また「被爆地の復興」のプレゼン中に、長崎の平和学習に焦点を当て、活水高校平和学習部の方に、長崎の高校生の平和学習活動についてプレゼンをしていただく。

#### 4. 当日活動概要

午前中にブライアン・パークガフニ教授の講義を受け、午後から企画を開始する。参加者は JRYC メンバー、長崎活水高校平和学習部のみなさん、長崎に留学している留学生、および長崎から留学に行く高校生。若い世代が集まり、またフランス、オーストラリアからの留学生も参加し、交流会に相応しい、国際色豊かな場となった。議論はまず「被爆都市の『におい』は長崎のまちにあるだろうか？」というテーマから開始した。多くの学生は長崎が「被爆都市である」という肩書がなかったら、現在の長崎が被爆都市とわからないだろう、という意見であった。世界に平和を発信しなければならない長崎のまちが、あまりにも美化され、被爆の恐怖が見えにくいまちになってしまったことに、疑問を感じたものは少なくないだろう。はたして、このまま長崎のまちは発展していったのだろうか？ルワンダのまちはジェノサイドの傷を美化しすぎるような発展はしてないだろうか？このようなクエスチョンマークをそれぞれもって、プレゼンそして、議論に移った。プレゼンと議論の詳細においては、学生会議、グループワークのページをご参考いただきたい。



#### 5. 感想

##### 担当者

JRYC メンバーだけでなく、同世代の若者を巻き込んだので、長崎総括企画。たくさんの参加者からの意見が聞け、非常に興味深いものになった。また、これほど多くの学生たちが長崎やルワンダについて考えてくれていると思うと、胸が熱くなった。とりわけ、活水高校平和学習部による活動のプレゼンは JRYC メンバーにとって、とても良い刺激になったのではないと思う。私自身はもちろん、JRYC メンバー一同、この交流会で得たものを忘れず、次回の学生会議、そして、日本とルワンダの未来に生かしていきたい。(今泉)

##### 参加者

招致前、長崎での交流会に誰を招待するかと議論になった際に、私は“長崎に留学している学生を呼ぼう”と提案した。一見これは不思議に思えるかもしれない。日本に招致するのに、日本人ではなく、なぜ留学生と議論をさせるのかと思われる方もおられるであろう。そこには私の明確な意図があった。

私が今回招待したロータリークラブの学生たちは皆が 16 歳～18 歳である。彼らは

長崎の方の家にホームステイし、現地校に通い、日本人の高校生と全く同じ生活を送っている。そして、彼らはロータリークラブのバックアップもあり、長崎の文化、日本の文化に触れる機会が多く与えられている。そのような生活を送っている彼らに対し、私は「原爆についても留学生からの視点があるに違いない」と思っていた。そして長崎での留学経験に基づいた彼らの平和構築についての考えは、日本人のそれとは異なり、ジェノサイド後の平和構築を模索するルワンダ人の考えに何か新しい影響を与えるのではないかと期待したのである。

実際に交流会に参加されたのは、オーストラリア、フランス、カナダからの留学生と、現地長崎の高校生である。英語でのディスカッションということで、彼ら留学生の方が日本人学生よりも発言しやすかったということもあるかもしれない。しかし、明らかに留学生のほうが積極的に発言していたように見える。そして、ルワンダ人学生達も、自分の出身国と比較しながら発言をする留学生達と興味深い議論を行っていて、聞いている私も大変勉強になった。

ただ日本人の参加者については満足できない。当団体のメンバーに関してもそうであるが、もう少し日本人の高校生に積極的に参加してほしかった。日本、そして長崎で生まれ育った日本人と長崎で留學生活を送る留学生とルワンダ人が平和構築について議論することを期待していたからである。日本人参加者が、議論中に何か問われた際に“**I don't know**”（わかりません）で終わらせる場面が多く見られた。しかし、彼らの英語力を考えれば何か言えるはずである。彼らの“**I don't know**”には“**I have no idea**”

（何も考えがない）ではなく“**I don't want to try**”（言いたくない）の意味合いが多く含まれていると感じた。日本にいて高校生の時にこういう場に参加できることは大変貴重であることは言うまでもない。彼らも英語を学習する意味が分かったのではないだろうか。この場で日本の英語教育がどうのこうだとは言いつもりはないし、私のような若輩者で、完璧な英語を話せない中途半端な学生が口出しする資格もないであろう。しかし、少なくとも私はフランスでの留学経験、EUの学生会議への参加、UAEでの勉強、そしてアメリカでのインターンシップを通して、日本人には何が必要なのかを理解しているつもりである。グローバル化が進み、戦わなければならない相手が日本内ではなく世界にいる時代である。最低限“英語”で自分が言いたいことを言えるレベルまで到達しないことには日本は今後淘汰されていくだろう。

今回の交流会が、ルワンダ人学生に新しい影響を与えたことには間違いないと考えている。そして、日本人学生が今後、日本人として、世界で戦っていくために何が必要であるかを少しでもこの機会から学んでくれたことを祈っている。

（中山）

その日私たちは、長崎大学で平和活動をしている多くの学生に会った。大学生だけでなく、高校生もいた。まず本企画の組織、企画、連携が為されたことを評価したい。また、高校生と大学生が協力してできた会議は、とても素晴らしいものだった。私たちの国では、異なる年代が集う会議はそれほど行われることはないからだ。会議は普

通、異なる形で行われる。なぜなら知識のレベルが異なるからだ。しかしながら、この交流会を通して、知識のレベルが違って大丈夫なことが分かった。私たちは皆、「平和構築」というテーマのもと、それぞれが互いのアイデアから学ぶことができるのだ。

奏は3つの質問を投げかけた。

①「自国ではどんな平和教育がなされているのか？」この問いでルワンダの状況を顧み、ルワンダにある問題点も考察することができた。

②「平和構築について話す際、何に気をつけないといけないか？」私にとって、これはとても重要なことだった。なぜなら、状況に応じて、私は異なる答えがあると思うからだ。その質問で、私が自国で会うであろう全ての人々について考え、どのように対処し、どのような人々に重点を置けるか、考えた。例えば、虐殺が起こったルワンダでは、平和構築について考えるとき、慎重にならなければならない。また、いろんな立場の人々の和解も必要だ。

③「あなたが母親だったとき、子供にどのように平和の築き方を伝えるのか？」私にとってこの質問の解決策が、この活動のまとめだと言える。「自分がされて嫌なことを、他の人に決してしてはいけない。」これが私の答えだった。他の高校生の意見は、平和はお金よりも大切だということだった。(ルワンダ側メンバーNadine、今泉訳)

## 【コラム】クリスマスと日本ルワンダ学生会議。



(写真：恋人のいない皆さん)

日本招致事業では毎年「クリスマス」を期間中に迎えます。今回は長崎で過ごしました。

本会議が始まる前の mtg 中には、日本人参加者の中で「大阪は行けるけど、長崎は行けない」なんて人がいると、「えっ恋人に行っちゃダメ！って言われたの?!」という詮索が始まったりしていました（半分冗談）。何にも囚われずに意気揚々と長崎に飛び立った日本人メンバーは、誰も恋人がいないんですかねー。

(ハハッ！) (ブラックなミッ●ー風)

24日。ルワンダンは疲れも溜まっていたこともあり、早めにホームステイ先の今泉家に帰宅。夜は日本人だけで過ごしました。長崎名物☆ちゃんぽんを食べに行き、イルミネーションが綺麗な港までお散歩しました。ここでは「付き合って3ヶ月のカップル風写真」などを撮影したりして楽しく過ごしました。が、次第に数々の行き交うカップル（本物）から「しゃ、写真撮ってもらえますか…/////」とお願いされるようになり、なんだか惨めになったのでさっさと宿に帰りました。（そして一部はカラオケへ行ったとか）

本番の25日。この日は宿のコモンスペースで、皆でクリスマスパーティーを開催しました！！メニューは、サラダ、チキン、ピラフ etc…そして手作りのケーキ！

クラッカーも用意して、ぱかぱーん「Merry Christmas!!」と次の瞬間、初めてのクラッカーの音にびっくりしたルワンダン女子がジュースをこぼしてしまいました（笑）。

宴会は2時間ほど続き、ドンベ司会による「バラエティーショー」が始まって「JRYCメンバーの中で付き合うなら、どっち?!」なんていう質問をうら若き1年生のメンバーにしたりして（「選ばません」と回答すると、ダンス対決をさせられダンスがうまかった方が勝者）、大変楽しいひとときを過ごすことが出来ました。

さてさて、クリスマスはすっかり去った27日。私たちは大阪で、「長崎に行かなかった日本人メンバー」と合流しました。その中の一人、Hくんの薬指には……なんと！光るものが見えます！えっ最後に東京で会った時、それなかったよね？私達が長崎でルワンダンと活動していた間に！ペアリング！皆さん楽しそうで何よりですね。（岩井）



(写真：パーティーの様子)

# 大阪

【スケジュール】

実施日	活動	地域・場所
12/28	釜ヶ崎街歩き 学生会議 炊き出し準備・参加 夜回り参加	釜ヶ崎 西成プラ ザ
12/29	学生会議 即興楽団 UDje(交流 企画) 炊き出し参加 夜回り参加	西成プラザ  釜ヶ崎
12/30	紙芝居劇むすび(交流 企画) 学生会議 観光 移動(大阪→東京)	西成プラザ

# 釜ヶ崎散策

担当者：山崎 暢子

## 1. 訪問日時・場所

日時：2011年12月28日(水)、11:00～  
場所：西成プラザ2階 会議室

## 2. 企画目的・訪問の経緯

「貧困」ということばをきいてまず連想されるものは何か。ただ机上で議論するのみならず、実際に現地を訪れることで、いわゆる「貧困」といわれる現象の一側面を垣間見、その定義の難しさを感じると同時に、日本、ルワンダの両社会状況の違い、あるいは類似点を探し、各社会が直面する「貧困」とは何かについて認識を深めるために訪問した。

## 3. 当日活動概要

まず、大阪市立大学の平川隆啓氏より釜ヶ崎についてのレクチャーを受けた。ここでは、日本における日雇い労働の現状やセーフティネットの言及がされた。とりわけ労働者の高齢化は深刻であり、その多くが単身者であることも特徴的である。

COCO ROOM の岡本まさひろ氏、平川氏を引率者とする二班に分かれて実際に散策へ繰り出した。

マッチ工場の跡地、猫塚や大衆劇場をまわった。音楽は人々の暮らしに欠かせない存在であったが、かつて、三味線を作る際に猫の皮が使用されていたことから、その供養のため設けられたのがこの猫塚だそうである。そして、働いていた女性達が逃げ出さないために一角が高い壁で覆われていたという遊郭の一角を過ぎ、外壁に一本の



パイプがはりめぐらされている小学校に行きついた。このパイプには無数の小さな穴が開いていたが、ここから水が下に噴出することで、建物の周りに野宿できないようにするための措置だという。

西成警察署からほど近い所にある三角公園では、支援団体による炊き出しが定期的に行われており、今回、学生会議が参加した炊き出しもこの公園で行われていた。公演の近くには鍋やコンロが用意されたフリースペースがあり、暖をとるほか、簡単な調理を行うことができるようになっている。

最後に、あいりんセンターと呼ばれる施設を訪れた。年末だったため閉まっていたが、技術免許取得のため講習を紹介する窓口がここにはある。センターの二階には、たずねびとの札が何枚もかけられていた。そこには名前と出身地が書かれており、北は北海道から南は九州地方があった。

エリア帯には立ち呑み屋やコインランドリー、ロッカーが多くあったが、これは仕事の疲れをお酒の力で癒す、あるいは仕事を終えた人同士の交流の場としての酒場であり、仕事に行くあいだ身の回りのものを預けるロッカー、仕事から戻ってきて洗濯をするためのランドリーである。

散策の後、西成プラザに戻り各自の感想を述べる時間を設けた。ここでは、ルワンダにも存在していると思われるが、飛田地域のように目に見える形ではないため衝撃だったというルワンダ人学生からの意見などが聞かれた。また、フリースペースやコミュニティスペースなど、自由に人が集まれる場所について興味を持った学生が多かった。

#### **4. 感想**

##### **担当者**

経済的な貧困と、精神的な貧困…。学生会議において何度も意見が平行線をたどることになった最大の要因が、この二つの概念の存在だった。たとえ物質的な豊かさが、充実した生活を送るためのひとつの条件だとしても、心が豊かでなければ場本当の意味で充実した生活とはいえない、などというのはこれまでもう何百、何千回とどこかで少しずつ形をかえて繰り返されてきた議論だと思う。考えが煮詰まるなか、とにもかくにも現場をまずは訪れて見なければわからないのではないかと、ということでやってきたのがここ釜ヶ崎。当初、そこには「貧困」の実態が存在しているという全くの偏見を持って乗り込んでいったが、ことはそれほど単純ではないのだということを思い知らされたのである。実際、釜ヶ崎のまちに活気を取り戻そうとした様々な取り組みが行われており、ビジネスホテル顔負けの宿が何軒もあり、学生会議が利用させていただいた宿も、海外からの旅行客が大勢いて、宿の共有スペースでは英語が飛び交っていた。

個人的には、ルワンダを訪れてすぐ、あれもないこれもないと感じていたのが、数日もするとその生活にすっかり慣れ、帰国したときにむしろ、なんと多くの物に囲まれて生活を送っていたのかと驚いた。首都ではストリートチルドレンの姿を見かけることはなかったが、少し郊外にいれば子どもが頭の上に水を入れるためのタンクを抱える様子や、電気水道の通っていない家屋を目にすることは珍しくなかった（トゥワの人々の生活の一面については、第6回本

会議の報告書をご参照頂ければと思います)。一方、日本において、無縁死や子どもの貧困などそれ自体が非常に深刻な問題であり、解決に向けた早急な取り組みが必要とれる状況も多くあるなかで、二つの社会の状況をただ無条件に比べることには、少なからぬ無理があるというご指摘が聞こえてくるようである。ただ、それぞれの社会に存在している問題を改めて、突き詰め考えるためには有意義だったのではないかと思う。

明日の生活をも知れない状況のなか、様々な苦労を体験して肌感覚として実感できるとき、知識ではなく体験として得られて初めて、理解できるのかもしれないと私は感じた。

散策を始めてすぐ、何やら楽しげな声やし人が集まっているのが目にとまり、近づく地域の人が餅つきをしているところだった。私達も飛び入りで参加させてもらい、ルワンダ人学生はなれない手つきで杵を振りおろしていたが、それは新手のウガリ作りのようだった。迷路のように入り組んだ路地の裏に何軒もの家々が並び、時折見かける人はゆっくりとした足取りで通りすぎる。この地に根を下ろし暮らしてきた人達の目に、短い時間でせわしく見て回る私達の姿はどのように映ったのだろうか。(山崎)



## 参加者

釜ヶ崎に一步踏み入れた瞬間に、それまでの大阪とは全く違う空気に包まれていたことに気がついた。初めての大阪、初めての釜ヶ崎。驚くことに釜ヶ崎の存在を知らない人は意外にも多いようだが、確かにバックパッカーの外国人観光客か日雇い労働者以外は見かけない地区である。歩き始めると、あいりんセンターで保険を受け取るために集まる労働者、あいりんセンターの2階で寝泊りする日雇い労働者の人々。少し歩くと近くには70人しか生徒のいない小学校や夜になると出入りのできない小さな公園があった。しかし歩き続けて感じたことは、街の人々は意外にも明るいということであった。テレビに映し出されるホームレスの人々や、夜の渋谷駅で見かけるホームレスの人々とは異なり、私たちを見るとルワンダ人メンバーを指して「マラソン選手か?ケニア人か?」などと話してくれた。また、Bonという花屋さんでは年明けを目前に控え門松を作る日雇いの人々が見られた。話を聞けばその花屋さんは職業訓練所としての役割も果たしていたようである。

個人的には遊郭の存在にも驚いた。そこは、日雇い労働者が集まる釜ヶ崎ともまた異なり、まるでタイムスリップしたのかと思う装いの地区であった。

かつてのドヤからバックパッカーが利用する宿へと改築されるなど、地区が少しずつ変遷する中で今後ここはどのような変化を見せるのだろうか。(滝田)

2011年28日に私たちは大阪府の釜ヶ崎を歩き、この街の成り立ちや現実を見た。

ホームレスの人々で埋め尽くされている釜ヶ崎のような街を日本で見ることを予想していなかった。

豊かで発展した日本で私が見たもの（ホームレスの人々や年配の男性や女性の多くの日雇い労働者たち）を私は理解、または説明することが困難だが、政府はホームレスや日雇い労働者の人々のために緊急のシェルターを設置し、そこには NGO により無料で食事が配給されるということを知った。安価なホテル（ドヤ）があったり、800 人もの方がストレスを抱えながら道端で暮らしていたりする釜ヶ崎の現状に対して政府や NGO、地元の機関が組合作りを促進し、ホームレスや日雇い労働者の知識や体力（彼らは年配だが怠け者ではない）を活かしてあげると良いと思う。

（ルワンダ側メンバー Nadine、滝田訳）

## 炊き出し

担当：久保 唯香

### 1. 日時・場所

日時：2011 年 12 月 29 日(木)19:00～

場所：三角公園

### 2. 当日企画概要

ルワンダ人メンバー3 人（ユジーン、ジェラルディン、ナディー）と日本人数名が釜ヶ崎三角公園で行われた炊き出しに参加した。仕事はご飯と中華丼をよそって配ぜんすること。ジェラルディンとナディーがご飯、ユジーンが配ぜんを担当した。夜 7 時ごろ始まった配ぜんは 1 時間半にわたって行われた。

### 3. 感想

#### 企画担当者

外国人が炊き出し。観光のようみえても仕方ない。失礼にあたらないうらうか。ずっと不安を感じていたが、炊き出しが始まるとその不安は吹き飛んだ。早い。とにかく動きが早い。ルワンダ人メンバーも一生懸命にこらいついた。「大」「小」の掛け声を頼りにご飯を盛りつける。意外と力が必要な作業だった。

釜ヶ崎の方々、特に炊き出しに参加されていた方々は非常に寛大であった。心から感謝したい。そして、私の不安をかき消したのはまさにルワンダ人の態度だったのだ。その真剣な態度に私も多くを学んだ。有意義な活動であった。(久保)

#### 参加者

炊き出しの重要な意味の一つに「交流」

があると思う。人々は炊き出しを貰いにくるために広場に集まり、暖かい食べ物を食べながらしばし団欒をする。それは友達が一同に集まるパーティーのようなものであり、皆楽しそうに話をしている空間だ。しかし、コミュニティはある種の排他性を含む。私はそのことを心配していた。つまり、「そのコミュニティに私達、とりわけ外国人であるルワンダ人が受け入れられるのであろうか？」という心配であった。この不安を胸にルワンダメンバーを連れて炊き出しを行ったわけであるが、結果的に私の不安は杞憂に終わった。ルワンダメンバーがごはんを手渡す時、ちらほらありがとうという返事が返ってきた。中にはアフリカからやってきたということを知って話しかけてくれた人もいたし、握手して「サンキュー！」と言ってくれた人もいた。最初は物々しい雰囲気、顔が強張っていたのだが、炊き出しをやりながらその顔は少しずつ和らいでいった。この炊き出しにおいて、ルワンダメンバーは少しながら相互理解の片鱗を再体験できたように思える。異文化の人を前にしたときに生じる不安と期待。それは私たちがルワンダ人と最初に出会うときのそれと同じだ。炊き出しの帰り道、行きは心配な顔をしていたルワンダメンバーが、帰り道では妙にはしゃいでいたが、それは人々への感情の変化に他ならない。この炊き出し体験を終えて、炊き出しを受け取る人々とも少しながら「交流」ができたのではないかと思う。それは相互理解の原点であり、日本メンバー、ルワンダメンバー両者にとって改めていろいろと考えさせられるきっかけになったと思う。(永井)

## 夜回り

担当者：小坂 弘奈

### 1. 訪問日時・時間

日時：12月28日（水）、12月29日（木）  
21:00～22:00

場所：釜ヶ崎周辺

### 2. 企画目的

今回の大阪企画は、「貧困」を通して、日本とルワンダそれぞれの社会が直面する現状について両国の学生がともに考えることを目的としており、同日三角公園で行われる炊き出し共に、この夜回りでは路上で生活している労働者に無料で食事を提供するプログラムに参加し、実際に日雇い労働者と触れ合い、支援団体の職員との交流によって、釜ヶ崎の生活の実情を体感することが目的である。

### 3. 企画概要、当日企画概要

今回私たちは12月29日から1月4日まで釜ヶ崎で行われていた越冬闘争の一環の医療パトロールに参加した。この夜回りでは、まず少人数のグループに分かれ、おにぎり、カイロ、毛布、薬等を持って路上で夜を明かす人々に声をかけ、必要であればおにぎりやカイロなどを手渡す。人によっては話しかけられることを嫌がる人や、夜間の襲撃を不安に感じながら寝ている人もいたので、声をかける時にはかがんで目線を相手と同じ高さにする、とはじめに注意があった。たしかに上から声をかけてしまうとなんだか偉そうに見えるし、威圧的だ。この点に注意しながら夜回りに参加し、私たちは夜の釜ヶ崎を歩いてまわった。

#### **4. 感想**

##### **企画担当者**

今回の夜回りで、ルワンダメンバーは恐らく彼らが想像していた日本とは全く違う、そして大坂の前に見てきた東京、長崎とも違う日本の姿を見ただろう。夜回りのひとつ前のプログラムである炊き出しで、三角公園に集まるたくさんの人たちを見てその人数の多さに驚きつつ、越冬闘争のお祭りのような雰囲気を楽しんでいたようなルワンダメンバーだが、夜回りはお祭りとは打って変わって静まり返り、明らかに空気が違った。彼らもその雰囲気の違いを感じたようだった。夜回りは少人数での参加が好ましいとのことで、ルワンダメンバーは二つに分かれ、5人くらいで参加した。その中で1日目に参加したルワンダメンバーのドンベは自ら2日目も参加したいと申し出た。2日目の夜回りでドンベは1日目で経験したことや、私たちが注意しなければならぬことも細かく説明してくれた。そして夜回りが始まると、積極的に路上で寝ている人に声をかけようとしていた。ホッカイロはあらかじめ袋を開けて、温めてから渡した方がいいと私に教えてくれ、相手を驚かせないように、また敬意を持って接するために姿勢を低くして話しかけるよう他のルワンダメンバーに口をすっぱくして注意し、他のメンバーもそれをしっかり聞き知っている日本語を使い一生懸命に話しかけようとする姿を見て、夜回り企画者の私は想像以上にルワンダメンバーが積極的で正直驚いた。夜回りが無事に終わり、宿泊先のホテルに戻ってから、感想を聞いてみようと思っていたら、ドンベから逆に夜回りはどう思ったかと聞かれた。私は横浜でも

夜回りや炊き出しに参加しているが大阪の規模はそれ以上に大きく、路上生活者の数の多さに驚き、ショックだったことを伝えると、彼は地面に布団または段ボールを敷いて寝ている人を見て、難民のようだと話した。そして人々は豊かになるとだんだん我がままになり他人を気にかけなくなりやすい、だから自分たちは発展していく中で、相手を思いやる気持ちを忘れてはいけないのだと。その後、私たちはお互いに思ったことを気が付いたら1時間以上話していた。すべてのプログラムを終え、今回の大阪企画は、ルワンダ人メンバーだけでなく私たち日本人メンバーにとってもたくさんの学びのあるものだったと思う。普段生活する中で、意識しないと見えてこない日本の貧困問題を体感した。また企画終了後、帰りの夜行バスまでの時間に、数名の日本人メンバーと共にもう一つの夜回りである人民パトロールにも参加させていただいた。こちらの夜回りでは、大勢でわっしょい、わっしょいと言いながら町内を歩くもので、前日参加したものとはまた違ったスタイルであった。釜ヶ崎のみなさんは、気さくに私たちに声をかけてくださり、とても親しみやすく数回しか訪れたことのない場所なのになんとなく懐かしい気持ちになった。最後になりましたが、今回この企画はたくさんの方の協力あって実りの多いものになりました。協力して下さった皆様に感謝します。(小坂)

##### **参加者**

アフリカから来た黒人が、路上で寝ている日本人のホームレスにおにぎりを渡していた。不思議な光景だ。路上で寝ている人

も驚いただろうし、不快に思った人もいただろう。夜回りの後、ルワンダ人の口から ONIGIRI（おにぎり）という言葉が飛び出した。日本にある貧困に各々感じる場所があったのだろう。

日本の冬は寒い。夜の冷え込みは、想像以上に体にこたえる。でも、ホームレスの人は外で寝ている。路上の隅に隠れるように寝ている。理由はそれぞれだろうけど、「しんどい」のは間違いない。

路上に寝ている人のもとに歩み寄り、身をかがめる。ゆっくり気持ちを落ち着ける。

「こんばんは、夜回りです。おにぎりとかイロ持ってきました。」

この言葉から出会いが始まってしまう。少し緊張する。起きないときは、何度か声をかけ、体をトントンと優しくたたく。

「んん、ああ、どうもどうも。」

「これ、おにぎりとかイロです。」

「あ、はいはい、ありがとね。」

「体調はどうですか。」

「うん、大丈夫、大丈夫。」

「毛布とか足りてます？」

「ああ、大丈夫。ありがとね。」

「寒いので、体調に気をつけてくださいね。おやすみなさい。」

「うん、どうもありがとね。」

話しかけたおっちゃんの顔に見覚えがあった。昼間、街で話しかけてきたおっちゃんだ。昼間の元気はすっかり消えて、身を縮めて寝ていた。心も体も小さくなっていった。おにぎりとかイロを渡すとうれしそうに笑った。すごい寒いけど何とか耐えてくれ、と思いながら「気をつけてね、おやすみなさい。」と言った。

背中に触れる地面はなかなか暖まらない

だろう。手足は冷えて感覚を失っているだろう。木枯らしが寝床を襲うだろう。雨が降ったらもっと寒いだろう。通行人からは冷たい目で見られるだろう。それでも彼らは生きている。

だから、彼らの「ありがとう」は、深く、重たい。(嶋田)

大阪・釜ヶ崎で、夜回りや炊き出しに参加した。夜回りはとても衝撃的だった。夜回りの主な目的は、毛布やおにぎりなどの物資支援、人生の希望を見つけてもらうこと、向き合っている人がいるのを伝えることなどである。

夜回りに2度参加し、日本の貧困問題にとっても興味を持った。夜回りの参加者はとても多く、若い人もたくさんいた。でも、夜回りはとても静かに行動した(訳者注：路上生活者は眠っているため、起こさないよう静かにふるまわなければいけない)。日本には、貧しい人々はいないのだと思っていた。でも、釜ヶ崎で夜回りに参加して考え方が変わった。日本でも、多くの人々が路上でダンボールを敷いて寝ている厳しい状況があった。

この活動に参加できてとてもよかった。協力してくれた方々全員に感謝を述べたい。

(ルワンダ側メンバーMajyambere、嶋田訳)

# 紙芝居劇むすび

担当者：日高 佐倭子



## 1. 訪問日時・場所

日時：12月30日（金）10:00～12:00

場所：大阪府西成区「釜ヶ崎」西成労働センター

協力：「むすび」のみなさん、西成労働センター職員、労働者、支援団体の方々

## 2. 企画の目的・経緯

日雇い労働者が集まる日本最大の地域・釜ヶ崎では、日本の貧困の現状を垣間見ることができるだろう。労働者の生活実態からは、不安定雇用の問題や、ひとたび排除されると復帰が難しいという社会構造の問題があぶりだされる。そこで、釜ヶ崎にどのような支援団体の活動があり、その活動が釜ヶ崎でどのような役割を果たしているかを知る。

## 3. むすびの紹介

むすびとは釜ヶ崎で活動する、紙芝居グループで現在、以下の6名で公演を行われている。主な活動は紙芝居劇の制作と上演。手づくりで話をつくり絵を描き、保育園やお年寄りの施設などをはじめ、多種多様なイベントに出張公演されている。年間約30

回以上の公演、動員数は1000人を超えるようになり、2007年にはイギリス・ロンドン公演、2010年には東京公演も果たした。紙芝居劇むすびのスタートは2003年頃に活動していたNPO法人「かまなび」の「ごえん」というグループがきっかけ。生活保護受給者のおじさんたちの生きがいサポートをする同NPOが自然発生的にはじめた紙芝居活動であったが、紙芝居に歌が入り、お面をつけ、小道具が飛び出すスタイルはこの頃に形成された。「かまなび」が解散した2005年、メンバーのみなさんは「紙芝居を続けたい」「できれば自分たちで運営したい」と「むすび」に改名、再出発。

むすびの紙芝居劇は、伝統スタイルの紙芝居と違い、複数の方がそれぞれに役をもって1つの演目を演じる。お面をつけて、小道具や衣装も使って、ときには歌いときには立ち回りもして、観客を楽しませてくれる。ほとんどの方が人前で演じる経験はこれまでされなかったが、歳を経た身体の動きや声からは、プロでもだせないような不思議な魅力が醸し出され、その人の生きざま、強烈な個性がにじみでてくるパフォーマンスである。

そんな「むすび」のスターティングメンバーの多くは野宿経験者。現在も60～91歳のメンバーは生活保護を受給して暮らしている。日雇い労働者、公務員、研磨職人や、飲食店経営者など、経歴はさまざま。リストラや家族との離別、病気、さまざまな事情で釜ヶ崎にやってきた。紙芝居と出会って、仲間と出会って、彼らを心待ちにする観客がいて、彼らはいつの間にか自信を取り戻すこととなる。



#### 4. 当日活動概要

当日の演目は「文ちゃんの冥土めぐり」。予定では英語字幕ありとのことだったが、ハプニング発生。急きょ日本メンバーが通訳をすることに。しかし、紙芝居の絵の効果もあり、ルワンダメンバーも理解しようと熱心な様子であった。まず初めに「むすび」の団体紹介があり、その後紙芝居公演、最後に感想・質疑応答という流れですすめられた。(むすびの紹介は上記)

#### 5. 感想

「むすび」による紙芝居を見て、年齢を感じさせない、いや年齢を重ねたからこそそのよさが公演にあふれているという印象を持った。中にはホームレスなどの苦境を経験された方もいるが、ストーリーを一生懸命、そして楽しんで演じる姿に生きる強さや勇気もらった。最後の質疑応答で、「むすび」に入ってから人と人とのつながりを感じ、心が温かくなり人生が楽しくなったというある演者さんのコメントが心に残っている。現在もホームレスや日雇い労働といった苦労をしている人が街にもいるだろう。そういった人の中にはおそらく私が想像しえないような孤独を抱えた人もいと

思う。そんな人々にもぜひ見てもらい、何かを始めれば人生が変わることもあると感じてほしいと思った。そして、私も「むすび」の方々のように、年齢を重ねても自分の居場所があり、生きがいとして何かを続けていきたいと思った。最後になるが、「むすび」の皆さんに改めて感謝の気持ちを表したい。「むすび」の皆さん、ありがとうございました。(日高)



#### 参加者

初めて、むすびさんの紙芝居を観せて頂いた。私は生まれも、育ちも大阪であるが、今まで釜ヶ崎に行ったこともなかったし、この場所を知らなかった。そのため、釜ヶ崎の話聞いた時、なんだか「怖い」というイメージがあった。しかし、むすびさんの紙芝居を観たことで、イメージが一変した。さらに、人が生きる力を目の当たりにし、「人と人とのつながり」の重要性を肌で感じる事ができた。紙芝居を観る前は、ただ、おっちゃん達が台本を読んで、絵がめくられていくだけだろう、と想像していた。私の予想は良い意味で裏切られた。おっちゃん達は、登場人物のコスチュームを着て、歌や踊りも披露してくれた。身体をすべて使い、楽しそうに紙芝居をしてくれた。むすびさんのメンバーの中には90歳を超える、おっちゃんがいる。下見の時に初めてお会いし、この紙芝居の日に2度目、



つい先日3度目とお会いする機会があった。会うたびに、このおっちゃんの顔色が良くなっていくのが分かり、人と接することで、人はどんどん良い意味で変化していくことを実感した。釜ヶ崎で、また新たな大阪の一面を見せてもらった。これからも、釜ヶ崎と関わって、もっと大阪らしさを見ていきたい。

※釜ヶ崎ではおじさん達のことをおっちゃんと呼んでいるため、「おじさん」ではなく、あえて、「おっちゃん」と書かせて頂いた。  
(乾)



## 総合ディスカッション

担当：小坂 弘奈



### 1. 日時・場所

日時：12月30日（金）

場所：西成プラザ

### 2. ディスカッション要旨

今回の大阪企画で、現在の日本の発展の中で生じたホームレス問題について学んだ私たちが、どのような発展の仕方が望ましいかをシミュレーション形式で考える。

### 3. ディスカッション詳細

まず、私たちは人口1000人くらいの小さな村に住んでいると仮定し、村人たちの収入など、生活環境は様々である。田舎にあるその村は四季折々の美しい自然に囲まれている。ある日、突然その村に石油が湧き出てきた、ということで村人たちはその資源を使い村を大都市に築き上げようと計画する。各グループがその村だとし、一人の村長さんを作り、①理想的な都市とは何か ②大都市建設の中で、どのような問題が生じるか、③そしてその解決策 について議論した。

結論は、理想的な都市とは、教育、食べ

物、医療的な面が充実し、それらがすべての人に開かれていることである。そこから浮かび上がる問題は、①釜ヶ崎のように高収入者と低収入者の間にギャップが生まれること、②石油による自然の汚染、③社会のコミュニケーションが減ることであり、①に対する解決策は、仕事がなく、ホームレスになっている人を救うために社会保障制度をつくること、そして彼らが働くための機会を作り続けること。②に対しては人々の居住地域を産業地域から分け、発展するには汚染は避けられないが汚染に規制を加え、過度に汚染した企業などに罰則を加えること。③の解決策は、今回釜ヶ崎で見てきたように、人々がお互いにコミュニケーションできる公共の場を設ける。そして何より教育に力を入れるべきである。それはもし、思いがけない問題が生じた場合、優秀な人はその解決ができる。さらに石油産業に頼りすぎると他の産業が発展しない恐れがあるため、都市として石油産業以外の収入源をつくる必要がある。

#### **4. 感想**

##### **担当者**

今回行ったこのシミュレーション式ディスカッションのテーマは、何もない日本の田舎から突如石油が湧き出るというかなり現実離れした設定で、参加者を困惑させてしまったと反省している。しかし、普段私たちが想像しがたいまったく未知の状況のなかで、いかにして発展していくかを考えたかったため、あえて地域を限定しない設定にしてしまった。また、その後東京で行われるグループワークの、心の貧困というテーマに繋がったという意図もあった。

この大阪企画では、ルワンダ人メンバーのみではなく、私たち日本人メンバーも普段知ることのなかった日本の貧困の現状を知った。はるばるルワンダから日本にやって来て、東京や長崎の発展した都市を見て感激し、大阪でも通天閣を見てすごい！素晴らしい発展だ！と写真を撮っていたルワンダ人メンバーはこの釜ヶ崎を見て何を考えたのか。私はそれが知りたかった。高層ビルを建設し、なんでもすぐに手に入るような都市を作ることが本当の発展と呼べるのだろうか。街歩きや炊き出し、夜回りを終えたあるひとりのルワンダ人メンバーが、「町が発展してゆくと、人々は欲しいものを手に入れることができるが、他人を思いやる気持ちを忘れてしまう。私たちルワンダは、日本のような素晴らしい発展を手本にもっと発展していきたいが、その中で人と人との繋がりのような大切なものを忘れてはいけない。」といていたのを聞いた私は嬉しかった。立派な建物を建てることだけが本当の発展ではないのだ、ということが大阪企画に関わった私の考えであり、メッセージであった。それを少しは伝えることができたのではないか、と思った。最後になりましたが、第7回本会議の大阪企画に協力して下さったすべての皆様に感謝申し上げます。(小坂)

##### **参加者**

大阪での総合ディスカッションは、それまでの釜ヶ崎での活動を踏まえた上で「望ましい都市をどのように創り上げるか」というテーマだった。数十分で議論するには何とも壮大なテーマであったが、私達のグループは「basic human needs が満たされ

た社会」を理想として掲げ、議論を進めた。議論の過程で常に焦点となったポイントは、「発展と自然は両立するか」ということだった。ルワンダは「千の丘の国」とも称されるほど豊かな自然に恵まれている国であるが、一方で「アフリカの奇跡」とも称される程目覚ましい経済成長を遂げている国でもある。しかしながら、経済発展の過程には多くの犠牲が付きものである。日本の四大公害がその最たる例として挙げられるだろう。経済発展と自然保護をどのような形で両立させていくのか、そのような問題に関して議論を進めていく一方で、経済発展につれ発生する日雇労働者の様な社会的弱者にはどのように対処するのか、という問題にも私達は直面した。特に議論の過程で印象的だったことは、セーフティネットの仕組みとして、実際に釜ヶ崎のフィールドワークで触れた様な地元の人々が繋がりを持つパブリックスペースを導入する、という案が上がったことである。施策の実現可能性は議論の外に置いておくとして、フィールドワークで実際に学んだ知識を活かして議論を進める過程に、学生会議の意義を感じることができた。個人的にも今回の大阪でのフィールドワークを通して、日本の貧困について深く考える機会を得ることができたので、とても有意義な時間を過ごすことができたと思っている。(河合)



大阪、釜ヶ崎で見て、学んだことを基に、ホームレスや日雇い労働者の生活をどのように向上させ、また、政府はどのような政策を取るべきかについてアイデアを膨らませてディスカッションを行った。

日本の特に若い世代が日本の発展に貢献していることに感心し、弘奈のアクティビティのオーガナイズに感謝している。今回のディスカッションが日本にとって実りになるものとなると嬉しい。(ルワンダ側メンバー Eugene、滝田訳)

## 【コラム】「楽しすぎて…」

12月30日、西成プラザで行われた即興楽団 UDje (ソッキョウガクダンウジャ) さんのパフォーマンスを鑑賞…いや、最終的には私たちも参加していた！ウジャさんとは、メンバーがオリジナルの物を含む様々な楽器を使いその場に居合わせたお客さんを巻き込みながら即興で歌って踊り、その場をあっという間にお祭りになってしまう不思議な音楽団体だ。私たちは何が起きるのかドキドキわくわくしながら彼らを囲むようにして並び、彼らは真ん中にたくさんのカラフルな楽器を並べ準備をはじめた。そして、はじまりの鈴が鳴りはじめ、おのおのが好きな楽器を手に取り、私たちが今まで見たことのないまさに新スタイルの演奏がはじまった！！はじめ、その斬新な演奏スタイルに私たちは若干戸惑っていたが、私たちにもひとりひとり楽器が手渡され、ものの5分で仲間入りし、気が付けば全員でウジャウジャしていたのだ。それぞれが好きなように音を奏で、好きなように踊りまくる。統一感のないように思えるが、不思議なことに会場はひとつのまさに即興楽団になっていた。そうしてみんなが楽しくウジャっている中、事件はひっそりと起きていた。なんと日本人メンバーのひとりが演奏していた太鼓に穴をあけてしまったのだ！！楽しすぎて、叩きすぎたのだろうか…いや、そんなのこんなことを考えているのではなく、怒られる、どうしよう！と思っていたが、さすがウジャさん、「こんなこともある」と笑って許してくれたのだ。なんと心が広い！その後も私たちの演奏会は続き、急遽ルワンダ人メンバーがダンスを披露することにもなり、盛り上がった。最後には全員で踊りながら円になり、楽しい時間を過ごした。まさかの参加型演奏会だったが、もしかすると今回の招致のなかで、一番笑ったのがこの時だったかもしれない。そんな素敵な演奏をしてくれたウジャさんに感謝。そして、また会いましょう！！ (小坂)



## 【第三章】

### 第7回本会議

### 学生会議・グループワーク 活動報告

---

#### 長崎

浦上天主堂.....	70
さるく.....	71
長崎の復興.....	72
観光業の功罪.....	75

#### 大阪

ホームレス問題.....	79
東日本大震災.....	80

#### 東京

The Death Penalty.....	83
フツとツチは民族か.....	86
女性の権利の向上と男女平等.....	89
日本が発展した理由.....	91
ルワンダの文化.....	94
新潟水俣病.....	96
日本の電力業について.....	97
日本とルワンダの比較.....	99
国の発展における大学生の役割.....	100

#### グループワーク・プロジェクトワーク

グループワーク・プロジェクトワーク概要.....	105
平和教育.....	106
心の貧困.....	110
Development.....	112

# 浦上天主堂

担当者：品川 正之介

## 1. 日時・場所

日時：12月24日（土）14:30~14:50

場所：長崎原爆資料館内

## 2. プレゼン要旨

長崎はキリスト教が栄えた街として有名である。そのシンボリック的存在ともいえる浦上天主堂について、さるくの事前勉強として15分程度の短いプレゼンを行った。



## 3. プレゼン詳細

浦上天主堂は原爆資料館から歩いて少しの、見晴らしのよい高台に立つカトリックの教会である。1925年に完成し、たった20年後の1945年に被爆、1958年に取り壊されたのち再建され今に至っている。浦上天主堂は単なる教会ではない、と私は思っている。というのも、天主堂建設までの浦上クリスチャンの受難の歴史や、被爆の歴史など、さまざまなストーリーを持っているからである。

プレゼンでは、浦上天主堂建設の歴史的背景を主に説明した。キリスト教が日本に初めて布教された頃まで歴史を遡り、政府によるキリスト教弾圧の時代、その時代に

おける浦上隠れキリシタンの受難の歴史やその後の復興などを述べた。最後に被爆後の浦上天主堂について写真を交えて説明した。

## 質疑応答

Q.

長崎にプロテスタントの教会はあるか。

A.

カトリックだけじゃなくもちろんプロテスタントの教会も存在する。

Q.

なぜ日本はキリスト教弾圧したりしたのか。

A.

理由は色々あると思うが、ひとつに伝統宗教（仏教や神道など）と大きく異なることや、キリスト教の教えが当時の政府の統治にとって不都合だったため。

## 4. 感想

### 担当者

「長崎はキリスト教の街！」というイメージを彼らは持っていたので、長崎でクリスチャンの人数が人口の約5%しかいないことに驚いていたり、踏み絵について説明したら興味深く聞いてくれたりして、説明していて面白かった。踏み絵のようなエピソードも交え、キリスト教の歴史（主に受難の歴史だが）をプレゼンし、ルワンダ人も真剣に聞いてくれたので、さるくの事前勉強として良いものになったと思う。

今回のプレゼンは原爆資料館内の空きスペースをお借りして、皆で小さく集まって行った。いつものように、プレゼンター一人が前に行うプレゼンよりも、聞いているメンバーとの距離が近く、ところどころ

ろ質問を飛ばしてみたり、理解しているか確認しながら進められたので、このようなスタイルのプレゼンも面白いと思った。(品川)

## さるく

担当者：星野 真希

### 1. 日時・場所

日時：12月24日（土）13：30～14：00

場所：長崎原爆資料館

### 2. プレゼン要旨

「さるく」を実際に体験するにあたって、さるくとはどのようなものなのか、なぜさるくが必要とされたのか、さるくの利点、さるくがなぜ観光客から支持されているのかを中心に説明した。

### 3. プレゼン詳細

テーマを選んだ理由

「さるく」を実際に体験するにあたって、「さるく」とはどういったものかということと事前学習をすることで、より体験を有意義なものにするため。さるくとは、長崎の観光業を復興させるのに大きな役割を果たし、また低コストで遺産の保護にもなるので、ルワンダの観光業にも参考となるべき部分があるのではないかと考えたため。

### 4. 感想

発表者

正直なことをいうと、ルワンダでは観光業があまり発展していないらしく、遺跡等をいかして、街を歩いてめぐって観光業を発展させるという概念をルワンダ人学生に伝えるのはかなり難しかった。

また初めての英語でのプレゼンということもあって、英語で話すことにいっぱいいっぱいになってしまい、ルワンダ人学生に「伝えよう」「理解してもらいたい」という

気持ちをなおざりにしてしまったのは大きな反省点である。

しかし、少なくともルワンダ人学生に、さるくがどういったものなのかは伝えられたと思うし、また多少ルワンダ人学生が「さるく」に興味をもってもらえたところは良かったと思う。

### 参加者

長崎にとってさるくはとても重要で、またルワンダ人にとっても参考になった。なぜなら、どのようにして長崎はとても美しくて素敵な街を保つことができたのかを知ることができたからだ。私達はここで得た知識を生かして、ルワンダの街が長崎のように美しくて素敵な街に変わらせ、またその街並みを保ちたいと思う。

(Alfred Ntaganda、星野訳)

## 長崎の復興

担当者：今泉 奏

### 1. 日時・場所

日時：12月26日(月) 13:30～14:30

場所：長崎大学 文教町キャンパス 教育学部 1F12 番教室

### 2. プレゼン要旨

都市には二つの要素がある。一つは「都市」そのもの、もう一つは「ひと」である。本プレゼンでは、まず長崎の歴史をおさらいし、それから都市の復興、そして最後に人の復興（継承活動や平和教育）に重点を置いたディスカッションを行う。

### 3. プレゼン詳細

#### ①長崎の歴史

原子爆弾投下を歴史の分岐点と考えたとき長崎の歴史は大きく3つに分けられる。最初は戦前までの歴史である。キリスト教の布教開始やキリシタン弾圧、長崎港開港の歴史である。次に戦時中、原爆投下の前後の時代である。そして、戦後の復興の歴史である。今回はこの3番目の歴史を中心に話を進める。浦上天主堂は当時東洋一の大聖堂として威厳を保っていた。明治時代まで潜伏し続けた隠れキリシタンたちが、キリスト教解禁から資金を出し合い、作り上げたのだ。

#### ②原爆投下の瞬間

1945年8月9日11時2分長崎市浦上地区上空500メートルでプルトニウム式原子爆弾がさく裂。ここで視覚的な促すために「はだしのゲン」より原爆投下場面を上映。すさまじい爆風、熱風、そして放射能が一



瞬にして長崎のまちを襲った。死者 14 万 9 千人。もちろん、浦上天主堂も例外なく無残に破壊された。マリア像の首は折れ、白く美しかった石柱は黒く焼け焦げた。キリスト教国であるアメリカが、200 年もの間潜伏し信仰心を持ち続けたクリスチャンの頭上に悪魔の兵器を落とした。この事実は、未だに世界であまり知られていない。また、原爆投下後、「被爆は天罰である」というクリスチャン間での差別も起こる。

### ③復興の歴史

1945 年 8 月 15 日日本のポツダム宣言受諾により、第 2 次世界大戦は終わり、長崎は復興への歩みを始めた。先に述べたように復興とは 2 つの復興があり一つは「都市」、もう一つは「ひと」である。ここで質問。

Q. 「長崎が原爆が投下された場所」という知識なしに、長崎のまちを観て「被爆地」ということがわかるだろうか？

A. わからない。まちはきれいだ。

私の意見も同じである。まちがあまりにも美化されている。また、あまりに多くの像が並べられ、莫大な費用が掛かる施設がある。これでは、被爆地と言っても現実味がない。さて、ここでもう一つ質問。

Q. ルワンダの復興はどんな様子か？また、あなたはその復興の様子をどう思いますか？

A. ルワンダは長崎のようにきれいなまちではない。長崎のようなまちづくりができればいいと思う。長崎で学んだことを生かして、都市計画が立てられるのではないだろうか。

次に「ひとの復興」の話に移る。毎年 8 月 9 日の平和記念日に登校日が設けられ、小中高生は平和学習を行う。具体的には、被爆者の講話、千羽鶴作成、平和を願う歌の斉唱、「はだしのゲン」などの映像鑑賞、そして黙とうなどだ。また、生徒の代表は平和祈念式典へ参加し、献花や千羽鶴を献上したりする。ここで、長崎活水高校平和学習部のみなさんに普段の活動についてのプレゼンをお願いする。「振袖の少女」の絵本を英語で朗読。その後、平和学習部の活動について紹介してくれた。

### ディスカッション

1 班 5 名程度のグループに分かれて、ロールプレイを行う。

#### 事例

あなたは父親または母親で、他のグループのメンバーはあなたの子供です。あなたは子供たちに「平和なまち」の築き方について話してあげてください。ただし、子供たちはみな 5 歳児で、1 分間で簡単に伝えてください。

—グループでロールプレイヤー

母親 A：自分がやりたくないこと、他人がされたくないことを決してやってはいけません。

父親 A：被害者目線にも、加害者目線にもならなければならない。

母親 B：あなたは周りの人たち、兄弟や姉妹と楽しむことで十分よ。そして祖父母や両親を敬うこと。もちろん家族だけでなく、国中の人とできるといいわ。

それでは、グループで最も優れた父親または母親を決めてください。

—各グループで最優秀父親・母親を決定—  
ここで、選ばれた父親、母親に質問です。  
あなたが子供たちに話すうえで、注意した  
点はなんですか？

母親C：「平和(peace)」という単語を使わ  
ないようにしたわ。なぜなら、「平和」とい  
う概念は理解することが難しく、「平和」と  
いう言葉を用いることで、真理から逸れて  
しまうかもしれない。

父親B：平和でいるのは簡単なことだ、と  
いうことを伝えるよ。

次に、各国で行われている平和教育につい  
て聞いてみたいと思います。

フランス：「平和教育」に合致するものは存  
在しない。フランスでは幼少期から、自由  
と平等について考える。また、学校には異  
なる国や異なる宗教を持つ友人がおり、コ  
ミュニケーションをとることで、互いの差  
異を正しく認識する。

オーストラリア：「平和教育」という名目  
での授業はない。国や地域の歴史を学ぶ中  
で、平和についても学んでいる。イギリス人  
がオーストラリアを占領した「アボリジニ  
の失われた時代」について学ぶ。また、現  
代では、白人もアボリジニも社会的に平等  
な機会が与えられるようになっている。

ルワンダ：授業はクラブ活動で平和学習を  
している。また、家族の中でも子供たちに  
伝えなければならない。

これで最後のディスカッションです。「戦争  
の話の話を次の世代へと伝えていくうえで、  
大切なことは何ですか？」どのように説明  
するか、何に気を付けて伝えるべきか、何  
を話すべきか、考えてください。

—グループ・ディスカッション後、共有—

A.映像などで多くの情報を保存することが  
重要である。なぜなら、被爆者はすでに高  
齢になっており、やがては居なくなってし  
まう。その前に映像などの形で、実体験の  
語りを保存しておかなければならない。

A.もし自分が悲惨な出来事（虐殺や原爆）  
を体験したならば、自分の子供たちに伝え  
なくてはならない。いつ、どこで、何が起  
こったのか正確に。そのようにして、情報  
を保存すべきだ。そうすることで、二度と  
同じ過ちを犯さないだろう。

A.日本では戦争について学校でよく学ぶ。  
原爆投下の日時も覚えているし、終戦日も  
覚えている。しかし、それよりも大切なこ  
とは、なぜ戦争が起こったのか、そのプロ  
セスを知ることである。それで戦争を未然  
に防げるはずだ。

#### 4. 感想

##### 発表者

今回の長崎企画を通して、JRYC メンバー  
は長崎のまちを歩き、様々な顔を持つまち  
を観てきた。しかしながら、私たちが観ら  
れるまちはあくまでも現代のまちであり、  
復興前そして原爆投下前のまち並みは観る  
ことができない。そのため、イメージの中  
で、現代以外の長崎のまちを創造すること  
は復興の過程を考える上で欠かせない。こ  
のことを踏まえたうえで、歴史をおさらい  
して、復興についてのプレゼン、グループ  
ワークという形態を用いた。

第5回本会議でも見せた「はだしのゲン」  
の映像は、各国の学生たちが驚いているよ  
うだった。日本では、PTSD（心的外傷後  
ストレス障害）やトラウマにもなりかねな  
いような、強烈な映像を見せるという平和

教育があることも理解してもらえたかと思う。また、発表者が日本の平和教育についてただ述べるだけでなく、現役の高校生が普段行っている活動を紹介してくれたことで、平和教育についてより現実的、具体的にとらえることができた。

グループ・ワークにおいては各グループ盛んに意見が出て面白かった。私たちの若い世代も、あと10年もすれば父親や母親になっているかもしれない。そのとき、子供に何が伝えられるだろうか、ということを各自考えてほしかった。また、家族の中で伝えるというミクロな視点から、世代を超えて語り継いでいくというマクロな視点まで順を追って考えられた点は、上手くいったと思う。各国の平和教育事情も聞け、とても興味深いものだった。

### 参加者

長崎での活動を振り返ると、素晴らしいものであった。高校生の発表とディスカッションがとても印象に残っている。とくにディスカッションは興味深いものであった。若い世代に会い、「平和」について考えられたことは、嬉しかった。

(ルワンダ側メンバーEugene、今泉訳)

## 観光業の功罪

担当者：星野 真希、満越 裕馬

### 1. 日時・場所

日時：12月26日(月) 14:30~15:30

場所：長崎大学 文教町キャンパス 教育学部 1F12 番教室

### 2. プレゼン要旨

長崎市は観光資源が豊富であるだけでなく、地域主体の観光業である「長崎さるく」が取り入れられ、注目されている。

観光業は経済成長に貢献する重要な産業である一方で、地域社会に対して負の影響を与えうる。

今回のプレゼンテーションでは観光業について、一般的な観光業（ツアーによる大型観光）と「長崎さるく」に代表される地域主体の観光業とを区別した。一般的な観光業にみられる功罪両面について考え、地域主体の観光業が一般的な観光業の悪影響を緩和するものであると考えた。

### 3. プレゼン詳細

#### ・観光業の良い面

観光業のメリットとしては、経済成長を促進すること、雇用を生むこと、外貨が流入することの3点が挙げられる。

経済成長の促進について、旅行者による消費が重要である。旅行者は観光をしている間にホテルや食事、移動、そしてお土産などにお金を使う。2009年日本で旅行者が消費した額は2兆ドルに達するが、これはウガンダのGDPと同規模である。

雇用について、日本で観光業に従事する人は約400万人であるが、これは日本の全

ての労働者の6%を占める。

#### ・長崎における観光業

長崎の観光業の特徴は、原爆投下の過去のある平和都市であること、外国の様式である建物が多いこと、そして基督教の歴史があるということである。これらは、長崎を観光することを通じて、旅行者は歴史と文化の両面について学べるということの意味している。

2010年には70万人の旅行者が訪れている。長崎市では多くの人が観光業に従事しており、長崎市の全産業において観光業は20%を占めている。このため長崎市の経済にとって観光業は非常に重要な産業である。

#### ・観光業の悪い面

観光業の悪影響として考えられる最も大きなものは、観光地と交通機関が過度に混雑することである。観光シーズンに旅行者が観光地に向かうことで、交通機関の混雑や道路渋滞が生じてしまう。

この悪影響の一例として長崎市と同様に観光が盛んである京都市を挙げた。京都市では観光シーズンの道路渋滞が深刻である。ある有名な寺社の前の道は普通自動車に対向するだけでも精一杯な細い道である。しかしこの道には、観光シーズンには寺社に向かうための大型観光バスが多く通行する。その結果、バスによって対向車がスムーズに進むことが出来ず、道路渋滞がしばしば生じるようになった。また、バスと対向するためには車は建物ぎりぎりまで寄る必要があるため、歩行者にとって危険な状態となっている。

このような事例が様々な場所で生じる京都市では、旅行者の数についてどう思うか

住民と商店経営者に尋ねたアンケートによると、旅行者の数が多すぎると感じる住民は75%に達している。これは京都市の商店経営者の85%が旅行者の数は適切あるいは少なすぎると感じている点と対照的である。

#### ・観光業の悪影響の要因

このような悪影響の要因として、観光業と地域社会との関係が弱いということが挙げられる。一般的な観光業は旅行代理店によって企画が作られ、大型バスによって各地を巡る。この過程では地域住民の意見を取り入れる機会が限られている。そのため地域の問題点が改善されることなく、ツアーの企画が続くこととなる。

一方で「長崎さるく」に代表される地域主体の観光業においては、地域住民の意見が取り入れられる機会に恵まれており、その意見を反映することで悪影響を緩和することが出来る。

#### ディスカッション

今回はルワンダ人学生だけでなく、オーストラリアやフランスなど他国からの留学生も参加していた。そこでディスカッションのテーマを観光業の良い面と悪い面とし、自国での経験を踏まえて意見を出してもらった。

観光業の良い面としては、観光業は海外への自国のアピールとなるという意見が出た。旅行者は観光で訪れた国で良い経験をすると、帰国後に友人等にその経験を話す。観光を通じて口コミで国の良いイメージを海外に拡げることが出来る。

観光業の悪い面としては、戦争祈念館や

被災地などが、その意義に相応しくない形で観光地扱いをされてしまうという意見が出た。この例としてアメリカ同時多発テロ事件のグラウンドゼロが挙げられた。グラウンドゼロでは観光地化が進み、笑顔の写真を撮る観光客やピースサインで写真を撮る観光客が多い。戦争・被災祈念館に多くの人を訪れ、その歴史的な背景を知るとは平和継承の観点から重要であるが、このような観光客の態度の問題についても考える必要がある。

#### **4. 感想**

戦争・被災祈念館の意義を十分理解しながら、旅行気分でそれが抜けてしまった経験を思い出した。このような施設を訪問する際には、旅行気分は捨て、被害を受けた人の立場になって行動することが不可欠であると思う。

一方で長崎の原爆資料館の入口前には「長崎さるく」のポップなキャラクターの像があり、個人的に少し違和感をもった。

より多くの人に知ってもらう過程で観光地化は避けられず、観光地化と平和継承の共存は難しい問題だと痛感した。(満越)

## 【コラム】ドンベの歯ものがたり

大阪企画一日目の昼下がり。「歯が痛くて夜も眠れない…限界だよ…」普段は元気なマジャンベレ（通称ドンベ）が元気のない声で私に訴えてきました。遡るほど3日前。彼が「歯が痛むんだ」と言い始めました。しかし病院に連れて行くとお金がかかるので、最初は市販の鎮痛剤をあげて我慢してもらっていました。その頃はまだ冗談を言う元気があった彼でしたが、しかし、ついに大阪初日に彼の歯は耐え切れず悲鳴をあげたようです！（キャーッ）相当痛いんだなということが伝わってきたので、即、歯医者さんに連れていくことにしました。

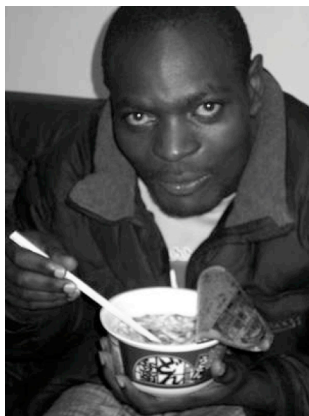
やってきたのは、活動場所から徒歩15分の天王寺にある「緒方歯科」。優しそうな緒方先生が迎えてくれました。先生に病状を伝えるドンベ。曰く「痛んでる歯は、ルワンダで一回治療したことがある。日本に来た時から痛かった」。…?!なんでそれを先に言わんかーい！もしかして、来日時点で日本での治療を狙っていたのか、ドンベ。

レントゲンを撮影して虫歯が☆神経まで到達☆していることが判明しました。ここで治療方法を緒方先生と私とドンベで相談した結果、「なるべく安く、1回の通院で済んで、帰国するまで痛まない」という方針の下、神経を抜くことを選択しました！緒方先生がレントゲン写真を使いながら親切に説明して下さったおかげで、言葉の壁も難なくクリアー。

さて、いよいよ治療が始まります。はじめての日本の歯医者さんに慣れない様子のドンベ。口をこまめにゆすいでもいい事や、コップを置けば勝手に水が継ぎ足されることを教えます。そして緒方先生からも”if you feel pain, please raise your left hand”（痛みを感じたら、左手をあげてください）との指示が。ういーんと歯医者さん特有の音が響きます。……そして30分後。無事に治療は終了しました。

最後には、緒方先生とドンベがルワンダの歯医者事情について簡単に情報を交換して握手を交わしたり、受付のお姉さんに団体紹介用のパンフレットをあげたりと、当事業の目的の一つである「一般の日本の方々にルワンダのことを知ってもらおう」ことが達成されていたように感じました。歯医者から始まる国際交流ですね。

その後は皆の元に戻り、笑顔と共に活動に復活したドンベ。さっそく夜には、お気に入りの日本人メンバーを口説きにかかっています。元気になってよかったね！（by 付添人岩井）



←写真：どん兵衛を食べるドンベ（治療後）

# ホームレス問題

担当者：小坂 弘奈



## 1. 日時・場所

日時：12月29日（木）

場所：西成プラザ

## 2. プレゼン要旨

ホームレス、日雇い労働者、外国人、高齢者、バックパッカーなど、様々な人が集まる釜ヶ崎を訪問し、炊き出しや夜回りなどのプログラムに参加するにあたり、日本のホームレスとはどのような人たちか、また釜ヶ崎やその他寄場と呼ばれる町について18枚のスライドにまとめ、「ホームレスは怠け者か?」と「なぜ、ホームレスになったのか?」というテーマで5つのグループに分かれディスカッションをした。

## 3. プレゼン詳細

まず、ホームレスという言葉の意味合いは国によって異なるが、多くは「路上生活を余儀なくして送っている人」という共通の理解があること、そして現代の日本社会には路上では生活していないが、いわゆる

ネットカフェ難民のような人も多くいること、彼らもホームレスであるという自身の意見も説明。続いて路上生活にいたるまでの大まかな理由を挙げ、さらに路上で生活する人たちの生活スタイルを、移動型と定住型に分け、ドヤと呼ばれる簡易宿泊所に住む人もいること、そのドヤの中には私たちが宿泊したようなバックパッカー向けの宿に変わったものもあると紹介した。そして釜ヶ崎のようにかつての日雇い労働者が数多く集まる、寄場と呼ばれる町がつけられた経緯について、高度経済成長期に、都市の発展に伴い多くの労働力が必要になり、日雇い労働が集められたが、都市の大部分の建設が終わると期間雇用の彼らに仕事はまわらなくなり、ホームレスになってしまう人が増えたと説明。

そのうえで、「ホームレスは怠け者か?」と「なぜホームレスになったのか?」という議題でディスカッションをした。結論は、ほとんどのグループが彼らの中には空き缶や段ボール収集で収入を得ている人も存在しており、労働の意思を感じられることもあり、ホームレスは怠け者ではないとなった。しかし、中には働けるはずなのに働かない若いホームレスは怠けているという意見もあり、炊き出しなどの支援をしすぎるとそれに頼りすぎ、怠ける人を生み出してしまうという指摘もあった。ふたつ目のテーマについてはどのグループも日本の雇用環境に問題があるという意見だった。

## 4. 感想

### 発表者

兼ねてから自分自身が抱いていたホームレスは怠け者なのか?という疑問を参加者

と共に考えることが出来たのが大きな経験になった。私の意見は、彼らは怠け者ではないというものである。世間の冷たい視線の中、路上で生活することは相当勇気がいることで、それでも生きてゆくことに力強さを感じる。怠け者はホームレスにはなれない。今後も、路上生活を余儀なくしている人々が「生きる」ことを支援したい。

### 参加者

自分の家を持たない人々。中には家族と離れて路上に住むことを決める人もいと聞いた。路上生活者の状況はとても悪い。路上生活へ転じた原因は人々が学校を離れ仕事に追われた 1970 年代、ちょうど経済成長期にあったと聞いた。その後、彼らは勉強を続けることができず、仕事を得ることができない。それが原因で今、彼らは路上で暮らしている。

私たちルワンダ人は日本に来なければ日本に路上生活者がいるとは考えられない。なぜだろう。それは、私たちが日本を世界の中でも裕福な国だと思っているからである。来る前から大阪に路上生活者がいるとは聞いていたが、私たちが実際に見たようには想像していなかった。

日本の政府には路上生活者を援助してもらいたい。そしてルワンダ人もまた（彼らの生活が向上するように）願っている。

（ルワンダ側メンバーGerardine、久保訳）

## 東日本大震災

担当者：乾 敏恵

### 1. 日時・場所

日時：12月29日(月) 10:30~12:00

場所：西成プラザ

### 2. プレゼン要旨

東日本大震災から1年が経とうとしている。これからが復興の本番とも言うべき時にきていると感じた。そのため、学生として、東北から遠く離れた関西で被災者の方に何が出来るのかを皆で考えたいと思い、このプレゼンテーションを行った。また、第6回本会議で、原子力発電所についてプレゼンテーションを行ったこともあり、震災について1回きりではなく、継続的に皆に考えてもらいたいと思った。

### 3. プレゼン詳細

関西の文化や地域性の説明をした後、関西に避難・移住してきた被災者の方がどれくらいいるのか、どのような問題を抱えているのかを提示した。そして、そのような問題を解決するために、学生やNGOなどが、どのように彼らを支援しているのか表した。プレゼンテーションの中に、私が宮城県で行ったボランティア経験も含めた。

縁もゆかりもない関西に避難・移住してきた東北の人々が抱える問題として社会的つながりの欠如がある。その問題を解決するために、関西の学生として何が出来るか、についてディスカッションした。

約20分のプレゼンテーション終了後、約40分間を使い「関西に避難・移住している



東北の人々が抱える問題のひとつとして、社会的つながりがある。どのようにすれば、東北の人どうしが、それを構築していくために、学生には何が出来るか。」という内容でディスカッションを行った。

ディスカッションでは、バラエティーに富んだアイデアが提案された。フェスティバルを開催すること、チャリティーコンサートを開催すること、コミュニティスペースを構築することなどがある。フェスティバルでは、大学の施設などを無料で使用し、東北と関西の食を交流するイベントを開催し、そこへ東北出身のミュージシャンを招いて公演してもらったりするというような、学生らしいアイデアが多く生まれた。

#### **4. 感想**

##### **発表者**

前回の学生会議に続いて、東日本大震災についてプレゼンテーションした。前回は主に、原子力発電所についてであったが、今回は、関西で会議が開催とのこともあり、関西で学生として出来る支援は何かについて、発表した。また、釜ヶ崎について学んだ後ということもあり、「社会的つながり」についても、発表の中に混ぜた。そして、調べていくうちに、関西にある大学やその学生などによる、東北への支援が意外とたくさんあることに気付いた。ニュースにはなっていないような小さなものであるが、草の根レベルの非常に意味のあるものばかりであった。「社会的つながり」を避難・移住先の土地でのその構築という点では、ま

だ数は少ないかもしれないが、今後その数が増えていくことを期待したいと思う。

日本という国の特性上、また、東日本大震災のような大規模の地震が日本を襲うと予想されている。私たちは、その時、被災者になるかもしれないし、支援者になるかもしれない。自然災害は避けて通ることができない。その災害が起こった時、私たちはどう行動するのか。その点を考えてもらいたいとも考え、今回このトピックを選んだ。災害は、どこか遠くで、自分とは関係ない所で起こるのではなく、明日は我が身であると考えておくべきだろう。その日が来ることも考えながら、関西への避難・移住されている方へ、自身が出来ることをこれからも、続けていきたいと思う。(乾)

---

## ◎ コラム お正月 ◎

男性陣は品川家で年越しです。去年も一週間くらいホームステイで滞在したんですが今年は正月ホームステイです。お父さんも張り切っておせちやら寿司やらシャンパンやら・・・(笑)



今年のルワンダンはドンベ君を筆頭におせちなどの日本食もがんばって食べます！ルワンダ人にとって味付けも見た目もまったく異質な日本食だと思いますが、箸を器用につかってばかりばかり。そんなこんなで正月は過ぎていくのでした。

翌日元旦は午後から横浜へ！アルフの友達の高橋さんと横浜で合流して観光してきました！お恥ずかしながら、20年間横浜に住み、根っからのはまっこであるはずの僕は横浜に詳しくないので高橋さんに案内していただきました！(^q^)笑。



とりあえず、写真を見てのとおり、めっちゃはしゃぎましたとさ(笑)最初は、正月にルワンダンガールズに会いたい会いたいとベソベソ言っていた三人ですが、思いっきり正月を楽しんでくれたみたいでよかったです。(品川)

# The Death Penalty

担当者：河合 俊行

## 1. 日時・場所

日時：1月4日(水) 10:30～11:50

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

## 2. プレゼン要旨

目的は「死刑に賛成か反対か」に関するお互いの意見をぶつけ合うことではない。先進諸国の中でアメリカを除いて唯一死刑を存置している日本の死刑制度の現状を、そして一方で、ジェノサイドを経験したにも関わらず死刑制度を2007年に廃止したルワンダの現状を、それぞれを共有した上で日本人とルワンダ人の意見を相互に交換するための場である。

## 3. プレゼン詳細

### プレゼンの流れ

全体で3つのセクションに分かれており、ディスカッションも3回行った。

まず、最初のセクションでは国際社会で見た死刑制度の現状に関する情報を共有した。ヨーロッパ諸国は概して死刑を廃止していること、一方でアジア諸国には依然として死刑を存置している国が多く、その中には日本も含まれているということ。そして、死刑執行の手段には日本で採用されている絞首刑の他にも、石打ちや電気椅子、ガス等があると説明した。ここでのディスカッションのテーマは、「あなたの親族が殺されたことを想定した上で、あなたは死刑制度に賛成もしくは反対ですか」である。

次のセクションでは、日本における死刑

制度に関して説明した。まず、先進諸国の中でアメリカを除いて唯一死刑を存置しているという、世界的に見て極めて異端な立場を固持している日本の現状を説明した。その後、国勢調査で80%以上の日本人が死刑制度に賛成していること、そしてその理由として、日本特有の概念として「目には目を歯には歯を」といった「応報的正義」の考えが挙げられると説明した。そして現行の死刑制度の問題点を共有し、死刑執行までに平均7年程の時間を有することや、冤罪の問題から自由ではないということ、そして死刑制度に関する情報が国民に対して十分に開示されていない、などといった事柄について共有した。最後に、死刑存置論と死刑廃止論のそれぞれの主張を紹介した。ここでのディスカッションのテーマは、「日本の死刑制度の問題点は何か。そして、日本政府はどのようにこれらの問題に対して対処していくべきか」である。

最後のセクションでは、ルワンダの死刑制度に関する情報を共有した。ジェノサイド発生後のルワンダの司法制度には死刑が存置されていたが、1998年の執行を最後にルワンダでは死刑が行われておらず、2007年に死刑制度廃止が決定されたということの説明をした。ルワンダ政府のこの動きには、死刑廃止国へと国外逃亡を図ったジェノサイドの容疑者をルワンダに返還させ、自分達の手で裁くという狙いがある。「殺すのではなく裁く」ことを選択したルワンダ政府の意図を説明し、最後のディスカッションへと移った。最終ディスカッションのテーマは、「死刑制度は正義の実現に必要なか」である。

## ディスカッション

最初のディスカッション「あなたの親族が殺されたことを想定した上で、あなたは死刑制度に賛成もしくは反対ですか」の狙いは、死刑制度に関する情報がほとんど無い状態で、メンバーが直観的に思ったことを話して貰うことにあった。そして2つ目のディスカッション「日本の死刑制度の問題点は何か。そして、日本政府はどのようにこれらの問題に対して対処していくべきか」の狙いは、死刑制度の是非といった議論からは少し離れ、日本は死刑制度を存置しているという事実を所与として受け止めた上で、何が問題で日本として今後どうしていけば良いのかを議論させることであった。最終ディスカッション「死刑制度は正義の実現に必要か」の狙いは、今までのプレゼンで説明された情報を踏まえた上で、日本人とルワンダ人の考えの異同を見出す狙いがあった。

冒頭で説明した通り、今回のディスカッションは最終的に死刑制度に賛成か反対かを定めるためのものではない。私は、その人の一家言を形成する過程において、必ず様々なバックグラウンドが影響を及ぼすと考えている。そのため、日本が死刑制度を存置し、日本人の大半がそれに賛成する理由には日本特有の理由があり、一方でルワンダが死刑制度を廃止し、ルワンダ人が死刑制度に反対である理由にもルワンダ特有の理由があると考えた。今回の死刑というテーマは、このような日本人とルワンダ人の考え方の異同を見出すには絶好のテーマであったと思う。日本における死刑制度の議論の際に、良く「じゃあ仮にアナタの大切な人が殺されたらどう思う？」という仮

定の議論が行われることがある。これは紛争をあまり経験していない日本人にとって、身近な事柄として非常に想定しにくい仮想であるが、ルワンダ人にとってはそうではない。得てして「被害者感情」に重きを置く日本人の考え方に、ジェノサイドを経験したルワンダ人の考えをぶつければ面白いのではないか、このようなことを考えて実施したプレゼンであった。

今回のプレゼンを通してルワンダ人側から出た意見には、

- ・死刑を行うことで、犯罪の原因を追求することができなくなる
  - ・死刑によって人を殺すことで、人という資源を失ってしまう
  - ・更生の機会を与えることができない
  - ・死刑囚にも家族がいる
- 等といったものが挙げられる。一方で日本人が挙げた意見としては、
- ・死刑の適用基準を厳しくする
  - ・死刑制度の代替案（終身刑等）を導入する
  - ・凶悪犯罪は死を以て償うべきだ
  - ・死刑には犯罪抑止力はない
  - ・死刑制度には反対であるが、深刻な罪を犯した人間は死刑にされるべき
  - ・死刑は国連のような超国家機関が行うべき
  - ・国際社会の一員として、日本は死刑を廃止するべき

等が挙げられる。これらを見れば明らかな様に、死刑制度について議論するといっても、簡単に「反対か賛成か」という二項対立では議論できない。誰しもが、自分の死

刑制度に関する意見を説明するのに苦労していた様子であった。最終ディスカッションの際に日本人メンバーが、「正義には死刑が必要か」ではなく、「死刑には正義が必要である」と言っていたことも印象的であった。また、基本的には死刑制度に反対であるが、自身の親族が全員殺された場合には犯罪者を死刑にして欲しいと望むといった意見や、戦争を引き起こした人間は死刑にされるべきだという日本人メンバーの意見が聞かれた。

#### **4. 感想**

##### **発表者**

1 時間という限られた時間の中で、そしてディスカッションの時間もそれぞれ約 15 分と極めて短い中で、死刑に関してお互いの意見をぶつけることは困難なことであった様に思う。個人的な感想としては、特に Eugene の「死刑を行うことで、犯罪の原因を追求することができなくなる」という意見が印象的であった。過去の過ちをどのようにして未来に活かしていくかが大事であるという、未来志向的な考えをルワンダ人は大切にしているのだと感じた。

死刑制度に関する日本ルワンダ学生会議のメンバーの意見としては、全体的に死刑制度には反対であると感じた。これは当初の想定とは若干異なっていたが、しかしながら特殊なケースにおいては死刑適用もやむを得ないという意見があったことや、仮に自分の家族が全員殺された場合は死刑を望む、といった意見もあったことは見逃してはならない。

最後に、この場を借りて私の今現在の死

刑制度に関する持論を記させて頂きたいと思う。この発表を行う前は、私は「死刑賛成論者」であった。そして結論から述べると、今も私が死刑賛成であることには変わりない。ただし、現行の死刑制度は改善されなければならないと思っている。まず、日本国民の 80%以上が死刑制度に賛成していると述べたが、これは極めて狭隘な情報的基礎に成り立っている世論であると私は考える。死刑制度に関する情報が国民に開示されていない結果、死刑制度の実態、問題点等を国民が知る機会が保障されていない。私は、国民を巻き込んだ死刑制度に関する議論を行う場が、日本においてもっと増えなければならないと考える。適切な議論を経た上で、人命を扱う死刑制度の是非が問われなければならない。今回のディスカッションにおいても、死刑執行までの平均所要期間が 7 年間といったことや、死刑執行当日になるまで死刑囚に執行の旨が伝えられないといった問題点を、日本人メンバーが全く知らなかった現状にも問題意識を持った。

死刑制度に関する議論には、冤罪、代替案としての終身刑、裁判員制度、死刑の犯罪抑止力など、多くの論点が存在する。これら全ての側面に対して日本国民の一人一人が、どう考え、どのような意思決定を下すのか、国としてより世論を喚起させていかなければならない。私を含め、多くの日本人が、人の命を扱う死刑制度について真摯に考えていかなければならないという自戒の言葉を以て、私の報告の終わりとさせて頂きたいと思う。(河合)

死刑制度というテーマは私にとって非常に興味深いものだった。プレゼンの中ではこのように絞首刑の様子が写真で紹介され、日本やシンガポールでそれが実施されているなど、新しい知識を得ることができた。ルワンダの死刑制度に関する情報等も、私達が知らなかった知識を与えてくれた。何よりも一番印象的だったことは、プレゼンターである hiromi (担当者のニックネーム) のプレゼンの仕方である。要点を衝いていて分かりやすく、彼からプレゼンの作り方を学ぶことができた。(ルワンダ側メンバー Eugene、河合訳)



## フツとツチは民族か？

報告者：MAZIMPAKA Eugene

担当者：品川 正之介

### 1. 日時・場所

日時：1月4日(水) 10:00～11:00

場所：

オリンピック記念青少年総合センター

### 2. プレゼン要旨

フツとツチは民族ではなく作られたものだということをジェノサイドにいたるまでの歴史やその後の和解の取り組みを通じて説明。

### 3. プレゼン詳細

#### ■ ツチとフツは民族か？

ツチとフツは民族ではない。以前それらはただの社会階層の違いであった。民族はコミュニティ、言語、文化、居留地、宗教などが異なるものだ。しかしフツとツチはそれらを共有する。多くの研究者はルワンダでの長年の対立が宗教や言語の違いなどによってもたらされることではないことに驚かされる。

#### ■ 対立の始まり

長年の対立の始まりは白人たちがアフリカ、ルワンダにやってきたところから始まる。彼らはフツとツチの違いを発見しようと躍起になった。ルワンダをコントロールしやすくするために彼らはフツとツチを分類するシステムを作り、適応した。ルワンダの歴史は二つのフツとツチの対立に象徴されるが、その対立の最も究極的な形が1994年のジェノサイド(Genocide against

Tutsi)であった。

#### ■ジェノサイドの終結

1994年のジェノサイドは当時の政府によって実行された。1959年から続く長年の対立の究極的な結果であった。ジェノサイドは、当時隣国に逃げていた人々によって組織されたRPF(The Rwanda Patriotic Front)によって終結させられる。

#### ■和解

長い対立の歴史を経験したといっても、生きていくために、コミュニティを再建するためには、ルワンダでの人間関係の再構築、和解は避けては通れない道であった。今ルワンダでは、平和で平等な社会を作ろうと努力している。平和で平等な社会を実現するために、ルワンダ政府は様々な政策を実行した。1999年のNURC(National Unity and Reconciliation)もその中のひとつである。NURCの活動の一例として、広くディスカッションやディベートなどを行うなどがある。

#### 質疑応答

Q.

NURCの活動紹介の写真に西洋人がスピーチしている写真があったが、彼女は何者か。

A.

おそらく、オクラホマ大学の学生だと思う。NURCの活動にひとつで、ルワンダで起きたことについて国外の学生とディスカッションを行うことがある。

Q.

なぜルワンダ政府は「ひとつのルワンダ」を掲げているのに、ジェノサイドを「Genocide against Tutsi」と呼ぶのか。

A.

正確な答えは与えられないけど、個人的には、当時はフツがツチを虐殺している場合が多かったからだと思う。また当時はアイデンティティーカードでフツ・ツチとはっきり区別されていたからだと思う。しかしこれは難しい問題だし情報も足りないからなんとも言えない。

Q.

生活の中でフツやツチなどの概念は存在するか。

A.

祖父祖母などお年寄りの世代は、そのようなフツ・ツチと区別された時代に生きたから、いくらかそういう考えは残っていることがあるかもしれないけれど、若い世代はそんなことはない。

Q.

ジェノサイド関連でAVEGAやIBUKAという団体があると聞いたがどのような団体か。

A.

AVEGAはジェノサイドで夫を亡くした未亡人のための団体で、IBUKAは海外からの援助を得たりして、ルワンダの学生や孤児を支援したりする団体である。

#### ディスカッション

- ①あなたは人と和解することができるか。
- ②和解するにはどんなことが必要か

#### ◆グループ①

・以前ルワンダ渡航の打ち合わせでルワンダ側とインターネットを通じ連絡を取り合っていたときに色々もめたこともあったけど、実際にあって話して見たらいろんなこ

とが一気に解決した経験がある。直接会うことが大事。

・相互理解、お互いを知ることがなにより大切。

#### ◆グループ②

・日本とルワンダでは和解の意味合いが少し異なる。

・ルワンダのガチャチャ裁判のように、洗いざらい自分の持つ真実を述べること、そして対立している相手はそれを受け入れて理解する努力が和解には大切だ。和解の例として、ルワンダでは、ジェノサイドで罪を犯した人々が、ジェノサイド被害者の人たちと共同生活をするという事例もある。

・もし、友達と喧嘩などをしてしまった場合は、もし連絡がまだ取れるのであれば、ちゃんともう一度話して仲直りする、取れないのであれば仕方ないけれど忘れてしまう、つまり仲直りするか、忘れてしまうかすることで精神的に自由になるべき。

#### ◆グループ③

・歴史認識が難しい問題。国によって歴史の教え方が異なる。

・未来を考えるのには、過去を清算することが必要。しっかりと謝罪をしなければいけない。

・政治的な問題を個人的な感情問題と混同すべきではない。

## 4. 感想

日本とルワンダでは和解の意味合いはかなり異なるものがあると思う。もし自分が何か紛争や対立の当事者になって和解をしようとするとき、この議論で出てきた意見

を実際に実行に移せるかどうか聞かれたら、正直できるか自信がないし、わからない。ルワンダ人の意見で面白かったのは、ルワンダはフランスと政治的にいくつかの問題をもっていても、それは政治のうえでの問題であって、別にフランス人のことが憎いとかいう感情はもっていないとのことだった。以前ルワンダに渡航した際にルワンダ人に旧宗主国の国々についてどう思っているか聞いてみたところ、悪いどころかむしろ良好な関係だと答える人が多く、留学に行く学生も多いこともあり、嫌いと言う感情を述べる人は少なかった。日本と中国、韓国などの国は歴史認識問題において多少軋轢があつて、一部の人は感情的に嫌悪感を示す人もいるが、政治と感情を分けて考えることが重要だと思った。(品川)



# 女性の権利の向上と

## 男女平等

担当：Kaneza Nadine

訳/報告：嶋田 康平

### 1. 日時・場所

日時：1月4日(水)

場所：オリンピック記念青少年総合センター

### 2. プレゼン要旨

まず、男女平等の定義を概説する。

次にルワンダにおけるジェンダー政策を概観した後、ジェノサイド後のルワンダでの女性の地位に言及した。

### 3. プレゼン詳細

#### ①男女平等の定義

男女が同じだけの社会参加の機会を有するという社会的平等がある。男女が同じだけの収入を得て利益を享受するという経済的平等がある。

男女平等とは、男女の差を認識した上で、上の社会的平等と経済的平等が満たされた状態である。

#### ②ルワンダ政府

ルワンダでは、要職の30%を女性に当てよう課せられており、国会の議席の56%は女性である。また、2011年は女性差別撤廃条約に批准してからちょうど30年の年であった。政府は、女性に対するあらゆる暴力行為の根絶の方針をとっている。

#### ③歴史的背景

ルワンダ愛国戦線(RPF)が1994年に実権を握り、女性の権利に関する改革が行われた。ジェンダー省が発足し、国会への女性参加の制度も整えられた。ルワンダの民主主義化の下で、一般生活と政治的場面においても、女性の権利が拡大した。

#### ④ルワンダの現状

2003年の改正憲法において、性別による差別の禁止を謳っているが、実際に女性に不利な状況が残る。1992年制定の家族法は、結婚や離婚、親権問題における女性の法的地位を保障している。家族法制定前は、財産も親権もすべて男性に属していた。制定後、家庭内における男女の地位は改善された。ジェノサイド後の社会で、女性は社会参加が進むものの、大多数の女性は農業に従事している。

また、女性の尊厳という点で、女性に対する暴力の問題も深刻化している。とりわけ、家庭内暴力は法の処罰の対象となっている。国の方針に基づき、レイプに対しても懲役20~30年という厳しい対応がなされている。

#### 質疑応答

Q.就労において、男女の差別は存在するか。

A.存在する。女性を雇わない企業がある。また、妊娠して休暇をとった場合などは、辞めなければならないときもある。

Q.妊娠した場合、何らかの援助はあるのか。

A.女性はだいたい1ヶ月~2ヶ月の間、育児休暇をとることができる。

#### ディスカッション

#### トピック①

ルワンダがさらに男女平等社会となるために、何をすればよいか。

#### トピック②

日本にとって、世界の中で有数の男女平等社会を目指すことは必要か。

以上のトピックが出された。実際は、両社会のジェンダーへの考え方の違いについて共有する時間となった。ここでは、議論をいくつか取り出して紹介するにとどめる。

#### ◆皿洗い問題

いずれのグループも、身近な例で議論を進めていた。日本滞在中、ルワンダ・レディーズが皿洗いをし、ルワンダ・メンズは何もしないという場面が話題にあがった。男性に力仕事をしてもらい、女性には細かい仕事をしてもらうというだけのことだという見解もあった。

ルワンダ人からは「It's culture. (文化だから)」という説明もあった。

#### ◆日本の女性議員の少なさ

ルワンダ人メンバーが、日本の女性議員の少なさについて、「女性は政治に興味がないのか」という質問をした。

これに対し日本人メンバーは、育児しながら働くのが難しいため、政治に興味がないため、と説明した。男性は政治について話すこともあるが、女性はいわゆる、ガールズトークをしているという意見もあった。

#### ◆女性の育児

あるグループでは、乳母が話題にあがっていた。ルワンダでは、乳母を雇うのが普

通なため、子どもがいても仕事に復帰できる。しかし、日本ではお金がかかるため乳母は一般的でない。そのため、女性の職場復帰が遅れてしまう場合が多い。女性国會議員が少ないという日本の状況も、この点と深く関わっているだろう。

#### 4. 感想

個人の価値観に基づいた議論に終始したため、これといった結論は見当たらない。学術的な議論というよりは、意見交換の場として盛り上がった。(嶋田)

# 日本が発展した理由

担当者：岩井 天音、品川 正之介

## 1. 日時・場所

日時：1月4日（水） 15:30～17:00

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

## 2. プレゼン要旨

日本の経済発展を語る時に第二次世界大戦後の目覚ましい成長だけが取り上げられることが多いが、実はその発展を支えたのは江戸時代～昭和前半の歴史である。

## 3. プレゼン詳細

### ■イントロダクション

イラストを用いて、日本の発展について説明する。第2次世界大戦後の日本の経済発展を一つの木だとして、その木が成長するためには豊かな栄養を蓄えた根が必要である。その根こそが江戸時代～1945年の日本の歴史にあたる。

### ■江戸時代

混沌とした戦国時代に別れを告げ、徳川家が「将軍」となった。この時代は、鎖国の影響もあり、日本がその内部から発展して豊かな生活を築いたと言える。

江戸時代に養われた「発展の要因」は以下の6点が挙げられる。

#### ①政府（幕府）の団結と安定性

大きな反乱や内戦が起こる要因がなかったため、安定した政治体制が築かれ、生活を豊かにすることに時間・財力を割くことが出来た。

#### ②農業技術の発展

新しい農業機械や肥料の発明、政府による新田開発などの影響で、農業が発展する機会があった。すなわち食糧供給に安定性が生まれ、人口増加の一員となった。

#### ③交通網の整備

五街道を中心に全国で道が整備された。ヒトやモノの移動が活発になり、経済が活性化する一つの要因となった。

#### ④手工業の発展

各地方に名産品が生まれ、技術が磨かれた。また上記の交通網を利用して、市場で産品を売ることによって現金収入を得られるようになった。

#### ⑤市場の整備

江戸と大阪に市場が整備され、経済活動に大きな刺激が与えられた。裕福な商人が台頭し、商社の原形が出来たのもこの頃である。

#### ⑥教育

当時の人口3千万人に対して、約16000の学校があったとされる。初等教育を受けた日本人の割合は80%であるが、どう時代のイギリスが25%であったことを考えると高い水準にあった。江戸時代に広く一般市民が教育を受ける機会があったことは、その後の日本の発展の土台になった。

#### ・まとめ

この時代に日本が得たものは「安定した社会・幕府の元での経済・文化の発展」「農業技術や手工業の技術」「市場と交通のネットワーク」「基礎教育の充実」の4点にまとめられる。

1853年にアメリカの船が日本に来航して大きな混乱に陥る。1867年に徳川幕府は崩壊し、それ以降ヨーロッパの国を参考に

新しい国造りが始まった。

#### ■明治時代初期

当時、明治政府の政策目標はできるだけ早く近代化・西洋化するということであった。そして、①経済の近代化、②政治の近代化、③軍事の近代化という3つの目標を掲げた。プレゼンでは、特に①の経済の近代化に焦点を当てて説明した。西洋の技術を勉強するために送られた岩倉使節団や外国人技師について、政府の殖産興業政策について述べた。特に伝えたかったこととしては、日本が西洋技術を急速に学び、そして自らのものにして発展していったということであった。昔は原料を輸出して製品を輸入するという貿易構造であったのを、輸入代替（それまで輸入に依存していた商品を国内で生産するようにすること）を成功させて、自ら製品を作り輸出して儲けられるようになったことを強調して説明した。この輸入代替を成功させるためには江戸時代から続く技術などの要因はあるものの、この西洋技術を貪欲に学び、素早く吸収した点は日本の非常に優れている点であったと思う。

#### ■明治時代後期～終戦まで

日本の貿易の変化を示すデータを紹介した。「製品」の輸出は1870年頃にはなかったが、1910年頃になると30%弱を占めるようになる。また「原材料」の輸入の欄を見ると、1870年頃には5%程度だったものが、1910頃には35%にも達している。

第1次世界大戦の際には、ヨーロッパからの輸入が安定しないこともあった。そこで日本は、不足している部分をカバーする

ために更なる産業・技術発展に努力した。この時代の特徴は、重工業が発展したことだ。その後日本はアメリカ・イギリス・フランス・イタリアと並んでビッグファイブと呼ばれるようになる。しかし次第に軍国主義に傾倒し、第2次世界大戦に突入、日本は敗戦国となった。

#### ■戦後1945年～

戦後は食糧難や空襲による都市の破壊などの問題があったが、日本の発展を容易にした要因として、戦前から整えられていたインフラは壊滅的な被害を受けていなかった点と約6割の工場が操業できる状態にあった点が挙げられる。

その後日本は高度経済成長期を迎え、現在私達が知る日本の姿へととなった。

#### ■結論

日本の経済発展を語る際に戦後にばかり注目されることがあるが、その戦後の発展を支えた要素の多くは江戸時代～1945年までの歴史に由来する。日本の発展を考える際には併せて江戸時代や明治時代の日本の歴史にも注目したい。

#### 質疑応答

Q. 明治時代に、学生を欧州に派遣して現地の制度や技術を学んだという話があったが、それに必要な費用はどのように得たのか？  
(Majyambere)

A. 政府の予算から出ていたと思う。教育に力を入れていたので、政府がその費用を負担もしくは援助することに戸惑いはなかったはずだ。(岩井)

Q. 第2次世界大戦中、技術者も含めてたくさんの方が亡くなったと思うが、戦後の復興にあたってどのように技術継承をしたのか？ (Majyambere)

A. 確かに多くの方が亡くなったが技術者や学者のうち半数以上が亡くなった訳ではない。エンジニアは戦時中は出征するよりも国内の工場にいて、戦死する可能性は低かった。また、戦時中も国内で造船など様々な技術を必要とする場面があったのでそこで技術が磨かれて、技術継承は戦後に大きな問題にはなっていないと思う。(品川)

Q. 鎖国は、日本の発展とどのような関係があるのか？ (Eugene)

A. 直接発展に大きく貢献したという訳ではないが、鎖国時代の影響は大きい。この時期に、日本は外国からの影響を受けずに国内の力のみで発展していった。その点を強調したく、今回のプレゼンで紹介した。

#### 4. 感想

ルワンダ人には以前から、「なぜ戦後日本はあんなに発展できたんだ！」と質問を何度も受けていたため、その答えとなるようなプレゼンをしようと前々から考えていた。しかし調べるにつれ、戦後の発展はもちろん戦後の人々の努力によるものが大きいですが、発展を可能にする土壌というものはもっと以前の江戸時代あたりまでさかのぼるものであるとわかり、プレゼンの重心を江戸・明治時代に焦点を当てることにした。プレゼンの結果、日本とルワンダの歴史的、地

理的、その他いろいろと条件は違えど、何かルワンダ人にヒントになるような点があれば幸いである。反省としては、もっと日本政府がとった政策の具体例を出したり、ルワンダ人にとってピンとくるような取り組み(ルワンダ社会でも応用できそうなこと)などをもっと盛り込んでプレゼンを作成すればよかったと思っている。また機会があればもっと詳しく再挑戦してみたい。(品川)

準備不足から反省点が多く残るプレゼンとなってしまったが、長らく伝えたいと思っていたことを学生会議の議題として取り上げられて良かった。このプレゼンを通して、江戸時代の面白さを知ることが出来た。江戸時代には、ルワンダで応用できるような技術も多くあるような気がした。今後も学んでいきたい。(岩井)

参考文献：

大野健一.「途上国ニッポンの歩み—江戸から平成までの経済発展」有斐閣. 2005年

ルワンダの文化

発表者：Ineza Gerardine

担当者：海原 早紀

## 1. 日時・場所

日時：1月4日(月) 17:00~18:00

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

## 2. プレゼン要旨

まず「文化」の意味を定義した。ここでは人間のあらゆる行動のことを指し、言語、子育て、戦争から宗教など様々な分野での人間の活動を含む。

### ・ルワンダの音楽とダンス

ルワンダのダンスは記念事の祝福、人の勇気を称えるもの、ユーモラスな叙情詩、狩猟などを様々なテーマを象徴している。

### ・手工芸

バスケットやマットにデザインを編み込む。その他にも木彫り、彫刻、絵画などがある。

### ・言語

ルワンダで話されているのはキニアルワンダ語と呼ばれるルワンダの言語。教育を受けた者が喋る第二言語がフランス語、その次に英語を学ぶ。スワヒリ語を喋る人もいる。王国時代までは口頭伝承で歴史を伝えたためルワンダ文学は多く残されていない。

### ・宗教

植民地時代に多くのルワンダ人はキリシタンに改宗した。今では60%がカトリック、20%から30%がプロテスタント、少数派のムスリムがいる。土着のイマナの神をキリスト教と融合して信仰することが多い。

### ・仕事

ルワンダ人は勤勉である。田舎では男性は賃金収入を得られる仕事を求めるが、自分の土地で農業もする。女性は、都市部に住

む人以外はほとんどが農業に従事している。

### ・衣服

現代のルワンダ人は西洋の服を着ている。ほとんどが古着だが、ルワンダでつくられた新品を買える人もいる。動物の皮、木の皮でつくられる伝統的な服は今や博物館でしか見られない。

### ・食べ物

一番よく食べられるのが豆と食用バナナを茹でたものだ。また、モロコシを挽いて粉として使ったりポリッジにしたりする。裕福な人しか食べられない肉は、ヤギ肉が一般的だ。牛肉が一番高価。内陸国であるので伝統的に魚を食べる習慣はなかったが、今ではティラピアやナマズを食す。

### ・社会問題のコントロール

地域社会で問題を解決する文化がある。例えば伝統的なガチャチャではたくさんの家族が集まって議論をする。

### ・育児

ルワンダではたくさんの子どもがいた方が将来的に裕福になれると考えられている。女性が子育てと家事を担当し、男性は外で仕事をする。

## 3. プレゼン詳細

### 質疑応答

Q.キニアルワンダは他の国では使われていないのか。

A.いいえ。でも、例えばブルンジの言語(キルンディ)は似ている。ルワンダ王国時代、ルワンダは今よりはるかに大きな領土を統治していたため、今でもその名残が残っていて隣国の言語が似ている。

### ディスカッション

Q.ルワンダ文化についてコメントせよ。良

い点、悪い点を挙げよ。

A.

・良い点

一人に会うと握手やハグをすること。

一食べ物が美味しい。

・悪い点

一トイレが衛生的でない。

一ルワンダでは食べ物の種類が日本に比べて少ない。

一日本は地域によって異なる文化を楽しむか、ルワンダは一つしかない。

・その他コメント

一次ルワンダに来たらホームステイをしてほしい。豆やウガリなど土着的なものを食べて欲しい。

一伝統的なルワンダの食事は、みんなが一枚の大きなお皿から食べる。片付けが一番若い女子がする。

一フォークやナイフが輸入される前は、手で食事をしていた。

一ルワンダのレストランブッフェは一回しかとれない。（高価なホテルなどは複数回可能）

一パイナップル、オレンジ、マンゴー、バナナなどのフルーツは全てルワンダ原産。

#### **4. 感想**

音楽、ダンス、言語、食べ物、衣類、宗教など多数のトピックを取り上げてルワンダの文化について浅く広く紹介してくれたので、プレゼンはとてもわかりやすかった。ルワンダの人は、ジェノサイド以前に広まっていた民族主義に基づく差別や分断主義を繰り返さないように、「ルワンダはひとつ」とよく口にするが、それに合わせるように「ルワンダ文化はひとつ」とする解釈

を政府が打ち出しているようだ。しかし個人的に思うのは、この「ルワンダ文化はひとつ」を主張するあまり、国内でも地域ごとに少しずつ違ってくる文化の多様性が軽視されている気がする。地域ごとにどれだけ違うのかはわからないが、次に文化の話題が登場したらぜひ国内の文化の多様性について教えて欲しい。また、印象的だったのは、ディスカッション中にユジーンが「大学のキャンパスにいただけでは本当のルワンダ文化はわからないから、ぜひルワンダではホームステイをしてほしい」と言ってくれたことだ。安全、衛生の問題上現地の人と全く同じ生活をするべきとは簡単には言えないが、結局、日本人がルワンダに渡航したときに使うホテルやきれいそうなレストランでは本当のルワンダ人の生活を体験できていないと教えてくれた。（海原）

# 新潟水俣病

発表者：相曾 智弘

## 1. 日時・場所

日時：2012年1月5日

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

## 2. プレゼン要旨

高度経済成長期に目覚ましい発展を遂げた日本。しかしその裏側では重化学工業化が推進され、工場から排出される有害物質により水や大気などが汚染され、健康への深刻な被害を及ぼす産業公害が日本各地に頻発した。公害の被害者は今日でさえ、裁判と戦っている。私たちは公害に対してどれほどの理解を示しているのか。どこか断片的な知識にとどまっていると思い、取り上げることにした。特に意識した点は公害の被害者がどのような苦痛を強いられたか、多数の身体的被害だけが日本の公害問題ではないということを認識してほしく、公害問題に関してプレゼンを行った。

そのなかでも2011年3月3日の訴訟で両者の和解が成立した新潟水俣病について取り上げた。

## 3. プレゼン詳細

新潟水俣病に関する、被害者数や典型的な症状を紹介し、どのような社会的影響を与えていったのか、そのプロセスについて循環図を用いて解説した。被害者は、以前は元気な働き手として、自身の生活に生きがいを感じていたが公害により身体に影響を受けただけでなく、自らの職を失い、周囲からの差別・偏見に苦しむという社会的

影響も重大な問題となり、地域の強い絆を奪っていった。加えて新潟水俣病発生時から繰り返されている訴訟と和解について、そして二度とこのような惨事を引き起こさないために、記念館が建てられたこと、CSR活動として加害者である昭和電工の活動を紹介してプレゼンを締めくくった。

## ディスカッション

### テーマ

各グループで一つの環境問題について取り上げ、解決するために政府はどのように関与すべきか

(2グループで行った)

### ●提言・結論

・ルワンダのごみ問題について

解決策として、規制をどの企業にも課し、その際に政府がしっかり監視すること

・開発（技術の開発や普及を含む）によって解決を図る。経済発展の恩恵を環境の保護に利用する。

## 4. 感想

### 発表者

私がこのテーマを取り上げた最初の理由は、環境経済学を専攻するようになって環境問題に目が向くようになったからである。何かと当団体で“開発”に関していくことが多々あるが経済発展を優先しすぎた考えの一つ負の面を微力ながら主張しなかったからである。これから“環境”という言葉が多く叫ばれる時代において少しでも関心を抱いていただけたら幸いである。とにかく私たちの社会を取り巻く環境に対



して目を向けてほしかった。経済発展が進むルワンダにおいても公害に対する認識を持っていてほしい。(相曽)

#### 参加者

ルワンダも、公害問題に直面している。しかし、内陸国なので、日本とは少し状況が違う。ルワンダでは、土壌汚染と大気汚染が主な問題である。これらが病気を蔓延させる可能性はある。

農業関連産業を専攻している私にとって、とても興味深く役立つテーマだった。どのようにして国や土地を守るのかを考えさせられた。日本においても、専門家チームが長期的な視野で、環境問題に注意を払い対処していく必要があると思う。(ルワンダ側メンバーNadine、嶋田訳)

## 日本の電力業について

発表者：満越 裕馬

### 1. 日時・場所

日時：2012年1月5日

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

### 2. プレゼン要旨

昨年発生した東日本大震災によって原子力発電所が停止し、電力が危機的状況となった。電力会社による計画停電が行われ、また電力不足を解決するために人々は節電に取り組む等、電力問題は人々の生活に大きな影響を与えた。東日本大地震からおよそ1年が経過し、電力危機は改善の方向に進んでいるといえるが、日本の電力業界において議論すべき様々な問題は依然残ったままである。

今回のプレゼンテーションでは明治時代以降の日本経済における電力業の歴史と、その役割についての説明を行った。そして現在の電力業の特徴について述べ、最後に現在議論がおこなわれている「発送電分離（発電と送電の分離）」について説明を行った。

### 3. プレゼン概要

今回のプレゼンテーションでは、日本の電力業の歴史、現在の電力業の特徴、そして発送電分離の問題という3つのテーマについて説明を行った。

日本の電力業の歴史は明治時代に始まった。経済発展とともに電力会社は増えていったが政府は全国的な制度作りを行わなかったため、電力会社の乱立や今でも残る東西の

電力規格の差などの問題が生じた。戦時中に政府は電力企業をまとめ、発電と送電の部門毎に1企業体制とした。戦後は分野を統合したうえで、地域毎に分かれた電力会社を設立した。

このような経緯から現在の電力会社は発電だけでなく送電部門においても大きな影響力を有している。また送電部門はその公共性から1企業独占となっている。

発電を行う各電力会社が送電部門も所有することには議論の余地が残る。メリットは安定した電力供給が行うことができるという点である。

他方でデメリットは発電分野における新規参入の障害になるという点である。電力会社の発電部門と送電部門が同一会社であることから、送電部門は自社に有利であるような条件（自社以外の小さな発電企業では不可能な安全基準など）を課す可能性がある。この状況では、代替エネルギーによる発電ビジネスは日本で生まれにくい状況となる。

この状況を打開するための提案として、電力企業の発電部門と送電部門を分離する「発送電分離」がある。

#### **4. 感想**

##### **発表者**

東日本大地震移行、原発廃止運動は行われているが、電力業界の制度そのものについて焦点があてられる機会は少ないと思う。ただ廃止するだけではなく、制度をどのように改善するかを考えることが経済成長と環境問題の解決を両立するために重要であると思う。経済成長が続くルワンダにおいても、経済成長に不可欠な電力について考

えることは重要であると思う。（満越）

##### **参加者**

私たちルワンダ人も水力、地熱、原子力などの方法で電力をつくれることを学んだ。電力の供給を増やせばルワンダ人の生活レベルを向上させることができる。（ルワンダ側メンバーAlfred、嶋田訳）

# 日本とルワンダの比較

担当者：Ntaganda Alfred

報告者：秦 七愛

## 1. 日時・場所

日時：1月5日(木)

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

## 2. プレゼン要旨

ルワンダと日本の類似点、相違点をあげ、ルワンダが発展するためにどのようなことがあげられるかディスカッションを行った。

## 3. プレゼン詳細

まず、ルワンダと日本を、地形、周りを取り囲む環境の説明から入り、ジェノサイド、原爆投下の経験。天然資源が無いこと、独自の母国語があること。などの共通項をあげた。

次に、ルワンダの国旗、ルワンダがあるアフリカ大陸の環境、抱えている人口についての説明が入った。続いて日本の国旗、位置、縄文時代、弥生時代について話し、お互いのもつ相違点をあげた。

そこから、ルワンダの持つ強みは、

- ・日本から学ぶことが出来る。
- ・キブ湖などで水産業が出来る。
- ・日本から学んだ近代化された農業を実施できる。
- ・観光業では、自然公園やゴリラだけでなく大きな水族館のようなもので、より高い収入を得るような展開ができる。

という点であり、これらを踏まえてルワンダの発展について考えるディスカッションへと入った。

## ディスカッション

テーマ

- ・ルワンダが早く発展を達成するためにどのような戦略ができるか。
- ・将来リーダーになるような大学生や若者が、どうすればお互いの国々の間で強い関係を維持することができるか。
- ・丘の多い山地の国にはどのような事業が適しているか。

## まとめ

・日本が明治時代に、ヨーロッパから教師を雇い、技術を学んだように、ルワンダもやってみてはどうか。もちろん、外国から教師を雇うのには多くの資金が要るがそれをやる勇気をもって欲しい。

・ルワンダの発展はルワンダンの力だけで様々なことが出来ることだ。例えば、一人に1つのパソコンを持たせる政策があるけれど、もしそのパソコンが壊れたら今のルワンダではどうしようも出来ない。ルワンダンが、そのための部品を作る工場や、直せる技術を持つことが発展を達成できたということだ。

・アフリカに対して、紛争やエイズなど良く無いイメージを持つ人々の考えを、JRYCの活動を通してルワンダの本当の姿を知っている私たちは変えることが出来る。私たちはお互いを理解するために、インターネットを使って交流するべきだ。

・観光についてのアドバイスがある。第6回でルワンダを訪れた時、お客のことを考えずに自分の都合で動いているタクシードライバーや、レストランで2時間食事が出てこないことがあった。これは観光を売りにしていこうとするにあたって変えてい

かなくてはいけない。

・ルワンダは山々に囲まれている。そのことを生かして水力発電をしてみてもどうか。

#### 4. 感想

ルワンダはルワンダの魅力や、強みをもっともっと伸ばせばいいのに、と思う。食欲に海外から学ぼうとするのは大事だし、ICTも発展していく上で重要だ。例えば、日本人の手先が器用で、細かい作業が得意であったから高い技術力を持つに至ったように、ルワンダのそれは何なのであろうか。観光業は魅力的な文化や自然があるルワンダにとってうってつけの政策であると思う、そのやり方を観光客の立場にたって考えていく糸口をこうしたやり取りの中で掴んでいって欲しいと思う。逆に、日本人はルワンダのもつ自国の発展への強い意欲に学ぶことが多くあると感じた。(秦)

## 国の発展における大 学生の役割

報告者：Theogene Majyambere

担当者：品川 正之介

### 1. 日時・場所

日時：1月5日(水) 12:30~13:30

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

### 2. プレゼン要旨

国の発展における大学生の役割を、ルワンダの実例を交えつつプレゼンした。

### 3. プレゼン詳細

#### ■大学とは何か。

大学とは、高水準の教育を行う場であり、様々な研究の場である。それらは人々の生活を向上させるものであり、教育なしに国の発展はありえない。大学を支える4つの柱は設備、学生、教授、大学を維持するための資金提供者である。政府が教育にお金を使う分、国の発展に役立つのである。

#### ■ルワンダの大学生の役割

ルワンダでは、多くの学生が国の発展のことを考えている。特に田舎の発展問題などを考えている。また、NURでは学生が田舎や農村に赴いて、自分が学んだ知識を活用しながら、そこの発展の協力をすることがある。これは大学からの補助もでるし、一般的なことである。

#### ■テクノロジーパーク

テクノロジーパークとは、ここでは研究

機関（の集まり）を意味する。大学はテクノロジーパークのひとつであり、様々な、特殊な研究のための重要な機関である。これらの研究結果は人々の生活を向上させたり、新たな雇用を生み出すきっかけともなるが、アフリカにはまだまだ不十分な現状がある。

#### ■リベラルエデュケーション

サイエンスやエンジニアリングなどの実学以外にも、大学では社会的・伝統的・精神的・倫理的・哲学的な学問や活動を行うべきである。それらなしに国の発展はない。インダンガムチョでダンスを習得したり、授業でカルチャーミュージックなどの音楽、ヨガなどいろいろなことを学ぶことができる。

#### ■国の発展のためには...

ルワンダの学生の中には、田舎で働きたくない、都会で働きたいなどと思う学生や、留学しても祖国に帰って発展のために働くよりも外国にとどまってしまい学生がいることも事実である。それら学生の意識を変えて、国の発展のために協力していかなければいけない。

#### 質疑応答

Q.

田舎にいく学生たちの費用は NUR から出て、しかも申請すれば簡単に得られるものなのか。

A.

大学の車が出る。しっかりと計画を練って承認されれば補助を得ることができる。

Q.

ドンベはそのような田舎支援にいったことがあるか。

A.もちろんある。一般的な制度である。

Q.

どれくらいの学生が伝統ダンスに興味をもっているのか。みんな伝統ダンスを踊れるのか。

A.

それはもちろんたくさんいる。しかしみんながみんな上手に伝統ダンスを踊れるわけではない。インダンガムチョなどのグループに入ったり（小・中・高校などにもダンスグループはある）して練習する。

#### ディスカッション

①大学生のうちに結婚することはプラスに働くかそれともかマイナスに働くか

②大学卒業後どのように国の発展に貢献するか

#### ①について

・ルワンダでは、大学生でもたまに結婚している学生がいる。というのも入学年が遅かったり、在学期間が長い学部（薬学部等）だと婚期を逃してしまうため、在学中に結婚する学生もいる。婚期も日本にくらべだいぶ若い。

・いろいろと困難があるのはたしか。子供ができたりしたら学業との両立は難しい。マイナス面のほうが多いと思う。もうすでに働いている人との結婚ならば経済的問題は解消されるかもしれないけれど。

・日本には大学に託児所はないし、ルワンダみたいにベビーシッターの普及もないので難しい。経済的自立も厳しい。

・逆にそういう状況のほうが愛は強まる。

## ②について

・教育を受けた人は教育を受けられない人の助けになるべき。自己中心的な方向に走らないほうがよい。

・日本の学生は国の発展を真剣に考えている学生は少ないとのことだが、ルワンダにも自分のことばかりを考えている学生もいる。しかし自己中心的に働いたとしてもそれはその人の家族を豊かにすることでもあって、国の発展につながるものだ。納税額も増える。結果的に国に貢献しているので、完全に悪いことではないのかなと思う。

・自分は卒業後ビジネスを起こして雇用を生みたい。そして良い給料を支払い、労働者の生活水準を高めたい。そうやって国に貢献していきたい。

ルワンダ学生会議の一員として、ルワンダと日本の学生ならでの活動を進め、相互理解をしていきたい。(乾)

## 4. 感想

学生の役割には、さまざまなものがある。ルワンダでも、日本でも、背景が違っていても、学生としての役割は変わらないのではないかと考える。学生とは、学んで生きると書くように、学業を修めるものとある。そのため、学生は、もちろん勉学に励むことを期待されているが、実際のところ、学びとは、机上のものだけではない。私たち学生には、やりたいと思えば何でもできる環境があると思う。アルバイト、サークル、ボランティアなど、学生のように時間がある時にしか出来ないことは、考えれば山ほどある。そのため、時間のある限り、どんなことにでも、挑戦していくべきである。彼のプレゼンテーションでは、学生として何ができるのか、また、学生とは何かを考え直す良い機会となった。今後も、日本ル



## ☆こらむ☆ 大使宅でのランチ

1月2日ルワンダ大使宅近くの駅前一。私は緊張した面持ちでそこに立っていた。大使自ら食事会を招待してくださったとはいえ、なんといっても初めての大使宅訪問だ。英語が通じなかったらどうしよう、なにか粗相をしてしまったらどうしよう。いろいろな不安が頭をよぎる。その様子を察したのか、アルフレッドが私に声をかけた。「どうしたんだい？」私が「緊張している」と答えると、アルフレッドは、「どうして？大使の人はすごくいい人じゃないか！心配する必要なんて何一つないよ！」「アルフレッドは緊張しないの？」「緊張？なんで緊張するの？」・・・アルフレッド恐るべし！！



そんなことをしているうちに、とうとう大使のお宅に着いた。大使は玄関に立っていらっしゃって、私達をあたたかく出迎えてくださった。メンバーの一人一人に握手をしてくださっただけでなく、メンバーのコートもハンガーにかけてくださった。そして、リビングルームへ。リビングルームはとても広く、センスの良いルワンダの民族的な置物や絵が所々に飾られていた。大使の奥様とご息息を紹介された後、ルワンダ人学生と大使が歓談を始めた。ルワンダ人学生と大使は実に楽しそうに、時にはお互い真剣になりながら会話をしている。しかし、会話のほとんどがルワンダ語なので、話している内容が日本人メンバーにはわからない。ああ、ホンニャクコンニャクがあったらなあと思いつつ、会話の内容を想像していると、どこからともなくいい匂いが……。えっ、まさかの食事！！

ルワンダ人学生と大使が歓談をしている間に、奥様とお手伝いさんはなんと昼食の用意をしてくださったのだ！たしかにちょうどお腹がすく時間ではありますが……。用意された食事は、ご飯や焼きサーモンなど日本人メンバーが喜ぶものから、ウガリや豆料理などルワンダ人が喜ぶ料理まで、実にさまざまな料理が用意されていた。ああ、美味しそう、早く食べたい……。必死に食べたい気持ちをこらえていると、大使から一言。「レディーファーストだよ。先にどうぞ。」大使よ、その一言待っていました！！

そして、バイキング形式ということなので、遠慮する気持ちはどこへやら、たくさん料理をとる私。初めてのアフリカの料理にわくわくしつつ、いただきまーす・・・美味しい！！どの料理も絶品だったが、特に私が気に入ったのは豆料理。豆が金時豆に似ていたので、金時豆の甘煮のような味がするのかなと思っていたら、そこまで甘くなく、ほどよい甘味とこくのある味だった。本当に何十粒でも食べられそうだった。



楽しく昼食を食べた後に、今度は英語で大使のご家族とルワンダメンバー、日本人とでしばらく歓談し、そのあと大使の方と大使の奥様、ご子息とルワンダメンバーと日本人メンバーとで写真撮影。こちらの願いなのにもかかわらず、快く引き受けてくださった。

そして、そろそろおいとましようと思ってふと時計を見ると、えっ、もうこんな時間！！なんと大使宅に来てから4時間も経過していた！楽しい時間とは実に早く経過するものだ。

私達は、大使においとますることを告げ、コートをとりだそうとした。すると、大使自ら私達のコートをとりだしてくれ、しかもすごいのは一人一人着ていたコートを正確に覚えていらっやって、渡してくださったことだ。しかも、1月という寒いなか、大使のご家族みんなで私達を駅までお見送りしてくださった。

今回の大使宅訪問で、ルワンダがとても楽しそうに目を輝かせていたのが印象だった。私はルワンダ語も英語も得意ではないので、彼らが大使のご家族と何を話していたかよくわからなかったけれども、とても有意義な時間を過ごしたのだと思う。また、学生団体にも関わらず、本当に心がこもったおもてなしをしてくださった大使のご家族にはいくら感謝しても感謝しつくせないが、ここで改めてお礼をいいたい。本当にありがとうございました！（星野）





# グループワーク・プロ

## ジェクトワーク概要

担当：久保 唯香、河合 俊行

### 1. 日時・場所

日時：2012年1月5日、6日、7日

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター、早稲田大学

### 2. 企画概要

学生会議とフィールドワークは、日本ルワンダ学生会議(JRYC)の中核的活動である。団体理念である「相互理解」は、学生会議における真剣な意見のぶつけあいと現地への訪問によって促進されるからである。また、団体理念の達成に欠かせない活動が、共同作業である。この作業は過去にイベント開催や地域社会への貢献活動\*の形態で実現された。これら学生会議、フィールドワーク、そして共同作業を連動させることによって、さらなる交流の場をつくれないうだろうか。この企画は、第7回本会議で行われるすべての企画を相乗的に意義深くするための複合的な活動である。

### 3. 企画の目的

▼グループワーク・プロジェクトワークは、以下の2つを目的として行った。

- 1) 日本ルワンダ学生会議の各活動における学びを深める
- 2) 互いがおかれている状況からその社会への理解を促す

これらの目的達成のため、以下の2つを主な活動とする。

i.学生会議とフィールドワーク、共同作業の融合

ii. 少人数作業による高度な意思共有

### 4. テーマ

以下の3つのテーマを扱った。

① 平和教育（長崎フィールドワークより）

リーダー：品川

② 心の貧困（大阪フィールドワークより）

リーダー：小坂

③ 開発（学生会議より）

リーダー：岩井

以下、各グループからの報告。

# 平和教育

担当者：品川 正之介

## 1. 日時・場所

日時：1月6日(金) 9:00～

1月7日(土) 12:00

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

## 2. GW 要旨

長崎企画の総まとめとして、GWでは「平和教育」というテーマを選択した。長崎で学んだことを踏まえつつ、ルワンダ・日本双方の現在の平和教育について紹介しつつ、よりよい平和教育とはどのようなものなのか考えた。

## 3. 議論の流れ

まず、よりよい平和教育を考えるにあたって、両国でどんな平和教育があるかを紹介し合い、その後それら平和教育について意見交換し、最後によりよい平和教育について考えた。ここではその平和教育の例(ここではルワンダの例のみ紹介する)や、議論の一部を抜粋して紹介したいと思う。

### ■今日のルワンダにおける平和教育

#### ・平和に関するクラブ活動

中学・高校・大学において、平和に関する活動をするクラブが各学校(全てではないと思うが)に存在するらしい。主な活動は、平和について学んだり、ジェノサイド関連の演劇を何かのイベントの際に行う。4月あたり、ジェノサイドが始まった月に集中して行われ、様々な場所に赴き演劇を披露する。

#### ・修学旅行

日本の学校と同じように、ルワンダの学生たちも修学旅行に行く。虐殺記念館を見学したり、ジェノサイド生存者の方からお話を聞いたり、平和に関するスピーチをしたりする。そのほかにはキングス・パレス(昔ルワンダ王が住んでいた場所)などに見学に行く。

#### ・学校での授業

学校での授業でももちろん平和に関するものを扱う。しかしそれは歴史(世界史など)の授業であり、直接ジェノサイドのことを扱うのは難しい。

#### ・ITORERO

日本ルワンダ学生会議においてしばしば登場してくるITOREROではあるがここでもう一度紹介しておきたい。ITOREROとは、ルワンダ国民が互いに関係を深めたり、政策への共通理解を深めるために政府が運営している教育機関である。平和や平等、和解について、またそれだけではなく歴史や倫理など様々なテーマが教えられる。今回のアルフレッドの話によると、高校から大学に上がる間の1,2ヶ月間ITOREROに通うそうだ。ITOREROに通い終わると、終了証明のようなものがもらえるとのこと。高校卒業後海外に留学に行ってしまう生徒でも、一時帰国の際にITOREROに通うことが可能になっている。また高校や大学に通えない生徒は各地域ごとに組織があり、平和などについて教わるのが可能だそうだ。

・その他平和に関する事柄

ールワンダではジェノサイドを連想させるような歌を歌は禁じられている。

ー教会においても平和についての教育が行われている（これは普通のミサなどのことを含むかもしれないが。）

#### ■両国平和教育の問題点

日本の平和教育としては、学校の授業や修学旅行、原爆関連のものや、テレビでは教育テレビや、民放での平和関連のドキュメンタリーがあることを紹介した。これらを踏まえて平和教育の問題点を議論した。

両国に共通する問題点としては、日本では終戦記念日あたり、ルワンダではジェノサイドが始まった4月あたりに平和教育や平和関連の行事が集中するが、その他の月になると減ってしまい、年間を通じた平和教育が十分ではないのではないかと、という点があがった。加えて日本では、統計的に学校において平和教育に割ける時間が減っていることを紹介した。これに対しアルフレッドは、「日本人は平和というものを当たり前のものとして捕らえているかもしれないから、平和教育の時間が少なくなるのかもしれない。しかしルワンダではジェノサイドはまだ鮮明な事柄であって、人々は平和について真剣に考えているし、またあのような悲惨なことがおきることを恐れている。これは日本とルワンダの違いだね。」と saying it.

#### ■真実の歴史は存在するか。

問題点について話していたところ、「真実の歴史は存在するか」という議論が盛り上がったので紹介したい。（これは日本人とル

ワンダ人の考え方の違いを示すものではなく日本人、ルワンダ人の意見だということ considering it.）歴史を教える際に、歴史というのは見る視点や考え方によって変わるものだから、正しいただひとつの真実の歴史というもの存在しないと言ったところ、アルフレッドはそんなことはない、必ず真実の歴史というもの存在すると言った。誰かが嘘をついている、真実を隠しているから本当の歴史がわからないのだという意見だった。日本はアジアのいくつかの国と歴史認識について問題点を抱えているが、それもどちらかが真実を隠しているから真相がわからないのだということだった。自分としては「ただひとつの真実の歴史」という点において同意できるわけではなかったが、ルワンダ人はジェノサイドの後ガチャチャ裁判など、真実を告白するということが重視されてきた。このような事柄がアルフレッドの考え方にも影響しているのではないかと考えた。

#### ■ジェノサイド、国民の責任は？

結局この議論は「真実の歴史」はあるかもしれないが、それを追求する事は難しい、というのも誰かが真実を隠したり、情報が不足していたり、時間の経過によって真実を知ることが難しくなるからだということに落ち着いた。しかしまたこの議論から派生して新たな議論が始まった。いつもルワンダ人はジェノサイドの責任を全て悪い政府のせいだったというが、国民一人ひとりの責任はなかったのかという疑問をぶつけてみたのだ。というのもジェノサイドを語るとき、彼らはずっと「悪い政府のせいだ起こった。今はよい政府だから大丈夫」と

いう風に語る。自分はこのことに違和感をもっていた。政府を決めるのは国民一人ひとりであるし、悪い政府が誕生したならばそれに対する抗議をすることだっただけ（といってもかなり困難ではあろうが）可能ではある。もちろん当時の政府には大きな責任があるがしかし全ての責任を政府のせいだとして片付けているのがおかしいと思っていた。この自分の疑問にアルフレッドはこう答えてくれた。「当時、ハビヤリマナ大統領の得票率はほぼ 100%。これは正常な民主主義の選挙ではなく異常だった。そして一番の問題は情報の欠如だ。政府の活動全ての情報を国民が得ることは不可能だ。日本みたいに制度が整っていたりインターネットなどの道具が十分にあるわけではない。特に農村の人々は情報の欠如がひどかった。情報がなければ正しく政府を判断することは難しい。政府と国民との距離が離れすぎているんだ。だからあのジェノサイドは悪い政府の責任だと思うんだ。」この意見を聞いて、たしかにルワンダ人が「悪い政府のせい」と言う理由がすこしわかった気がした。

#### ■よりよい平和教育

すこし議論が脱線したが、最終的に今までに出た問題点を考慮してよりよい平和教育を考えて見たところ、①一時的じゃない年間を通じてできるもの。②歴史を考えることは重要だが、真実の歴史を語ることは難しいので、過去を振り返ることも大事だが、未来を見据えた平和教育にしよう。という点が上がった。そして、私たち日本ルワンダ学生会議で実行が可能な現実的なものになるよう考えた。そこで出てきたのは、

今回横浜で行った小学校企画をルワンダでもやって見ようというものだった。これを説明する前に②の点、未来を見据えた平和教育ということについて説明したい。長崎でのバークガフニ教授のご講義では、長崎は長い国際交流、異国文化を受け入れてきた寛容さという歴史があるのだから、原爆だけじゃなくこの国際交流と言う点から平和を再考するというをおっしゃられていた。このことを踏まえ、過去の悲しい歴史を学ぶことも大切だが、実際そのことに関してはすでに十分平和教育の数があるから、国際交流・相互理解という点で平和教育を進めようとなったのである。

そして考えたよりよい平和教育の案は、

- I. 年間の授業を通じて、ルワンダ人 JRYC メンバーがルワンダの学校に訪れ(3,4 回程度)、日本について紹介する授業をする。(イントロダクション)
- II. 2 回目の授業でもっと深い日本の歴史など(原爆の歴史を含めたりして)教える。
- III. 3 回目の授業は日本人がルワンダに渡航している際に行い、学生との交流をする。

というものであった。この案での工夫は、①お互いを知る、相互理解において平和を達成しようとしている。(JRYC 活動理念参照...)

②ルワンダ人 JRYC メンバーが、日本について授業をするので、彼らは日本について深く学ぶことが必要となること(=日本を深く知る)、

③3 回目の実際に日本人が学校に赴く際に、日本の小学校などから事前に準備して書いてもらった手紙を渡して、ルワンダの学校

と文通のように交流を図ること（＝大学生と大学生、JRYC内だけの交流じゃなく、両国の小・中学校を巻き込む）。

④日本人が実際に訪れるとき、被爆者のかたのお話をビデオ等にとらせていただき、それを学生に見せる。また日本人が学校に訪れた際に、ジェノサイドの演劇を見せていただく。（＝互いの国の歴史も知る）

などである。

最終日のGWプレゼンテーションでは、上記の内容をまとめて発表した。

#### 4. 感想

今回のGWは、大学がはじまってしまったこともあり、人数が集まるのが難しくひたすらアルフレッドと二人で議論をしている感じであった。このGWは議論の結果生まれた、よりよい平和教育の内容よりも、むしろ議論そのものが非常に面白かったと思う。2日間という長い時間と使っている議論し、特に真実の歴史はあるか、やジェノサイド時における国民の責任の有無に関して話したときは、ルワンダ人の考え方（アルフレッドの考え方かもしれないが）の片鱗が垣間見ることができたような気がする。議論は平和教育と言う観点から脱線したかもしれないが、非常に有意義な議論だったと思う。全体の企画の総まとめとして行ったGWであったが、まとめの上でさらに議論することで今までの企画が深まったり、あらたな発見があったりで非常に面白かった。（品川）

未来を担う若者の私たちがこのように平和教育について一緒に考えられたのは非常

によいことだったと思う。長崎で学んだことを生かしたりして、今後もよりよい平和教育について考え続けていくことが大切だ。長崎では、日本の平和教育の例として平和に関する活動をしている高校生たちにはプレゼンしてもらったが、本当に素晴らしいことだと思う。

（ルワンダ側メンバーAlfred、海原訳）



# 心の貧困

担当者：小坂 弘奈

## 1. 日時・場所

日時：1月6日

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

## 2. プレゼン要旨

今回、大阪企画を通して私たちが見てきた日本の貧困を「経済的貧困」と「心の貧困」に分けて考える。心の貧困は、他人からは見えにくく解決も難しいが、それをどう解決していくかをこのグループワークで話し合う。

参加者：小坂、河合、秦、嶋田、乾、Majyambere、Nadine

## 3. プレゼン詳細、質疑応答

まず、大阪企画をフィードバックしそれぞれが考えたことを共有した。そしてマザーテレサの「誰からも愛されていないと感ずることが一番貧しいこと。」という言葉ヒントに私たちにとって、心の貧困とは何かを考えた。その中で、いじめ、自殺、教育を受けられないこと、難民、老人の独居、ホームレスが挙げられた。私たちは心の貧困の定義を、①無縁なこと②独り孤独に生きていること③思いやりを持っていないことと定め、無縁仏という言葉に注目した。私たちの中で無縁仏は死後、誰か自分のことを想ってくれる人はいるのか、以後の心配をしながら寂しく死にゆく人たちという共通の理解を持って話し合い、ホームレスと独居する高齢者についてその解決策を考えた。

私たちが出した解決策は、我々はもっと近所付き合いを密にする必要がある、そのために必要な時間を生活の中に作るべき。ソーシャルワーカーの数ももっと増やす必要がある、政府はもっと彼らの労働環境を向上させるべきである。そして最も重要なのは人々が集まり交流できるスペースをすることで、高齢者に対しては、彼らが住む団地やアパートの中や周辺にコミュニティスペースを必ず作り、そこに集まった人が交流できる環境を作る。ホームレスの人に対しては、今回協力していただいた、こえとことばとこころの部屋 NPO 法人 COCOROOM さんのように誰もが気軽に集まって、好きなことをできる場を作ることである。

### 質疑応答

Q.ルワンダにおける心の貧困は何か？

A.ルワンダではストリートチルドレンが心の貧困を抱えている。政府は彼らのための施設をつくり、里親を探ったり交流の機会を積極的につくっている。

Q.コミュニティスペースをいかにして広めるか？

A.人と人の繋がりを利用する。口コミによって広めることで、自分に合った場を見つけることが出来る。

### 意見

・コミュニティスペースを広報しすぎると、ホームレスの人は恥ずかしがって来られなくなってしまうのではないかと。

・政府が運営できるのか、政府はすべてのホームレスの状況を理解しているわけではない

・ホームレスに対して偏見を持っている人をどう巻き込んでいくのか、逆にホームレ

スの人も他者と関わることを拒否してしまうのでは？

#### 4. 感想

先に行った経済的貧困に引き続き、今回は心の貧困について話し合い、私は物質的に貧しくて、餓死してしまうような経済的貧困も貧しいが、無縁仏のように誰からも看取られずにひっそりと寂しく死んでゆく人の抱える心の貧困問題は、たくさんの便利なモノで満ち溢れ、都市部では高層ビルが立ち並び豊かに発展しているように見える日本社会の中で、とても大きく恐ろしい問題だと感じる。人々はお金があり、たくさんのモノに囲まれて生きていれば本当に幸せなのだろうか？我々は経済的に発展していく中で、人との心のつながりという大切なものを忘れてしまったように思える。この大阪企画と、それに続くグループワークは、改めて豊かさとは何かを考えるきっかけとなった。また、私たちにとっての心の貧困は？という話し合いの中でルワンダメンバーから難民や、教育を受けられないことという日本人の発想では挙げられないだろう意見を聞きなるほど、と思った。逆にルワンダメンバーは日本のいじめ問題を知り、ルワンダではありえないと驚いていた。国が違えば心に抱える貧困も違うのだ。これからもっともっと発展していくのであろう日本とルワンダ、そして他の国々は、その発展の中で失ってはいけない大切なものがある。今回の話し合いが、私たちが将来それを思い出すきっかけになれば幸いである。(小坂)



人は豊かになると、他の豊かでない人たちのことを気に掛けなくなる。これは私が日本のホームレス問題を学んで思ったことです。

生活するのにふさわしくない場所に余儀なく住んでいる人々。このトピックはとても興味深いものでした。なぜなら、今回大阪で私たちが学んだこの問題は理解しやすく、そして私たち学生の力次第で解決できることだからです。私たちは、この問題について詳しく分析し、ホームレスの人たちを支援している NGO 団体などを支持し、彼らを支援していくべきだと思います。

彼らの生活はとても質素です、一定の場所に根を下ろすか、公園や河川敷にテント張り生活しています。または町から町へと生活拠点を移動させたり、ドヤと呼ばれる簡易宿泊所に住みます。彼らがホームレス生活に至る大きな理由は、怪我や病気が原因の解雇、ギャンブルによる破産、家庭内暴力や離婚などの家庭崩壊、そして孤立。中小企業は彼らのために保険契約をしません。現在ホームレス生活をしている人のなかには、精神障がいなど、障がいを抱えている人もいます。さらに、年配の人を雇用する会社はとても少ないのです。

多くの人はホームレスの人は怠けていると  
考えていますが、私はそう思いません。誰  
も、ホームレスの人々、また彼らがなぜホ  
ームレス生活に陥ったのかを気に掛けませ  
ん。日本のホームレス人口のうち 96%が男  
性で、4%が女性です。彼らの平均年齢は 58  
歳。私は、無縁社会が生み出した“無縁仏”  
をなくすためには、日本の人々が隣人との  
関係を強めていくことが大事ということ  
をあなたたちに思い出して欲しいと願って  
います。

(ルワンダ側メンバーMajyambre、小坂訳)

## Development

担当者：岩井 天音

グループメンバー：

Eugene, Gerardine, 古屋 亮輔、岩井天音

### 1. 日時・場所

日時：1月5日(木) 15:00～1月7日(土)  
13:00

場所：国立オリンピック記念青少年総合セ  
ンター、早稲田大学学生会館

### 2. GW 要旨

本会議ではルワンダの”Development”と  
キーワードが毎回登場するが、具体的に何  
が「発展」なのか、どうしたら「発展」す  
るのか、日本ルワンダ学生会議独自の視点  
で考察する。

### 3. 議論の流れ

#### ■1月5日午後

まずは議論の進め方を決めた。この時点  
では、テーマは漠然と **Development** となっ  
ており、議論の方向性を決める際に「何故  
アフリカは発展しないのか」など様々な意  
見が出た。ただし、私たちは日本ルワンダ  
学生会議であるので、最終的には「ルワン  
ダの発展」を考えることにした。

ルワンダが抱える問題点を洗い出す。こ  
こで指摘されたのは以下の4点である。

- ・国土が狭く、内陸国である
- ・高等教育を受けた人材の不足
- ・資源の不足
- ・一部の援助費は使用用途が決まっている

私たちは最大の問題点は内陸国であると  
考え、ラオスなど他の内陸国等の事例を参



照することにした。

初日は議論の方向性も定まらず、情報共有のみに留まった。

#### ■1月6日午前

何を以ってルワンダの発展とするのか、GWの中での「発展」の定義を定めることにした。そこで Eugene から”to achieve certain level or standard”という発言があった。この”standard”とは生きていくために最低限必要なインフラが整った状態を指す。つまり時代・地域によって standard は変わる。ルワンダでも standard を超えている人は存在するし、逆に先進国でも standard 以下で暮らす人も少数だがいる。この GW では、「ルワンダの発展」を「生活水準の standard をルワンダ人の多くが超えられるような社会構造、経済体制を作る」ことと定義した。

次に、昨日話したルワンダの弱点だけではなく、利点にも目を向けた。ここで、挙げたルワンダの長所は以下の4点である。

- ・政府や行政の指導体制が確立されている。
- それぞれのセクターが機能している。

- ・ VISION2020 の存在
- ・ 工芸品などを生産する技術はある
- ・ 農業のために使用可能な土地が全国に広がっている

これら長所も生かして発展のためのプランを練ることになった。そもそも、ルワンダのような発展途上国においては発展に2つの側面があると考えた。「生活の質を向上する」ことと、「政府の税金や個人の現金収入を十分に得る」こと（経済発展）である。前者についてはルワンダ政府が掲げる VISION2020 や外国からの援助で比較的解

決しやすいのではないだろうか。しかし一方で、後者はルワンダの大きな課題である。現在の状況では多くの現金収入を個人が得ることは難しい。そこで、どうしたら現金収入を得られるかを話し合うことにした。

#### ■1月6日午後

ルワンダは国民の大半が農業に従事する。農業によって収入を得ることが多くの人が現金収入を得られる手段なのではないかと考えた。そこで従来の「生きていくため」の農業から、「ビジネスのため」の農業への転換を図る。具体的には付加価値をつけ、農家のためのマーケットを設ける。牛やヤギの乳は牛乳やヨーグルト、バナナはバナナビールなどに加工できる、もしくは既にルワンダ国内で行われている。Eugene が”Nyirangarama”というルワンダの企業を紹介してくれた。バナナの加工製品で利益を出しているようだ。

次に必要なのが、「電力」である。ルワンダには水力発電が適しているのではないかと。またキヴ湖でメタンガスによる発電をイスラエルの企業の援助で行なっているケースもある。ルワンダが今後発展していくために、どのような産業で推し進めていくにしても電力は不可欠である。また発電所を建設するにあたり大量の労働力が必要になる。これは、労働者への給料→労働者の消費行動→税金の増加→政府の予算増加にも繋がる。

そして内陸国であるという弱点をカバーするためには、「国際的な道路を建設して東アフリカ地域のハブとなる」ことが必要だ。具体案は出なかったが、いずれ投資の機会が増えるかもしれないと考えた。

## ■1月6日夜

プレゼンテーションの準備。スライド作製、分担決めなど。

## ■1月7日午前 GW 発表

以上の内容をまとめてプレゼンテーションを行った。以下はプレゼン概要である。

### 1. 発展の定義について

発展とは、「その国の”水準”を引き上げること」である。水準は時代・地域によって異なる。発展には「生活の質の向上」と「経済発展（現金収入を得られる機会の増加）」の2つの側面があり、この2つはお互いに依存している。前者は解決されつつあるが、後者には戦略が必要である。

### 2. ルワンダの状況

長所：政府や地方行政の体制が整備されていること。農業が盛んで土地や技術がある程度ある点。

短所：内陸国。電力不足。発展のための戦略が「生活の質の向上」に偏りがちである。

### 3. 3つのストラテジー

#### ・農業の発展による現金収入

現在は自給自足に近い農業が行われているが、それを改善し現金収入が得られるような形態にする。

#### ・電力供給の安定

水力発電所を建設する。この効果は電力供給のみに留まらず、建設に必要な労働者への給料が政府の税収増加に繋がるというメリットもある。

#### ・交通網の拡大

3つの中で優先順位は低いですが、国際道路の建設により東アフリカのハブを目指し、投資の機会増加を狙う。

### 4. 結論

上記の3つの戦略に取り組むことで、ルワンダは現金収入を得られる。それはルワンダの発展を加速させられるだろう。

### 4. 感想

今までルワンダ人メンバーがよく発する”Development”が具体的にどうすることなのか実はよく分かっていなかったもので、今回このテーマで議論が出来て嬉しく思う。今回提案に出た3つの戦略は、多分専門家から見れば問題点も山程あるだろうし未熟であることは否めない。それでも2日間ルワンダ人と議論して辿りついた結論には、誇りを持っている。

議論を通してルワンダのことをもっと知りたいというモチベーションが強く生まれた。Nyirangarama という会社には是非今後の渡航で訪問してみたい。（岩井）





## コラム AKIBA☆PANIC

「カメラ買いたいんだけどさ、秋葉原行きたい！」もう定番のフレーズである。友達や何やらに頼まれたりでルワンダンが渡航期間中にカメラを大量購入するのはもはや毎年恒例となっている。

そんなんでも今年も忙しいスケジュールの合間を縫って秋葉原へ GO!!みんなでカメラを物色です。しかしこれが大変。お金持ってきたと言ってもそこまで多くないし、円高だして格安のカメラを求め秋葉原を巡ります。企画終了後の夜に秋葉原に出て歩き回るもんだからもう疲労困憊。なんだかんだ2時間くらい彷徨ってた気がします。5000円台のカメラをやっとこさ見つけたのは良かったけれど、数が足りないから中古のお店も見に行って、次はコンセント変換プラグを探して...ようやく買えるかと思ったらアルフから一言。「あ、円ないわ。」あれ、この台詞去年も聞いたことある……。そんなことを思いながらとりあえず銀行からお金をおろしに行って円を立て替えてあげて購入。11月必死こいて貯めたお金が一瞬にして大量のドルにかわりましたとさ！

最後はプリクラばしゃり。無事に今年の秋葉原買い物も終わって良かったです。と思ったら2日後くらいに「買い忘れあったからもう一回秋葉原いこうぜ！」なんて言われちゃってまた秋葉原に繰り出すことになりましたが。

(笑)

(品川)





## 【第四章】

### 参加者感想

---

相曾 智弘 中央大学経済学部 2年.....	118
乾 敏恵 同志社大学大学院 1年.....	119
今泉 奏 大阪大学外国語学部 2年.....	119
岩井 天音 国際基督教大学 3年.....	121
大山 剛弘 早稲田大学理工学部 4年.....	123
河合 俊行 早稲田大学政治経済学部 3年.....	124
久保 唯香 早稲田大学文化構想学部 2年.....	126
小坂 弘奈 フェリス女学院大学 1年.....	127
品川 正之介 早稲田大学教育学部 2年.....	128
嶋田康平 早稲田大学法学部 2年.....	130
滝田 知子 慶応義塾大学法学部 2年.....	130
中山 康平 早稲田大学国際教養学部 3年.....	131
永井 陽右 早稲田大学教育学部 1年.....	133
秦 七愛 多摩美術大学美術学部 3年.....	134
日高 佐倭子 大阪大学人間科学部 1年.....	135
星野 真希 学習院女子大学国際文化交流学部 1年.....	135
満越 裕馬 東京大学教養学部 4年.....	137
山崎 暢子 関西学院大学法学部 3年.....	138
Alfred NTAGANDA National University of Rwanda.....	141
Eugene Mazimpaka National University of Rwanda.....	141
KanezaNadine National University of Rwanda.....	142
Ineza Gerardine National University of Rwanda.....	142
Theogene Majyambere National University of Rwanda.....	144

## 『相互理解への一步』



中央大学 経済学部 2年  
相曾 智弘

本会議中はもちろんのこと、食事をするときも、次の目的地に行くときも、そして夜間の高速バスでの移動中もルワンダ人学生と一緒に。そんな彼らとの楽しい第7回本会議はあっという間に過ぎていった。私が初めて彼らにあったとき、まずアルフレッドが私のところへやってきて手を差し伸べて、日本語で自己紹介をしてくれた。初対面でいきなり交わされた日本語に驚いたのが印象に残っている。

さて、本会議が始まる前、私はどこかで当団体の理念である「相互理解」について自身で考える時間がふとやってくるのではないかと思っていた。ただ、同じ国同士の人間でさえ掴むことのできないこの言葉にたった20日程度の交流で遠く離れたルワンダの学生となんて…と感じていた。

ある意味、当たっていたのかもしれない。彼らと交流して、ともに喜びを分かち合い、違う文化を体験し、彼らの物事を学ぶ真剣さに刺激を受けた。長崎、大阪、東京とそれぞれの地で多くのことを学び、意見を交わした。しかし彼らと別れて思ったこと、

遠いルワンダに5人の友人を作ったに過ぎなかったのかもしれない。だが互いを尊重することはできたと思う。自分と相手の違いを認め、相互理解が完全にはできないとしても可能な限り近づけるようにとがんばれたと思う。言語の壁が私にとって少々高いハードルとなったが、今まで意識もしていなかった「相互理解」への一步として捉えたい。

今回の本会議で私が一番心に残っていること、残念ながら会議中の出来事ではないが、それは長崎から大阪への夜間の高速バスでの移動中のことだ。Majyambereの隣に座って、彼と色んなことを話していた。他のメンバーは直ぐに眠りについていたが彼は眠くならないと言わんばかりの様子だった。主に日本-ルワンダ両者間のことについて話していたが、会話の中で彼は「今のルワンダ人は一つ」と言っていた。その時はとても真剣な表情だった。思えばルワンダ大使館のウェブサイトには書かれていたことと同じ言葉である。コンサートイベントのトークセッションの時に舞台裏で打ち合わせをしていた関係もあって1994年の虐殺に関して聞く機会がなかった。だから間近で聞いたその言葉に、とても感銘を受けたし、より彼らが身近に感じられるようになった。

最後に第7回本会議では多くの方に出会い、学び、よき時間を過ごすことができた。だが未熟な自分がいて、無力さや、事前の勉強不足など反省する部分が多かった。次回の本会議においてはより一層の努力をしていきたい。

## 『相互理解って難しい』



同志社大学大学院  
グローバル・スタディーズ研究科 1年  
乾 敏恵

今回で本会議参加2回目となった。ルワンダメンバーと再会することが出来て非常に嬉しかった。今回は、初めて本会議に参加した昨夏と比べ、ルワンダメンバーのさまざまな面を見ることができた。同じ部屋で過ごした2日間は、興味深かった。特に驚いたこととしては、荷物が異状に少ないことだった。私たちがルワンダへ渡航した時、大きいスーツケースとリュックなどで、日本人ならこれくらい普通だろう。しかし、彼らの荷物は、いつも学校に持ってくるようなカバン1つと、飛行機に預ける小さめのバッグ1つというようなものだった。しかも、預ける方の荷物には、まだ物が入る余裕さえあった。一体、何をどれくらい持ってきていたのだろうか。私は、そんなところに興味を持っていた。

さて、大阪、東京での会議に参加した。大阪で学んだことを、東京でのグループワークで活かすことができ、非常に面白みのある学生会議だった。グループワークすべてに参加出来た訳ではないが、ルワンダ・日本の両メンバーとのディスカッションでは、両国の文化が表れていたように思う。

特に、宗教、死に関するところで意見が異なった。宗教などによって生死観が異なっていたため、なかなか妥協点を見出すことが難しかった。しかし、最終的に両メンバーの意見がまとまった時には、スッキリし、このグループワークがあってよかったと思った。

この第7回本会議では、自分が思っていることははっきりと相手に伝えないといけなくて改めて感じた。本会議中いつも「相互理解って難しい」と思っていた。日本人どうしたと、自分が思っていることを相手が理解していると考えるところがあるが、文化が変われば、それは通じない。今後、さらにグローバル化が進み、自分とは異なる背景を持った人と一層関わる機会が増えるだろう。本会議を通して、グローバルとは、受容力だと感じた。言いたいことは、素直に伝え、良い考え、意見を受け入れ、ルワンダだけでなくどんな背景を持っている人とも相互理解していきたい。

## 『さるいて、語って』

大阪大学 外国語学部 スワヒリ語専攻 2年  
今泉 奏

長崎企画を提案したのは、打ちのめされた様な第5回本会議が終わった直後であった。当初の第7回本会議「地方都市・観光」というテーマを聞いたとき、真っ先に思い浮かんだのが僕の地元、長崎である。その夜、無我夢中で書き上げた「長崎企画草案」が、このような形で実現しようとは思わなかった。企画としては上手くいったところ、そうでなかったところなど反省点が多すぎて、とうていこの紙面に書き

きれいなものでもない。

そうはいえども、書かないわけにはいかない。こうしてつらつらと書いている。とりあえず、わがまち長崎について少し書きたい。港町長崎の歴史は戦国時代に始まる。キリスト教の布教と引き換えに、貿易を行い、小さな漁村はみるみる間に日本最大の貿易港となった。豊臣時代に始まる幾度ものキリシタン弾圧を経験、徳川時代の鎖国中唯一の港として栄え、幕末には全国から志士たちが集い医学や戦術をヨーロッパ人からこぞって教わった。明治時代にはキリスト教が解禁、西欧の技術を基に造船のまちとして繁栄。そして、1945年8月9日11時2分長崎のまち上空500メートルで原子爆弾がさく裂。人類が人為的に使用した、最後の核兵器である。そして現代の長崎。路面電車がまちの中心部を通り、一方には家々が斜面に連なる山が、もう一方には鶴の港と称される港が見える。豊かな漁場と「和華蘭」（和食・中華・オランダ）という食文化に支えられた、「うまい」ものもたくさんある。人々はおおらかで、古来様々なものを内包してきたまちには、来るもの拒まず、出るもの拒まずといった風潮があり、現代まで受け継がれている。

僕はこのまちで育った。そして、このまちが好きだ。



本当は誰でもよかったのかもしれない。とにかく長崎のことを誰かに伝えたかった。そんな一方通行な気持ちから、この企画はスタートした。起案当初は「ルワンダ人学生に長崎のことを伝える意味はなんだろう？」という自問自答が頭の中で繰り返された。しかしながら、関東メンバーやルワンダメンバーとチャットを重ねていくうちに、少しずつ双方向性のある企画に変わっていった。そして、「都市としての長崎」というテーマが、日に日にはっきりと浮かぶようになってきた。また第5回本会議での経験、昨年3月の長崎下見、そして昨夏の自身のルワンダ渡航は、長崎企画へとつながる非常に有意義な経験となった。こうして第7回本会議を迎えるまでの1年間を考えると、本当に濃密な1年であったと思う。

直前の連絡確認や、企画書最終稿作成などの忙しい日々を乗り越え、長崎でルワンダメンバーと顔を合わせたときの喜びはひとしおであった。それからの3日間は決して忘れられない日々になった。祖父母宅でのホームステイ、さるく、ミサにクリスマスパーティー、交流会…。何よりメンバー全員が楽しみながら長崎に滞在してくれたことが、嬉しく、誇らしくもあった。こんな素敵なクリスマスは二度とはあるまい。

最後になったが、今回は本当に多くの長崎の人々にお世話になった。講話をしてくださった山脇さん、碑めぐりガイドを手伝ってくださった大川さん、長崎大学で講演していただいたブライアン・バークガフニ教授、長崎の平和学習について発表していただいた長崎活水高校平和学習部のみなさん、高校生をコーディネートしていただいた長崎市役所の荒木様、そして留学生のみ



なさん。ありがとうございました。また、長崎で「さるくガイド」を買って出てくれた今泉宏氏（父）、ホームステイを快く迎えてくれた今泉満治氏、藤子氏（祖父母）、今泉盟子氏（母）には、感謝しても感謝しきれない。本当にありがとう。

## 『原点回帰』



国際基督教大学教養学部 3 年  
岩井 天音

私は 2010 年 4 月より日本ルワンダ学生会議に加入し、その夏にルワンダ渡航を経験した。その頃までは素直な気持ちでルワンダ人との交流を楽しんでいたと記憶している。しかし、第 5 回本会議（2010 年度の日本招致事業）では、ルワンダメンバーと団体の将来をめぐって衝突する場面があった。また常日頃ルワンダ人とチャットで連絡を取り合う中で金銭絡みの問題が発生したりコミュニケーションが困難を極めたり、フラストレーションがたまる場面も多々あった。ルワンダやルワンダ人の事を毎日考えていたほど活動にのめり込んでいたが、やはりこの一年間活動を楽しんでいたかと問われると、素直に頷くことは難しかった。

しかし第 7 回本会議を通して、再び原点

に立ち返ることが出来たと思う。それは、日本ルワンダ学生会議の活動を楽しむ心を取り戻したということだ。

今回一つひとつの企画が充実していたと感じる。ルワンダ人だけではなく、日本人にとっても意味ある企画が揃っていた。私が日本ルワンダ学生会議のメンバーになって良かったと思うのは、日本各地に足を運びその土地から学ぶ機会があることだ。今回の長崎と大阪では「その土地だからこそ出来る」企画を行うことが出来たように思う。各地の協力者の皆さまと各メンバーの頑張りのおかげで貴重な機会を得られたと感じている。

第 7 回本会議の中で印象に残った活動は、それらの各訪問先をまとめたグループワークだった。

私は正直に言ってルワンダメンバーからの”development”の連呼に飽きていた。過去の本会議においてたとえどんなテーマで話していても、議論の場になるとルワンダメンバーは必ず”development”に絡めて話をするのだ。もちろんそれは国の発展を真剣に考えているからこそであるし、悪いことではないが、私はルワンダメンバーが毎回持ち出す development が中身を伴っていないように聞こえていた。そんな私は Development グループを発案し、グループリーダーを務めた。それは敢えてテーマとして話し合うことで、日本人にとってもルワンダ人にとっても development と向き合ういい機会になるだろうと考えたからだ。

詳しくはグループワークの報告書に書いたが、多くの学びを得ることが出来た。特に Development の定義を話していた時にユジーンが言っていた ”Development will

never end, even in Japan.”というフレーズが印象に残っている。私は常日頃から「ルワンダ人は発展したい。日本人はルワンダ人が望むような発展をしたが、その結果様々な社会問題が生まれた」ということを強調したかったが、この背景には「日本はもう発展しない」という後向きな意識があったと思う。しかしルワンダ人と話すうちに、それは違うということに気が付いた。Developmentはルワンダに限った話ではない。日本も更なる発展を目指して良いのだ。私はこの事を気付かせてくれたルワンダメンバーに感謝している。

日本ルワンダ学生会議の「本会議」も今回で7回目を迎えた。7回目にして団体理念である「相互理解」がルワンダメンバーにも浸透していることを感じた。団体の将来の活動内容について議論する際にルワンダメンバーが”mutual understanding”と何回も言っていたのを聞いて嬉しく思った。ただ日本側の「相互理解」が、ジェノサイドの教訓から得た平和構築の第一歩という意味合いを持つのに対し、ルワンダ側の”mutual understanding”は、社会貢献活動をするために互いの社会状況を理解するという意味合いが強いことも忘れてはならない。理解に多少のズレがあることは不安要素ではあるが、今はむしろこの考えの違いこそが活動の幅を広げるのではないかと期待している。

第7回本会議を通して、私は日本ルワンダ学生会議の活動が多くの人に与える影響を見た。「ルワンダ人を日本に呼ぶ」という活動の意義を改めて感じる事が出来た。例えば今回は新聞4紙に私たちの活動を掲載していただいた。各地でたくさんの人に

出会った。コンサートや小学校企画を通して、ルワンダについて広く知ってもらう機会を設けた。本会議終了後には、駐日ルワンダ大使が早稲田大学を訪問してくれた。私たちの活動の効果は今すぐに測れるものではない。それでも、この第7回本会議に関わってくださった方がいつかルワンダの事を思い出してくれるなら、それは十分に意味のあることだと思う。当事業に「継続性」は何よりも大事である。

決意を新たに、楽しみながら活動を続けていきたい。

## 『感想』



早稲田大学 創造理工学部 社会環境工学科  
4年 大山 剛弘

個人的に大学卒業を間近にしていることもあり、これまでの総括・今後のメンバーへのメッセージとして本感想を書きたいと思うのでご了承頂きたい。

第7回本会議には不本意ながら一部参加となったが、これは既に3回目の国内本会議開催である。引き続き多くの方の協力を頂きながら、遥かルワンダの学生を日本に招致するというこの企画が存続していることがまずはとても嬉しい。ルワンダ側との企画案の折衷・情報交換、ビザ取得、国内諸機関との交渉など、実現までの道のりは決して短くないが、メンバーが相も変わらぬ「無償の愛」でこれらに立ち向かい続けていることに、この団体の底力を感じた。繋ごうとしなければ繋げない、色々な意味でまだまだ日本から遠いルワンダだが、多感な学生時代に創る利害関係のないこういった草の根の関係、或いは「思い入れ」といったものが、将来僕たちが社会にコミットする段階になって強い磁力を発揮し始めるのだと思う。またその様な思いで活動してきたが、将来どのようなケミストリーを生むのか、今から楽しみでならない。

また今回の本会議については、抽象的な

表現だが日ルともに参加メンバーの笑顔が印象的だった。今までより距離を置いて見ているのもあるだろうが、とにかく楽しめて参加者に良い記憶として定着したのなら、その意味では今までの招致企画を昇華したといえるだろう。新天地・長崎にも進出し、カトリック教徒であるルワンダメンバーにも日本への新しい見方を提供できたのではないかな。まだ見られていないルワンダメンバーの感想の到着がとても楽しみである。

また最後にこの団体について思う所を書きたい。理念に掲げる「相互理解」はとても広い意味をもつ言葉で、経済的・文化的・政治的、どんな指標を個人が軸とするかでも全くその実態は異なってくる。ルワンダ・国内メンバー共に、その解釈を巡っての議論をもう何回したか知れない。このような議論こそが学生の活動の肝であるとも思うが、実際この議論に終始することも理由にあり、脱退したメンバーも何人か見てきた様に思う。同じ土俵で議論しているようでも、それぞれのテーマは実は違うのだからまとまるわけではない。

先のような議論の典型を挙げるならば、僭越ながら「世界平和」と言う言葉だろうか。聞こえは良いしその重要性は誰もが疑わないが、例えばそれを理念とする国連の諸機関でも、各国の国益いふなればエゴの擦り合わせに終始して、いざという局面で理念に沿った行動を取れないことが多い。各国がそれぞれの「目の前の」平和を切実に求めるからこそ、それは困難を極める。短期的な視野だと批判することは重要だが、簡単だ。近しい例を挙げれば、EUのギリシャデフォルト危機でも支援に対してはEU内でも凄まじい反対運動が巻き起こっ

た。支援が実行されなければ同盟内の国家が崩壊する、という事実を知りながらである。既得権益にしがみつくとはいえ聞こえが悪いし、メディアを始め様々な煽動も行われてはいたが、それは究極的には「今ある生活を守りたい」という素朴な欲求に帰するものだと思う。展望の無い将来と顔の見えない相手に投資するほど気の進まないことは無い。

それでも理念を達成するにはなにが必要か、とても単純ではあるが

- ① 中・長期ビジョンを当事者が共有すること
  - ② 顔の見える関係を作ること
- であると思う。

この団体の話に戻れば、②は比較的達成しやすいだろうが、①はまだまだ達成できていない。個人的な願いを書けば、今後のメンバーには、ぜひ5年・10年というスパンでもビジョンを作ってみてほしいと思う。そしてそれを夢物語に終わらせない為に、緻密な短期的利益の擦り合わせも（僕のように不器用でない）優秀な皆さんにお願いしたい。これが約3年関わった上での、僕の脳みそが出しうる意見です。

招致企画を含め、日本ルワンダ学生会議への学生としての関わりはおそらく最後になるが、黎明期からこの団体に関わった幸運に心から感謝している。有意義な時間を過ごすことができたし、刺激を受ける人間関係も数多く作ることができた。今後どんな進化を遂げていくか想像もつかないけども、これからも素敵な人間的化学反応の生まれるコミュニティであってくれば何よりである。あとはよろしく！

## 『初めてルワンダ人と 接して分かったこと』



早稲田大学 政治経済学部 3年

河合 俊行

2011年4月、私は日本ルワンダ学生会議に入会した。大学生活も折り返し地点を迎え、それまで1つのサークルの活動を精力的に行っていたが、そろそろ新しい刺激を求めていた。今思えば、日本ルワンダ学生会議に入会した理由は、ルワンダの「ジェノサイド」という側面に興味を抱いたためである。日本人にとってはあり得ない経験をした学生と、アカデミックな議論を通して交流をすることができる、そんな日本ルワンダ学生会議の機能に大きな魅力を感じた。私は民族紛争と平和構築をテーマとする国際政治経済学系のゼミに所属していたため、自身の研究の参考になるヒントも得られるのではないかという思いもあった。そう、つまり私がこの団体に所属したきっかけは、今振り返ってみると専ら「ジェノサイドに対する好奇心」に依拠していたのだ。そんな思いから始まった私の日本ルワンダ学生会議での活動だが、初めての招致

を終えて、今現在自身の心にある思いとは何か。

招致を回想してみて今思うことは大きく2つある。「ルワンダ人はジェノサイドという側面だけでルワンダを見て欲しくないと考えていること」、そして「接してみるとただのアフリカ人の友達であるということ」、この2つである。特に印象的だったことは、Eugeneの「海外の人は、ルワンダをジェノサイドの側面からしか見ようとしなない。ルワンダの自然や踊り、人々の温かさとか、もっと他の側面を見てほしい」という言葉である。Eugeneだけでなく、これは他のルワンダメンバーも異口同音に語っていた思いである。当初は私も、ジェノサイドの事に関して色々とヒアリングしてみようと考えていた。しかしながら今振り返ってみると、ジェノサイドに関して話を聞いたことは一度としてなかった。内心憚られる思いがあったことも事実であろう。日本での招致は「日本のことを学ぶ」ことに主眼が置かれているといった理由も挙げられるであろう。しかし一番大きい理由は、彼・彼女らの振る舞いからはジェノサイドを経験したという印象を全く受けなかったことだ。一緒に楽しく踊り、歌い、笑い、議論する。人として当たり前のコミュニケーションを通してうちに、当初自分が持っていた「好奇心」はどこかに飛んでいた。一緒に大阪の釜ヶ崎で夜回りをし、日本の社会問題について考える。そこには国籍の枠を越え、「社会」に対して当事者意識を持って臨む「若者」がいる、ただそれだけの事実が存在するだけであった。この様にして、彼・彼女らとの直接的なコミュニケーションを経る

ことで私のルワンダ「人」に対するイメージも変わっていった。

それでは、先述した Eugene のジェノサイド以外の側面に目を向けて欲しいという思い、これを我々としてどう受け止めなければならないのであろうか。私はルワンダも日本も同じような境遇にいると考えている。例えば今日本人が海外に出ていけば、「フクシマはどうなっている」と耳にタコができるほど尋ねられるに違いない。私がルワンダというアフリカの小国を知ったきっかけというのも、ジェノサイドである。ここで肝心なことは、ルワンダメンバーも言っていた様に、ジェノサイドを越えて、その先のルワンダを世界に見てもらふことだ。そしてこれを実現する役割を果たす組織が、紛れもなく日本ルワンダ学生会議であると私は考える。招致を通して今現在のルワンダ人の思いを理解できたことも、日本ルワンダ学生会議が掲げる「相互理解」の体现である。日本もルワンダも、過去の積み重ねの上に成り立っている。ルワンダはジェノサイドを乗り越え、歩み始めている。日本も東北大震災を乗り越え、前に進もうとしている。絶えず社会は変わり、人も変わり、価値観も変わる。それらの変化を敏感に汲み取り、若者の間での交流を通して互いを理解し、そして自らを理解する。その機能を果たすのが、日本ルワンダ学生会議の活動である。今回の招致を経験して、そんなことを思っている今日この頃である。

## 『次のステップへ。』



早稲田大学 文化構想学部 2年

久保 唯香

初めてルワンダ人と出会ってから1年。そのときの問いかけへの答えが、この本会議であった。

大好きだった走ることも跳ぶことも辞め、何もなくなってしまった私は大学1年生の春、この団体の一員となった。聞きなれない国の名前、ルワンダ。ただの「ボランティア」ではない、「相互理解」の理念に惹かれた。未知な世界へのあこがれもあったのかもしれない。

社会の役になんて、立てっこないんだ。アメリカですっかり自信をなくした夏休み。どうして自分は社会と向き合うのか。走っている方が呼吸は苦しいけど、楽しかった。ここで逃げるわけにもいかず、私は第5回本会議に臨んだ。

しかし、その本会議で思わぬ問題に直面した。それはルワンダと日本の間の人間関係だった。日本からの働きかけで始まったこの学生団体。この存在自体が、「対等」ではないのではないか。社会への貢献、相互理解、対等な立場。いろい

ろな言葉がぐじゃぐじゃとメンバーの間を駆け巡ったのをよく覚えている。日本ルワンダ学生会議は、万能ではなかった。

問いは、2つだった。ひとつは、私たちがすべき社会への働きかけについて。大学生が社会人のように「スマート」なアクションを起こす必要はないと常々思う。私たちがしなきゃいけないことは他にあるはず。それでは、そのアクションとはなんなのか。次に、「相互理解」はどのように達成されるのか。表面的には草の根の交流ができていても、日本人、ルワンダ人の壁は高い。細かい価値観や習慣が見えず、私はこれでは彼らと本質的な協力ができないと感じてしまった。その壁を越えることはなくても、壁を透明にしたいと思った。

ひとつだけ確信があった。必要なのは共同作業。日本人だけでなにかをつくって提供するのでは、相互理解にも繋がらず、大学生ができるアクションにもほど遠いものとなる。しかし、遠い距離、時間のずれ。1年に2回しか会えない私たちにとって共同作業は難しい。

そこで、私は企画に取り組んだ。それが、小学校での継続的教育プロジェクトである。ルワンダからインターネットを介して情報を提供してもらい、私たちがそれを噛み砕く。そしてワークショップにまとめ、日本の小学生に伝えるのである。小学校を選んだ理由はひとつ。私の淡い記憶だった。小学生のとき、企画をもっていくといつも実現させてくれる先生がいらっしやった。マラソン東海道五十三次、紙の貨幣を使った経済学習、絵本の実写演劇などなど。先生は、出身地沖縄についてもよくお話ししてくださいました。小学校でのこれらの経験は私

の原点といっても過言ではない。だから、小学生にこそルワンダを知ってもらいたいと思ったのだ。

約半年にわたって授業を考えた。その過程でルワンダの新しい生活習慣を知ったし、なにより私はこの企画で日本人メンバーのことをよく知ることができた。

小学生の表情の変化は分かりやすかった。警戒心たっぷりの初回と比べ、最終回は笑顔が輝いていた。ふと、先生を思い出した。私が先生の生き方から学んだように、この小学生も先生から学んでいる。私たちとルワンダ人学生の面白い生き方が彼ら少しでも伝わったかもしれない。

さらに、共同作業の時間を増やすために企画したのが本会議のグループワーク・プロジェクトワークである。これは、ルワンダ人と日本人が入り混じってグループをつくり、重要なフィールドワークと学生会議のトピックを2日間かけて深掘りする企画。メンバーにグループリーダーを担ってもらい、進行役をお願いした。日本人の授業開始と時期が被ったこともあり参加者がまばらだったことが悔やまれるが、期待どおり、日本人とルワンダ人名が近い距離で議論し、それぞれの議論をプレゼン発表した。

小学生の成長に立ちあうことができ、そしてルワンダ人と日本人の共同作業の中から意識と知識の深まりを感じることができた。しかし、それでもまだ足りないところは足りないらしい。言われてしまった。「なんでいつも一方的な働きかけなんだ」。まだ一方的。ベクトルが一方向しか向いていない。まだまだ、まだまだ。

相互理解は簡単には達成しないけれど、でも私は自らの問いに答えを得たと思う。

そして私が学んだ大切な3つのこと。常に相手と共に取り組もうと模索し続けること。投げかけ続けること。動き続けること。

曖昧な問いにけりをつけたあと、私はもっとルワンダと日本の深みにはまっていくのかもしれない。自由に、思うままに、活動を続けていけたら。そして、ルワンダ日本問わず、周囲の大切なひとに、たくさん問いを投げかけていけたら。

そしてこれからも、仮にどれほどステップを踏んでも、この日本ルワンダ学生会議は模索を続けていく。

## 『ルワンダに魅せられて』



フェリス女学院大学 国際交流学部1年  
小坂 弘奈

私は、今回の本会議を通してはじめてルワンダ人と交流した。私がルワンダについて知ったのは高校生の時、『ルワンダの涙』という映画を観たのがきっかけだった。以来イベントへの参加やルワンダに関する本や映画を通じてルワンダで起きたジェノサイドや、和解や発展など、ルワンダの様々

な面を知るうちに、ルワンダが大好きになっていた。そして今回、憧れのルワンダ人と会うという夢が実現し、私が問題意識を持つホームレス問題についても共に考えることができ、夢のような日々であった。

大阪、釜ヶ崎で日本の貧困を目の当たりにした彼らは、感じたことやこれからどうすべきかを話してくれた。特に心の貧困について、ルワンダではいじめやいじめが原因の自殺は考えられない、日本にとってとても深刻な問題だと言っていた。今回の招致は、日本のような大都市が発展して高層ビルが立ち並ぶ姿に憧れるルワンダ人メンバーにとって、日本の発展の裏側を知る旅になったであろう。今後のルワンダの国づくりに今回感じたこと、見てきたことを生かし、役立ててくれたらと思う。学生会議や東京でのグループワーク・プロジェクトワークでは、様々なテーマについて話し意見を交換していくうちに、国が違えば、出てくる意見もまったく違うことに気付いた。私が普段想像つかないような意見が飛び出し、驚いたこともあった。

ともあれ、約3週間彼らと生活を共にし、突然踊りだしたり歌ったり、毎日が本当に楽しそうだった。そんな彼らと一緒にいた私も毎日が本当に楽しかった。彼らの陽気な性格にますます惹かれ、今度は私がルワンダに行ってお祭りしたいと思っている私である。

## 『一歩前』



早稲田大学 教育学部 2年  
品川正之介

あなたは、「ルワンダ」と聞いて何を思うだろうか。

おそらく、たいていの日本人の回答は、そもそもルワンダを「知らない」であって、知っている人でもその答えは「ジェノサイドが起きた国」止まりであろう。それは仕方ないし当然のことであって、自分自身この団体に所属していなければルワンダのことなんてこれっぽっちも知らなかったと思うし、興味も沸かなかったかもしれない。しかしルワンダ人にとって、日本人のルワンダに対する無関心やステレオタイプは大きな衝撃だった。

「ルワンダは、ジェノサイドが起きた国、だけではないんだ。」ルワンダ人メンバーが東京でのダンスイベントで言った言葉が印象的だった。招致期間中にルワンダ人は JRYC メンバー以外の日本人と交流する機会がたくさんあったが、そこで彼らルワンダ人に投げかけられる質問はジェノサイドに関することばかりであった。もちろん、ルワンダという国にかかわれば、必ずジェ



ノサイドには突き当たる。これを避けて通ることは、おそらくできないであろう。しかし、誤解を恐れずに言うならば、ジェノサイドはルワンダを構成する要素にひとつに過ぎないのである。彼らルワンダ人は、ジェノサイドだけじゃないルワンダの姿をもちろん知っている。それなのに日本で聞かれることと言えばジェノサイド、ジェノサイド、ジェノサイド...驚きと共にすこし嫌気もさしたのかもしれない。

ルワンダ人のこの言葉を聞いて、以前から思っていたが、ジェノサイドだけじゃないルワンダのポジティブな面をもっと知りたいし、みんなに知ってほしいと心から強く思った。「ルワンダ＝ジェノサイドの国」だけではあまりにもさみしい。JRYCはルワンダのことをもっと知る、多くの人にもっと知ってもらおうということに貢献できるはずだし、それがこの団体の役割の一つだと思う。たかがアフリカの小国を知って意味なんかあるのか、そもそも興味ない、そんな意見もあるかもしれない。けど、知らないより知っているほうが断然自分の世界は広がるものだと思う。自分の持っていたステレオタイプや、そもそも知らなかったことがわかっていくのは、とても面白い。この団体に入ってから時折思うのだが、ルワンダはもちろんだけれど、世界中のいろんな国の人々と交流して相互理解を達成してみたい、そんなことを考えるようになった。

もちろんルワンダのことを知るだけでなく、日本のことをルワンダ人に知ってもらいたい。その点において今回の招致は非常に良い招致だったと言える。長崎では「原爆」だけでなく長崎の歴史を学び、大阪で

は日雇い労働者の街釜ヶ崎にて行った濃いフィールドワークで「先進国日本」の陰に潜む問題を目の当たりにした。ルワンダ人たちは日本に対するイメージでぱっと「原爆」や「先進国」というものが浮かぶと思うが、そこから一步踏み込んだ日本の姿を知ることができたと思う。もっともっと、日本のいろいろな姿を彼らに知ってほしい。と同時に、自分の国のことを相手に紹介するためには、自分自身が日本について深く知っていなければならない。ルワンダ人に日本を紹介するためにと意気込めば意気込むほど、日本のことがわかってくる。実際、長崎のめっちゃくちゃに面白い歴史や大阪の釜ヶ崎のことなど以前はほとんど知らなかった。今回の招致は自国を見つめなおす良い機会でもあったと思う。

さて、ここまで色々つらつらと書いたが、第7回本会議は心の奥底から楽しいと思える日々であった。招致期間中毎日ルワンダ人と過ごしたし、クリスマスもお正月も一緒だった（大学生生活全てのクリスマスをルワンダ人と過ごすのではないかという危惧もあるが...笑）。日々の生活での何気ない会話、冗談、ふざけあい、学生会議での真剣な議論など、共同生活を通じて彼らと深い人間関係が築けたのが、とてもうれしかった。以前の感想で詳しく書いたが、今この団体は過渡期にある。団体の将来について解決すべき問題点がいくつかある。しかし、なんだか難しそうに思えるそんな問題も彼らと協力していけば、絶対解決するし、この団体はもっと発展していきだろうと純粋に感じた。

この冬に得た経験、思い出と友情は本当にかげがえのないものである。これからも、

この団体の活動がより良いものになっていくように、自分の役割を考え、頑張っていきたい。



## 『この一年』



慶應義塾大学 法学部政治学科 2年  
滝田 知子

## 『問いがひとつ』

早稲田大学 法学部 2年  
嶋田 康平

身近な人を大切にできているだろうか。  
親、兄弟、友達、目の前にいる人。  
これを忘れずに、これからもゆっくり歩いていきたい。

第 5 回本会議から早いような遅いような、気付けば一年が経過した。この団体に所属してから第 5 回本会議（招致）、第 6 回本会議（渡航）、第 7 回本会議（招致）の 3 回の本会議を経験することができ、年 2 回もルワンダ人に会うことができることはこの団体の醍醐味だと思う。第 7 回本会議に関しては会計以外に企画を担当しなかったが、（そのせいかもしれない・・・笑）それでも夏にルワンダで出会ったメンバーに半年もしない内に会えるということが純粹に嬉しく、心待ちにしていた。去年感じていた初めて会うルワンダ人に対する期待や疑問とは異なった気持ちである。

今回は、授業の都合で長崎までは行けなかったものの、初めて大阪で地方企画に参加し、私自身にとって大変実りのあるものとなったと思う。特に第 5 回本会議企画の **BIG ISSUE** のホームレスの人々や貧困について、今回は実際に日雇

い労働者の多く集まる釜ヶ崎でさらに学びを深められたことは特筆すべきことである。ルワンダのみならず日本各地へ足を運び、自分たちも日本が抱える問題や将来について議論を交わせることはこの団体ならではだろう。ルワンダ人がカルチュラルイベントで、“ルワンダ＝ジェノサイド”というイメージは取り払ってほしいという趣旨の話強調して言っていたが、ルワンダ人がそう感じるように、私たち日本人メンバーも“日本＝テクノロジー”だけでない日本をもっと知ってほしいという気持ちを抱いている故の第7回本会議の企画だったのではないだろうか。

私は第5回本会議が終わり落ち着いたころ2011年4月に会計に就任した。第5回本会議同様、助成金によって第7回本会議も事業が支えられ、助成金からルワンダ人の招致費用は賄われた。それはつまり日本側がルワンダ側の出費を管理している、ということである。交通費にしても食費にしても日本側が全額負担することでどうしても不平等な力関係になってしまう気がしていたと同時に、ルワンダ側にも責務が伴うと、言葉にし難い複雑な気持ちをこの一年抱いていた。招致に関わらず経済面の問題は存在し、順風満帆な一年ではなく、いざ迎えた本会議中も毎日の出費にハラハラする瞬間もあったような気がする。それでも彼らの積極的な姿を見て今年も招致ができて良かった、と思った。当たり前のようにここまで渡航、招致を実施してきたが、日本人メンバー、ルワンダ人メンバーともに“相互理解”の理念の下に実現させたい

と思う気持ちが無ければ続かない活動であり、メンバーが毎年入れ替わる学生団体だからこそ継続は容易なことではない。今後も自分の役割を考え、相互理解に一步一步近づきながら、活動を続けていきたい。

## 『ルワンダ人学生日』

### 本招致の意義』



早稲田大学 国際教養学部 3年  
中山 康平

2009年、当団体が初めてルワンダ人学生を日本に招致した際、私もメンバーの一員として彼らと時間を共にした。あれから2年、ルワンダへの渡航も経験した私は、ルワンダに関しての知識、彼らとの関係は前回とは比較出来ないほど濃くなっていると自負していた。そして、今回の招致に関して、“進化した”中山康平は彼らをどのように迎え入れ、何を感じるのだろうか、自分自身に期待していた。しかし、そんな期待とは裏腹に実際に私が感じたことは肯定的なものばかりではなかった。

確かに、今回も日本で過ごす彼らとの時間は楽しかった。しかし、それは“fun”の意

味の面白さであり、前回の招致で感じた”interesting”の面白さではなかった。なぜか。その答えを出すには、彼らを招致する理由と、彼らが日本に来たい理由にずれ違いが存在しているところに着目しなければならぬ。

ルワンダ人学生は私の一人暮らしの家に3日間滞在した。ラーメンパーティもしたし、人気ドラマ“家政婦のミタ”の最終回を一緒に見て、私がどれだけミタさんが笑うことが素晴らしいかを力説したこともあった（ドラマをご覧になられていた方はお分かり下さるだろう）。そんな濃い生活の中で、私が一番気になったのは、私の家にある2台のパソコンを起きている間中彼らが手放そうとしなかったことである。彼らは私に“学生の家に2台もパソコンがあって、ネットに繋がっているのか！ルワンダもこうした国に10年後はなっていてほしい”と言った。その後彼らは私が知らない言語で「がばい日本すごかばい！やばかな。まじ、半端なかつちゃけど！」（私の勝手な解釈である。彼らの雰囲気を出すためにあえて佐賀弁にしてある。標準誤訳は”日本はすごい。ありえない“である）と言っていた（多分）。

彼らのこういう言動を目にしていると、彼らが日本で学びたいことは、日本の技術、テクノロジーだということが見えてくる。確かに、こういった分野を日本で学ぶことは貴重であるだろう。しかし、私たちは日本を知ってほしいのだ。彼らは“ルワンダはジェノサイドだけじゃない！他に素晴らしいものがたくさんある”とよく言う。これと同じで日本もテクノロジーだけでなく、他にも学ぶべき素晴らしいものが沢山ある。

それを彼らに理解してもらう為に様々な企画を立てている。そして、それが私達が目指す“相互理解”に繋がると信じている。

“ジェノサイドが起こった国、ルワンダ”、“戦後復興し、テクノロジーでは世界屈指の日本”。ジェノサイドだけを私達が学んでも、彼らがテクノロジーだけを学んでもそれは国の一部分であり、私たちが目指す“相互理解”とはほど遠い姿となるに違いない。

今回招致した優秀なルワンダ人学生の中から将来ルワンダの政府機関で働く者が出てくるかもしれない。その際来日することがあるとしたら、彼らが学ぶのはまさに日本の技術や日本の政治システムであり、日本のホームレスの実態やキリスト教の歴史ではないだろう。しかし、そういった見えない部分に国の本質があるのだ。私は、彼らが日本で学んだことを将来生かし、ルワンダの発展に貢献し、そして日本を“理解”したうえで、日本との懸け橋になってくれることを期待している。

p.s

ルワンダのフランス語にしかない、下ネタワードというものが存在するらしい。

## 『反省』



早稲田大学 教育学部複合文化学科 1年  
永井 陽右  
反省を書いていると思う。

私は 2011 年夏、第 6 回本会議に参加してルワンダへ行った。ところが、日本へ帰国した後、私はこの団体へのモチベーションを保つのが難しくなっていた。私のルワンダへの興味が薄れていた。というよりも、ルワンダではない国に興味関心が大きく傾いていた。そうしてこの団体以外の課外活動が非常に忙しくなり、ミーティングへの参加率が著しく悪くなってしまった（渡航までは休んだことはない）。ミーティングに参加しないことに責任を感じ、人間関係に苦しんだ。結局この第 7 回本会議において、私は担当を持つわけでもない非常に存在価値の低い無責任な人に成り下がった。私は、自らがこんな状態で一丁前に発言なんてすべきではないと考える人間であるので、できることは場を明るくするくらいであったが、しかるべき努力もせずにヘラヘラしているだけというものは他人に言われるまでもなく自己嫌悪に陥るに十分なものだ。肝心の学生会議やグループワークなどには参

加できず、私の活動は大阪企画とすこしの東京企画のみであった。

その少ない活動の中でも珍プレーを続出。私は大阪企画にて初めて越冬闘争というものを聞いた。アルフレッドにその意味を聞かれた時、私は意味を知らなかったので、「たぶん人々が食糧を求めて戦うという意味だよ。恐ろしい冬が来るからね。」とか意味不明なことを言ってしまった。ディスカッションでは発言の後に「Thank you」と言うはずなのに「Sorry」と言う始末。ルワンダ渡航から英語力もほとんど変わっていない。大阪の最終日には体がダルくなり熱を測ったら 38 度を超えていた。その日の夜行バスほど苦しい体験をしたことがない。地獄でしかなかった。新宿駅から先輩の家までルワンダン女子を連れていったのだが、私は道中ずっと「let's go to hospital!」と心配される始末。そして、夜行バスで隣に座っていたグリーンこと小坂さんは数日後風邪をひいていた。

では今本会議では得るものはなにもなかったのか？と考えると、そうではない。今本会議を経て、モチベーションの回復と責任感の自覚ができた。ルワンダンとの再会はとても嬉しかったし、ルワンダンは自分のことを認めて受け止めてくれた。私としてはもうすでに彼らは外国人という実感は（良い悪い別として）あまりない。それらは相互理解と密接に関係するものだ。つまり、渡航のときよりも相互理解というフィールドにおいて、私は心身共に少しは成長していた。そのことに気が付いたときモチベーションは回復していた。同時に少し視野が広がった。私がルワンダンと話すという行為と、もねさん（岩井さん）や海

原さんやマリオン（久保さん）がルワンダ  
ンと話すという行為は少し異なっている。  
というのは、上記の人達は私がやっていな  
い地味なことを精力的に受け持っている。  
スケジュール決め、全体への配慮、金銭的  
な話などなど、挙げればキリがない。この  
ようなことに携わっている人の相互理解と  
いうものは、私のそれとは深さが全然違う  
のだ。

結論に入る。私はステップアップしなけ  
ればならない。もう私も2年生になるし、  
すでに渡航経験もある。責任感を意識して  
いかなければならないと強く思う。しかし、  
フランクさを忘れては最悪だ、それこそつ  
まらない人間である。というわけで「be  
friendly」から「be friendly and seriously」  
へ変化することに決めた。非常に良いター  
ニングポイントだった。ルワンダに限らず  
すべてにおいて「be friendly and seriously」  
でいく。これからが楽しみだ。Yeah☆

## 『第7回本会議の感想』



多摩美術大学 美術学部工芸科3年  
秦七愛

釜ヶ崎での夜回り。ホッカイロを路上で  
寝ていたおっちゃんにおそろおそろ渡した。

その人は、受け取る時安心したような、困  
ったような顔をしていた。今思えばわたし  
も、同じような顔をしていたのだと思う。  
私はJRYCの活動を通して、人と人との繋  
がりについて考える機会が増えた。

去年、夏に私はルワンダへ行き、冬には  
ルワンダンが来日した。そこで彼らと一緒  
にいろんな人に出会った。ルワンダ人でも、  
日本人でも、どのような立場に居ても、出  
会った人たちは、みんな、優しくされたら  
嬉しいし、人と一緒に居るのは楽しいと感  
じていた。（楽しいことばかりではないかも  
しれないけれど）根本的なところでは同じ  
だと感じた。喜怒哀楽さえも、人とかわ  
るからこそ生まれている。招致中、マリ  
オンの家でマリオンのお母さんのおにぎり  
を食べた時、私はものすごい幸福感に包  
まれた。第7回の中で人の厚意に触れる機  
会が多々あり、その度私は幸せな気持ち  
をかみ締めた。「心の貧困」について考  
える機会があったことも影響していたの  
かなと思う。誰かと居て、コミュニケーション  
をとることで満ち足りた気持ちになれる  
のは「心の貧困」とは真逆だ。

今回、私が学んだのは人のそばに寄り  
添うこと、そこから生まれる何か、である。  
この経験は着実に私のこれからの影響  
してゆくと思う。これから何を  
するかが、ふんばりどころだ。

## 『初めての JRYC 学生会議』



大阪大学 人間科学部 1年  
日高 佐倭子

今回私は初めて学生会議に参加した。それは初めてのルワンダとの出会いでもあった。遠いルワンダに住む彼らが、ディスカッションテーマについて、あるいは実際に体験することで何を考えているのかわかった。その洞察力の深さに良い刺激も受けた。また関東メンバーとも長い時間を過ごせたので、関東・関西間の絆も深まったと思うし、お互いに刺激を受けただろうと思う。個人的な反省としては、もっと主体的に関わっていかなければならなかったということだ。初めてだからわからないと思うのではなくて、自分から積極的に立案に携わるべきだったと思う。この反省は次回に生かしたいと思う。全体的な感想では、一つ一つのテーマが深く面白いものであり、またそのテーマについて一生懸命に考え、議論できたのは学生会議の醍醐味だと感じた。また、休憩時間のコミュニケーションが関東・関西あるいは日本・ルワンダの壁を越えて同じ学生として笑い合える場とな

り、全体としての一体感が生まれたと思う。今回初めて参加したが、本当に貴重な経験ができたし、日本ルワンダ学生会議に所属していて本当によかったと思えた。次回の学生会議では、何かトピックの進行をできたら自分も成長できるのではないと思う。そして、最後になりましたが、協力していただいたみなさん、日本ルワンダ学生会議のみんな、ありがとうございました。

## 『ルワンダ人学生から学んだこと』



学習院女子大学 国際文化交流学部 1年  
星野 真希

初めてルワンダ人学生に直面した瞬間が忘れられない。見ず知らずの私にとってもフレンドリーに、優しく接してくれた彼ら。その瞬間は、私が今まで「ルワンダ人」に対する一種の固定観念が砕かれた瞬間でもあった。

そもそも私がルワンダという国に興味を持ち始めたのは、高校生の時に「ホテル・ルワンダ」の映画を見たからであった。その映画を見て、つい最近までルワンダにジェノサイドが行われていたことを知り、と

でも衝撃をうけたのを覚えている。そして、ジェノサイドのことについてもっと知りたい、ジェノサイドの後復興したルワンダのことが知りたいと思い、縁もあって「日本ルワンダ学生会議」の一員として活動してきた。しかし、先輩方が、ルワンダ人学生の話をしてまったくイメージできなかったし、招致も初めて経験することだったので、招致を企画しておきながら、具体的なイメージができなかった。「ルワンダ人学生はジェノサイドを経験しているので、心に深い傷を負っているのだろうか。」ルワンダ人＝ジェノサイドを経験したかわいそうな人達という固定観念で考えていた。実際にルワンダ人学生に出会う前までは。

しかし、彼らに出会ったとたんに、そんな考えはどっかにとんでいった。彼らは、とても人懐こくて、素直で、好奇心旺盛で、底抜けに明るかった。とてもジェノサイドを経験したかのように思えなかった。どこから彼らの強さがでてくるのだろうか？いくら小さい時とはいえ、家族や親戚、知り合いをなくしたらどこかに心の傷があるはずなのに・・・そのことは、私にとって衝撃的であった。

また、学生会議で「死刑制度」について話していた時の、ユージンの言葉が忘れられない。「どんな罪を犯しても、人を赦すことをしないとだめなんだ。そうしないと、負の連鎖が続いてしまう。」その時は、死刑制度を存続させるべきかどうか、各グループごとで話し合っていたのだが、死刑賛成の日本人グループに対して、ユージンはそんな一言を言っていた。おそらくジェノサイドを経験した彼らからしてみれば、人を赦すことはそう簡単なことではないし、簡

単に言えることでもないと思う。しかし、どこかで人を赦すことをしなければ、負の連鎖は続く。それは彼ら自身の経験から発せられた言葉なのだろう。その一言がとても重く感じられた。

また、ルワンダ人学生は常に国のこと、自分の将来を考えていた。「たとえ海外に留学しても、国に戻って貢献したい。」「農業関連の会社のマネージメントになってもっと国を豊かにしたい。」彼らはそのようなことを言っていた。恥ずかしい話だが、私は国のために何かをしたいとか、自分の将来について具体的に考えたことがなかった。実際に日本人の大学生でも、なかなか自分の国のことや自分の将来について深く考える人は少ないのではないだろうか。彼らの熱い信念には私自身大いに見習うこともあった。

私は招致が始まる前は、正直なことを言うと、招致の間は、「日本人学生がルワンダ人学生に日本について教える」だけだと思っていた。日本の貧困について教えたり、長崎の原爆について教えたり・・・。しかし、それは大きな間違いだということに気が付いた。日本人学生が、ルワンダ人学生に何かを教えるのと同時にルワンダ人学生も日本人学生に大切なことを教えていたのだ。私は今回の招致で、人を赦すことの大切さや、ルワンダの女性の社会進出が進んでいることなど、ルワンダについてたくさん学ぶことができたし、また自分自身を見直すきっかけにもなった。また今回日本の問題や歴史、文化をルワンダ人に紹介するにあたって、日本について知らなかったことがまだまだたくさんあることを知り、日本について詳しく知るよいきっかけ



にもなった。

最後にアルフレッドの言葉「みんなジェノサイドのことをきくけど、ルワンダはジェノサイドだけではない。ルワンダの今、未来そういったことにもっと興味をもってほしい。」感想はついジェノサイドとからめてしまったが、私は今回の招致で、ジェノサイドの歴史だけではなくルワンダの文化、現在、そしてルワンダの未来により興味をもった。まだルワンダには資源も主要となる産業もない。しかし、ルワンダ人学生の底抜けの明るさ、前向きさ、国に対する忠誠心などを見ていると、彼らのような人達がルワンダに存在し続ける限り、ルワンダの未来も決して暗いものではないなと思った。

これからも JRYC の活動を通して、ジェノサイドではないルワンダの部分をもっと知りたいと思うのと同時に、これからルワンダが発展するためにはどうしたらよいか引き続き考えていきたいと思う。

## 『企画を通じて』



東京大学 教養学部 4年  
満越 裕馬

今まで自分が関心を持ってきた国々（ロシア・中央アジア・中、東欧）だけでなく、色々な国について知りたいという思いから、

この団体の活動に参加しました。特にルワンダを含む中部アフリカ地域は経済成長が進んでいる一方で資源の奪い合いが生じているということを知り、興味がありました。

今回の企画は日本開催なのでルワンダやアフリカの現状について実際に目にすることは出来ませんでした。日ごろ知ることの出来ないルワンダの学生と交流できたことはいい経験になりました。

一番強く影響を受けたのはルワンダ人学生のタフさでした。企画の数日間、ルワンダ人学生が自分のマンションに泊りに来ました。明日朝から企画あるのに、全力で酒を飲み（自宅にあったアルコールが全て空けられ）、深夜は大音量で音楽をかけて踊り、朝ぎりぎりですきる。こんな日々が3日間続いて自分にとっては体力的にも精神的にも限界な状態でした。これが向こうでの日常かと思うと、超えられない壁をひしひしと感じました。

また、個人的な問題ですが、英語の必要性を痛感しました。今まで英語を使う機会がなかったため全然勉強しておらず、結果として今回の企画全体を通して散々な状況で、言いたいことも言えず歯がゆい日々を過ごしました。この経験を今後に生かしたいと思います。

## 『学生会議という小

## 宇宙』

関西学院大学 法学部 3年

山崎 暢子

まず第7回本会議のうち、参加した大阪での三日間についての全体的な感想を述べ、次に、二年目となった日本ルワンダ学生会議(以下、JRYC)の活動を通して感じた当学生会議の特徴についての個人的な考えを記す。

大阪では、くどいようだが「貧困」というテーマを軸に、大阪の釜ヶ崎というエリアを訪れ、フィールドワークをまじえて日本の「経済発展」のあとにのこされた様々な課題について学んだ。長崎から北上してきたメンバーと関東方面から到着したメンバーも合流してからの三日間はそれこそあつという間に過ぎ去り、別れるのが惜しかったが、当日を迎えるまでの期間は恐ろしく長く感じられた。その要因の詳細はここでは割愛するとして、今回の大阪訪問は、第5回学生会議でも取り上げられていた「無縁社会」やBIG ISSUEでの話とリンクする部分が少なくなく、各トピックに十分な時間を割けることになった。

さきほど、経済発展のあとにのこされた様々な課題、と述べたが、経済発展のひとつの結果として発生したいくつかの課題について、解決にむけた数々の取り組みはこれまで何度も実施され、福祉などの分野では非常に先進的なモデルとなっている取り組みもあることを忘れてはならない。ある

いは、まちあるきの際や炊き出しの時にもよく見かけた「コミュニティスペース」なる空間も注目される。気の向くまま誰でも立ち寄ることのできるこの場所は、単身者が多く暮らすこの地域において、人と人の接点となりうる特別な意味をもっていると感じた。また、炊き出しや夜回りに参加する高校生や大学生も多くいて、各活動をまとめて情報交換の場を設ける取り組みを行う学生の主体的な姿からは学ぶものがあった。私達は今回、年末の三日間だけ訪れた。しかしそこには毎日、何年も暮らしてきた人の生活があり、そこに寄り添っている人達の生活もまたあるということを知った。わかったふりをするのが一番よくないと思い、とにかくわかっているのは、私はここでの三日間をいまだに消化しきれないということだけである。書ききれなくなるので、ここで学んだことが実践されて初めて企画は実現するのだと考えながら、次の話に移りたい。

学生会議の特徴は次の三点にあると思う。一点目は、ルワンダと日本についての学びを通して、より広い社会に対しても関心を向けるようになる可能性があること。二点目は、自分の考えをオリジナルの言葉で表現できるようになること。三点目は、本会議での活動を通じて様々な人と知り合えることである。

一点目について。これは、もともと社会にある様々な問題について広く関心を持っている人の場合にはあてはまらないかもしれないが、私の場合は「ルワンダについて知りたい!」というところからスタートしたこともあってか、ルワンダのことを知りたいのだけれどルワンダだけを見ていても

どうもよくわからない、ということで新しくアンテナを立てる作業が必要になった。ルワンダを知ろうとすると、ウガンダやコンゴ民主共和国、ブルンジ、タンザニアといった隣近所との関係も気になりだす。あるいは、かつて影響力を持っていた国のことも知らなくてはならない。一方で、ルワンダの人と話すときに「へえ、ルワンダってすごい！日本では…」といった具合に日本のことを引き合いに出せると、相手に日本を知ってもらえるし、自らの理解の助けにもなる。しかし説明できないとなると、ルワンダの情報を受信しっぱなしになるか、気まずい沈黙を味わうことになる。このアンテナ工事は、ルワンダ人学生と始めて対面した昨年度の日本招致(第5回学生会議)を機に急ピッチで進められることになるが、付焼刃的な知識が身ににならないことには薄々気付きながらも、アンテナに引っかかったなかで問題意識を掘り下げることになるものもあった。

二点目について。様々な所属、専攻の学生が集まることで、同じフィールドの共通言語を使用する安心感に浸ることはできず、議論が散漫になりかねないからこそ、誰にもわかりやすい言葉であらゆる表現を何度も試みる姿勢が身につく。また、私は他の人に理解してもらおう文章を書くことが下手(致命的!)で、企画書は何度も書き直しになった。最終的に提出したものを読み返してもやはりどこか変な感じがする。話すにしても、しまりのないことをもごもご言ってばかりだが、ここでの活動を通して、意見したいときには手を挙げてでも(人の話はさえぎらないように…)発言しようとする気概は持てるようになったと思うし、普

段なじみのない分野を学ぶ学生と交流できることでやはりたくさん刺激を受けることができたと感じている。そして、話をするなかで、意味がわからないと言われればやはり辛いし、頷いてもらえて手ごたえを感じたときは素直に嬉しかった。

そして三点目。本当に多くの方と出会い、お世話になり、時にご迷惑をおかけすることもあった。ルワンダについての勉強会に顔を出してくれた人達、学生団体の合同新歓で出会った人達、アジアやアフリカの料理もふるまわれる映画祭に来ていた地域の人達、大学にお招きして講演をして頂いたNGOの方、今ここに挙げたのは2011年度2月現在に関西でおこなった活動に限られるが、それだけでもかなりの数になる。いずれも、舞台裏で奔走してくれた方々がいたから実現した場であり、その時々に出会った人達の支えを得て、当日も素晴らしい時間を過ごすことができた。

こうしてみると、どこの団体でも同じような体験はできそうである。実際、どこでも経験できることかもしれない。何の因果か、私は偶然ここで上記のことを体験することができた。第6回、第7回本会議を経て私自身が進歩したかどうか正直わからない。むしろ後退している面も多分にあると思う。今の私からはいくら叩いてもたいしたもののは出てこない。しかし何故ルワンダかと聞かれれば、それは難しいことではなく、人なつこい笑顔や温かいもてなし、また会いたいと思わせてくれる人間性という、回答がすぐに浮かんだ。こうした国や人との出会いは、この先も増えていくことになると思うが、そのなかでも重要な位置を占めるひとつとして、ルワンダはあり続ける

はずである。

自由なような、かといって制約も少なくない学生という存在を主体とする学生団体は、およそ1~4年というスパンで人が入れ替わり不安定な状態におかれがちであるが、そこをフォローできるのが活動理念であり、団体としての方向性、ということになるのだろうか。しかしひとつの理念のもと、方向性を見失うことなく進み続けるというのは神業に近いと思う。紆余曲折しながらも団体を引っ張っていこうとする底力をもつ複数の活力ある学生を間近に見て、ただただ圧倒されるばかりであった。いろんな意味で、勉強がたくさんできる場所が学生会議だったと思う。

第6回本会議で、あるメンバーが言っていた言葉が、第7回本会議を終えた今もずっと印象に残っている。それはたしか、生きようとする人の力強さがなんとかという内容だった。第7回本会議の下見で長崎を訪れたときの感動も忘れ難い。何故ルワンダかと問われてもうひとつ答えるとすれば、この活動の根底には、ルワンダで、日本で起きた悲劇を繰り返さないために何を伝えていくかに自覚的であることができる、ということだ。

学生会議の発足がビッグバンとして、どこからともなくひかれあい集まった知が化学反応を起こし、メンバーの入れ替えという時代の転換期を経て、やがて言葉を覚えた集団は舌戦を繰り広げ、今の学生会議を形成してきたと思う(勝手な想像です)。長く葬り去られていた考えが再び脚光を浴びることもあれば、恐らく二度と日の目を見ないというものもあったことだろう。学生のうち、有り余る時間とエネルギーを、得

体の知れない黒い穴に注ぎこむとして、せっかくなら、少しわかりにくいことに手を出してみるのも面白いと思う。飲まれてしまって出口を見失ってはいけないが、ぶつかってみるとはね返ってくるものはあると思う。

結局わけのわからない感想文になってしまい、しかも期限を大幅に遅れての提出になり本当に申し訳なかったですが、ここで締めくりたいと思います。ありがとうございました。



National University of Rwanda  
Alfred Ntaganda

第7回本会議全体について振り返ると、本企画は私にとって特別なものであった。私たち自身が社会に貢献できるような活動を取り入れた点で、過去の会議とは違っていた。例えばホームレスの人々と交流しディスカッションではその問題について話し合った。また、小学校を訪問する新しいアイデアも登場した。滞在の最後にはプロジェクトワークに取り組み集中して話し合いを行うことによって毎日の生活で活用できるようなアイデアを得たり、自分の国のためにできることについて考えて、私の視野は広がった。

こうして本会議が全て終わってみると、当初予想していた以上に企画が成功したことに満足していた。

最後に、本企画のために労力と時間を割いた全ての日本とルワンダのメンバーに感謝を述べると同時に、今後も活動に精一杯取り組むように応援したい。

あまね、ゆいか、ともこ、しながわ、すすむ そして他の全てのメンバー

「ありがとうございます」



National University of Rwanda  
Eugene MAZIMPAKA

まず第7回本会議の良かった点は、学生会議のトピックが興味深く、進め方もよくまとまっていた。時間を共にし、良いアイデアを共有し、そして日本側はとともよくもてなしてくれた。改善すべき点として、コミュニケーション(通訳)が挙げられる。5人の通訳がつくよりも1人が通訳をする方が良い。また、日本側は次回本会議に来るルワンダ人学生の知識を増やすために例えば電車の切符の買い方や料理の仕方について教えてあげると良いだろう。

最後に、私が成田空港でも伝えたように、JRYCは日本とルワンダを知る架け橋となる。私たちは日本人メンバーが次回ルワンダに来る際、私たちのベストを尽くしてルワンダをもっと知ってもらいたい。

ありがとう、今後も連絡を取り合い、手と手をとって活動を続ければ、JRYCは更に精力的なものとなるだろう。



National University of Rwanda

Alice Nadine Kaneza

2011年12月19日、私は日本に行き、日本の友達に会うことをとても楽しみにしていた。今回は私にとって初めての先進国、初めての日本だったため、どうやって、何を、いつ、といったようなたくさんの疑問や驚き、困難（長時間のフライト、食事や寒さ）と同時に、幸せな気持ちとこれから何が待っているのだろうという好奇心で胸がいっぱいだった。

日本での滞在はすばらしい経験となった。友達に会うことができ、彼らはとても優しくもてなしてくれ（特にすすむと唯香の家にお世話になった）、そして問題解決能力を兼ね備えていた。

人々がどれほど忙しくしているかを日本に来るまで気付かなかった。日本では電車内でも人々は休まずに何かをしているのだ！「時は金なり」というが、まさに日本はこの姿勢によって発展してきたと感じたから私も取り入れたいと思う。また、日本人はミーティングが終わると使った部屋を綺麗に片付けるが、ルワンダでは異なる。使った人はその部屋から立ち去るだけで、そのあとその部屋を仕事として片付ける人が来るからだ。

さらに、日本人の父親とルワンダ人の父親の役割も異なると感じた。ルワンダでは乳幼児の面倒は母親のみによるからだ。

日本人学生は優秀で、また、勉強に必要なものを全て持っているが、私たちは優秀であっても勉強に必要な道具が足りていないので、状況は良くない。私たちにはまだまだ長い道のりがある。

今回の本会議で日本側もルワンダ側も実行すべき多くのアイディア、解決策や目標を考え出すことができたので、私たちのミッションである文化的・学術的交流を更に活発化するため、多くの学生会議を続けたい。

ルワンダ側、そして日本側両サイドの努力に感謝したい。



National University of Rwanda

INEZA MUKAMUKIZA Marie Gerardine

日本ルワンダ学生会議第7回本会議はとても良く準備されていたと共に、私にとっても先進国での滞在は初めての経験だったので、日本に滞在できてとても幸せでした。日本の多くのものが私にとって新鮮で、そして母国であるルワンダとは大きく異なっていたため、最初はとても驚きましたが、最初の東京での滞在では何かにつけてメン

バーが親切に手助けをしてくれたのでとても助かりました。ホームステイでは御家族の皆さんが全てのメンバーに分け隔てなく親切にして下さり、日本の家庭というものを知ることができました。最初の東京での滞在の中でも特に私にとって印象的だったことは、日本人の時間に対する感覚です。ホームステイ先から早稲田大学まで移動する際にとても走ったことや、コンサート後に急いで退出したことなど、時間に対して日本人がどれほど敏感かを知ることが出来ました。ルワンダカフェイベントの経験やメンバーが一生懸命通訳を頑張ってくれたコンサートイベント、小学校での授業等を通して、小学生や大学生、御両親の方々など沢山の日本人の方々と交流することができてとても良い経験になりましたし、日本人の皆さんはとても親切でした。

長崎はとても寒かったですが、山脇佳朗さんの講演を聴き、さるくで長崎の街を回り、そして長崎の素晴らしい風景を楽しむことができ、とても貴重な経験をすることができました。特に長崎の歴史を勉強した時、私は長崎がどのように復興を遂げるのか全く想像できなかつたので、復興後の姿を実際に見ることができてとても勉強になりました。クリスマスには教会でのミサやゲストハウスでの夜のパーティを経験し、とても楽しい一日を過ごすことができました。また、長崎大学の学生や留学生との交流や、ブライアン・バークガフニ教授の講演もとても良い経験でした。長崎での滞在を全体的にサポートしてくれたメンバーの奏とその御家族の皆さんにはとても感謝しています。

大阪では日本の貧困問題について学び、

日本という国にもホームレスの様な方々がいることにとても驚きを受けました。これは都市化、経済発展による影響だと私は考えていますが、経済発展につれて人々の他者への関心が薄くなってしまっているのだと感じました。ホームレスの方々のために夜回りや炊き出しを経験したことはとても良い経験だったので、このような機会を用意してくれたことに感謝しています。今後も今回の大阪で知った様なホームレスの方々を助ける団体とは関係を続けて行くべきだと思っています。日本のような先進国にもホームレスの様な貧困問題が存在することに衝撃を受けた一方で、西成プラザで元ホームレスの方々が行っていた紙芝居にもとても感銘を受けました。特に 82 歳と 91 歳のお爺さんがとても上手に紙芝居を演じていたことには驚きました。また、大阪では生まれて初めて水族館に行きましたが、とても楽しかったです。

再び戻ってきた東京ではちょうど年末年始で、自由時間でした。家族と過ごさない年越しは私にとって初めての経験だったのでとても不思議な感覚でしたが、ホームステイ先である真希の御家族のおかげでとても楽しい時間を過ごせました。また、在日ルワンダ共和国大使館に訪問し、日本ルワンダ学生会議の活動について大使にお話できたことは私達にとってはこの上ない喜びでした。学生会議では以前起きたような不毛な口論は発生せず、お互いが真剣に日本ルワンダ学生会議に対する想いを語り、考えを共有し語り合っていたので、とても良い形で進めることができたと思います。プレゼンテーションでも各々が担当するトピックについて深く準備を行っていて、実り

のある時間を過ごすことができ、多くのことを学べました。プロジェクトワークでは途上国と先進国との学生の間で「発展」に関して意見を交わし、特にルワンダが今後どのように発展すれば良いかについて、相互に考えを共有することができたことはとても良い経験になりました。

改めて、第7回本会議に参加することができて本当に良い経験をすることができました。この素晴らしい機会を用意してくれた日本のメンバーに感謝の意を表すと共に、私達の招致に協力して下さいた全ての日本人の方々に感謝申し上げます、有難う御座いました。ルワンダに帰国し、既に日本のメンバーが恋しいですが、親友との再会の日を楽しみにしています。



National University of Rwanda  
Theogene Majyambere

この度の第7回本会議はとても良く準備されていて、目的を果たすことが出来ました。

私たちが日本にいる間、日本人メンバーはいつも私たちを気にかけてくれたのでわたしたちは“genki”でいられました。私は日

本人メンバーから多くを学んだので、次に日本人がルワンダに来る際には全力でもてなしたいと思います。

ホームステイをしたことは素晴らしい経験となりました。なぜなら、家族を含めお互いを知り、心から話し合うことができたからです。特に、まるでアーティストのような奏のご両親と一晩中共に踊り、歌い、演奏したことはずっと忘れないでしょう。クリスマスミサに行ったことも良き思い出です。また、日本とルワンダの間の生活水準は比べ物にならないことも分かりました。

私たちが JYRC の活動より良いものにするために話し合ったことをさらに検討し、そして維持していきたいです。これにより、JRYC はさらに成長するでしょう。



## 【第五章】

### 付録

---

メディア掲載.....	146
後援.....	150
助成団体様.....	150
ご協力いただいた方々.....	150
写真館.....	152
おわりに.....	154

# メディア掲載

・2011年12月22日 神奈川新聞 より

2011年(平成23年)12月22日

ルワンダの踊りを披露する学生ら  
—鎌倉市立山崎小学校



## ルワンダを知って

### 鎌倉の山崎小 大学生と交流

アフリカ・ルワンダの大学生らが21日、鎌倉市山崎の市立山崎小学校を訪れ、同校の6年生約110人と交流した。ルワンダと日本の学生交流に携わる同校の卒業生らが中心に企画。お互いに歌や踊りを披露するなどして相互理解を深めた。

企画したのは両国の学生交流などに取り組む日本ルワンダ学生会議。ルワンダを中心にアフリカの多様性を小学生に伝え、学生会議の活動の幅を広げていこうと、同校卒業生で副代表を務める久保唯香さん(20)らが中心となり、学校側に働き掛け実現した。

当日訪れたのはルワンダ国立大学の学生ら5人。登壇とともにルワンダのダンスを披露すると、児童らの目はきき付けに。グループに分かれた質疑応答では、児童らが「大学はどんなところ?」「どんなものを食べているの?」などと尋ねた。ルワンダの学生らは大校内に森があって、サルもいるんだよ」「パンやバナナ、豆などを食べています」などと返答。児童らがソーラン節の踊りや剣道の動きをして見せたり、一緒に歌を歌ったりと和気あいあいだった。

「ルワンダのオムレツは具たくさんと聞き、食べてみたくなった。英語でルワンダの人と話せるようになりたい」と橋本龍人さん(12)。ナガンダ・アルフレッドさん(26)は「ルワンダの文化や現状を広く知ってくれば」と話していた。

(中馬 健作)

・2011年12月25日 毎日新聞長崎版 より

長崎

文字サイズ変更 小 中 大

ツイート 1

Recommend

チェック

この記事を印刷

## 文化交流:「経験語り継ぐ大切さ」学ぶ 被爆講話にルワンダの大学生 /長崎

90年代まで民族対立が長く続いたルワンダの大学生5人が24日、文化交流で長崎市を訪れた。初日は被爆者で「非核特使」の山脇佳朗さん(77)の講話を聞き、原爆資料館を見学。26日まで滞在し、長崎市の観光やキリスト教文化などを学ぶ。

「日本ルワンダ学生会議」が招いた。08年から関東・関西の大学生とルワンダの大学生で運営し、相互訪問で理解を深めている。ルワンダは62年にベルギーから独立後も民族対立が続き、94年には100日間に100万人が犠牲になる大虐殺も起きたが、情勢が安定してからは急速に経済成長している。

山脇さんは11歳で被爆。爆心地から約500メートルの工場で働いていた父の遺体を探し、兄弟で焼いた。ルワンダの学生たちは山脇さんの体験を真剣な表情で聞き「若い世代に何を期待するか」「その後には代々生まれた若い人の体に(放射能の)影響はないか」などと質問していた。ルワンダ国立大のマジャンベレ・テオジェンさん(24)は「私たちの国も悲しい虐殺を経験しているので、山脇さんの話に胸が痛んだ。つらい経験を語り継ぐ山脇さんの活動はとても大切」と話した。【蒲原明佳】

〔長崎版〕

・2012年1月28日 朝日新聞長崎版 より

## 長崎に学ぶ平和 ルワンダ人学生5人を交流団体が招く



長崎について学ぶルワンダの学生ら＝長崎市

民族間の内戦で94年に100万人が虐殺されたルワンダから、大学生5人が国際交流で長崎市を訪れた。学生交流団体「日本ルワンダ学生会議」が招いたもので、「原爆、平和と復興」をテーマに長崎の歴史や文化を学んだ。

長崎総合科学大のブライアン・パークガフニ教授の講義では、教授が「長崎からの平和のメッセージは反核ともう一つ、他文化による平和的共存だ」と語りかけると、学生たちは真剣な表情でメモを取った。

長崎滞在中は、学生会議メンバーで長与町出身の大坂大外国語学部2年、今泉奏さん(20)が「原爆と性質は違うかもしれないが、同じ虐殺を経験した長崎とルワンダは相通じるものがある」と考えて提案したという。

被爆者の山脇佳朗さんの講話を聞いたルワンダの学生、アルフレッド・ンタガンダさん(26)は「ショックだった。若い世代が聞いて伝えていかねければならないと思った」と話していた。

# ナガサキ 平和リレー



192

「ルワンダと長崎。千の丘の国と坂の町。キリスト教文化。夜景もそっくりなんですよ」。学生団体「日本ルワンダ学生会議」のメンバー今泉奏さん(20)が大阪大外国語学部2年IIが教えてくれる。もう一つ、ともに平和を願う地であること。被爆とルワンダ虐殺(94年)の過去。昨年12月24〜26日、「学生会議」のメンバーが初めて長崎を訪れた。

独立後も内紛が続き、94年に80〜100万人が虐殺されたルワンダ。が、情勢が安定してからの経済発展はめざましく、学生会議は、虐殺だけでなく互いの生活や文化を学び合おうと08年に設立。両国の大学生約60人が年に2回、ルワンダか、日本で集まり歴史や産業、宗教学、恋愛などを幅広いテーマで意見を交換する。10年冬には広島市も訪れた。

今泉さんは長与町出身の被爆3世。大学ではケニアなどの公用語スワヒリ語を学ぶ。大阪に出た2年前の8月9日。県外では午前11時2分のサイレンが鳴

## 遠い国に思いはせ

らないことを知り衝撃を受けた。その2週間後、学生会議のメンバーと初めてルワンダに渡った。国の南部、虐殺の追悼の地になっている建物には、まだ数百体の行き場のない遺体が積まれていた。

「長崎はルワンダであまり知られていないけれど、共有できるところはたくさんある」。長崎出身者として「自分が声を出さなければ」と、昨年冬の会議で長崎を訪問することを提案、実現した。

クリスマス・イブの24日、長崎原爆資料館の溶けたロザリオにルワンダの学生は見入った。被爆者、山脇佳朗さん(78)の講話を聞いたマジャンベレ・テオジェンさんの母は「語り継ぐ彼を尊敬する。私たちが虐殺を知っているから、胸が痛い」。滞在最終日、長崎の高



長崎の高校生やルワンダの大学生と意見を交わす今泉さん(中央)

校生や留学生とグループも感じた。ブディスカッションをした。司会を務めた今泉さんは、それぞれの出身国での平和教育について聞いた。ルワンダのカニーザ・ナディンさん(22)は「虐殺でも共通するところがある。お互い理解し合おう。語り継ぐ難しさを感じる。分らないから話せよう」と話す。【蒲原明佳】

「ナガサキ平和リレー」は毎月9日に掲載します

## 12/28 ハトロールの ほうこく

南まわり 136人、医療センター5人  
今年、42年日の越冬闘争、医療  
ハトロールは、12/28から1/7の夜  
までやります。炊事班のサポート  
めくめくのおむすびを手わたしました。  
かんろう) ルワンダからきたあにいさん  
... 日本の若者のために、とんとん参り  
して、ほかの若者に伝えてほしい。  
このか、ひとりの人を大切にすゝ行動  
たと思ふ。

昨日、今年も  
ハトロールは  
準備が開始され  
原バトロールも  
センター前では  
められた。  
愛の島の仲間が来  
たのしみ、4日の「おれまいり」を闘おう。  
今年一年で、オレたちを取りまく環境は大きく変  
った。  
大不況、大失業者時代の深まりという環境は、基本  
的に変化はしていないが、2つの大きな出来事や、ま  
れるオレたちに直接関係する出来事が起きた。  
その一つは、3・11東日本大震災と、原発事故だ。  
災害の復旧、復興のため、全国で物不足が発生した

## 後援

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC)

ルワンダ国立大学(National University of Rwanda)

在ルワンダ日本国大使館

駐日ルワンダ共和国大使館

アフリカ平和再建委員会(ARC)

鎌倉市教育委員会

## 助成団体様

独立行政法人 国際交流基金

財団法人 双日国際交流財団

国際基督教大学 同窓会主催 ICU ドリームコンペ

## ご協力いただいた団体・個人の皆様 (順不同)

早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター (企画助言・公認)

早稲田大学国際コミュニティーセンターの皆様 (ICC ルワンダカフェ企画協力)

早稲田大学 (会場提供)

鎌倉市立山崎小学校 (授業、交流企画)

神田亜紀様 (コンサート MC)

SUGEE (杉崎仁克) 様 (ジャンベ演奏)

神谷伸彦様 (イベント出演)

多摩美術大学ジャンベ部の皆様 (ジャンベ演奏)

長崎大学 (会場提供)

ロータリークラブの皆様 (留学生参加協力・食事提供)

長崎活水高校平和学習部の皆様 (交流会参加・活動紹介)

山脇佳朗様 (被爆体験講話)

長崎総合科学大学 人間環境学部教授ブライアン・バークガフニ様 (講義)

今泉 宏様 (長崎さるくガイド・活動助言)

即興楽団 UDje 様 (交流企画)

紙芝居劇むすび様 (交流企画)

平川隆啓様 (釜ヶ崎における活動助言・スタディーツアー)

岡本マサヒロ様 (釜ヶ崎における活動助言・スタディーツアー)

今泉家・久保家・小坂家・井上家・品川家の皆様 (ホームステイ先)



# 写真館







## おわりに

2012年1月、5人のルワンダ人学生は日本を後にし、遠い大陸に向けて飛び立ちました。本年度もまた数々の物語を生んだ日本招致（第7回本会議）が、大団円を迎えたのです。

慌ただしい年末年始が過ぎ去り、ほっとしたのも束の間、すぐ後ろには試験というビッグイベントが控えている、しかも極寒の時期に開催する本会議。今回は東京、大阪、長崎を行脚することになりましたが、その移動距離をものともせず、各地での取り組みを通してよく学び、話し、歌い踊り、そして相互理解を深めることができたのではないかと思います。一年以上をかけて準備をしてきたひとつひとつの企画を実現させるため、各メンバーがはらってきた努力に思いをはせると、インターネットや新聞記事に取り上げて頂けたことは、今後の活動の励みになるとともに、若い世代として何を受け継ぐのか、これからどのように伝えていかなければならないのかを責任と自覚をもって考えるきっかけにもなりました。とりわけ東日本大震災を経験した2011年以降、本学生会議が果たす社会貢献のあり方を意識させられる場面にも行きあたりました。しかし、私達がルワンダの学生と交流する意味は、つきつめて考えれば、人と人の繋がりを問うているのだと思います。それは困難な状況にぶちあたっても簡単に無くなるものではなく、互いを思いやり、相手の痛みを寄り添うこと、あるいはなじみの冗談を言って笑いあえるという単純なことかもしれません。そのような関係を築けるようになってきたのも、これまでの交流を続けることができたからこそだと思います。一人ひとりの学生が思う相互理解やルワンダとの関わり方と、団体としての方向性の融合点が模索され続けるなか、三度目となる日本招致を終えて、日本ルワンダ学生会議の活動は地に根付き歩を進め、新たな局面にさしかかろうとしています。

最後になりましたが、この第7回本会議を無事終えることができたのは、多くの方々からの支えがあったからでした。若さゆえ、幼さゆえに数多くの有り難いご指摘、叱咤激励を頂くこともありましたが、それらの声を素直に受け止め、成長のばねにしていきます。また、変わらぬご声援を下さる方々、温かく見守って下さる方々に今一度、心より感謝申し上げます。

関西学院大学法学部国際関係コース3年  
山崎暢子



この事業は国際交流基金、双日国際交流財団、国際基督教大学同窓会主催ドリームコンペの資金協力の下で行われました。経済的な面で支えてくださった各財団の皆様、及び各活動を支えてくださった多くの皆様に改めて深く御礼申し上げます。

日本ルワンダ学生会議 第7回本会議活動報告書

---

2012年3月20日 第1版発行

発行元 早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）公認

日本ルワンダ学生会議

編集 滝田 知子